「ドラゴンスレイヤーの冒険」

イリン

序章

　この世界は弱肉強食だ。

　人間、魔物、ドラゴン、魔族、悪魔──すべての存在は死を避けられない。

　弱者から淘汰され、強者もいつかより強い者に命を奪われる。

「この世界で生き残る方法は何か？」

　答えはない。すべてが理不尽に死んでいく。

　それでも、探し続ける。

　どこかに、生きる意味があると信じて。

　高くそびえる山、その頂には威圧的な魔王城が鎮座している。だが、今その城にはいつもの不気味な静けさがない。風に乗って、不安に駆られたささやきや、鎧のこすれる音が冷たい石壁に反響していた。

　魔王の座が揺らぎ、城は混乱に包まれている。

　蒼白な顔をした魔人たちが慌ただしく廊下を行き交い、使い魔の小走りする音が床に響く。その中には、門を固める魔人や戦闘準備に忙しい兵士の姿もあった。

　フレッドは、なぜ今このような事態に陥っているのか理解できなかった。ただ一つわかることは、この魔王城がかつてない窮地に立たされているということだけだった。

「父上、いや、魔王様は誰にやられたというんだ？」

　フレッドは近くにいる魔人に問いかけた。

「詳しくは分かりませんが、恐怖の悪魔だと思われます」

「恐怖の悪魔？なんだそれは？」

　フレッドは眉をひそめる。

「……古くからの知り合いだと聞いています」

　魔人は目をそらす。

　フレッドは凍りついたように立ち尽くしている。

「父上が……知り合いにやられたと？」

　魔人は黙って頷く。

　フレッドの心は混乱と怒りでいっぱいだった。魔力が高まり始めるのを感じたが、突然、後頭部に衝撃が走り、意識が遠のいた。

「ったく、危ない奴だ。下手したら魔力が暴走して、魔王城が大変なことになっていたぞ」

　フレッドを抱えながら、魔人がため息混じりに呟く。

　近くにいた魔人が苦笑を浮かべながらも、気を取り直してフレッドを抱えているセンテンに話しかけた。

「センテン様」

　その声に反応して、センテンは振り返り、フレッドをしっかりと抱え直しながら、話しかけてきた魔人に答えた。

「頭を下げなくて良い。それにまだ父上は生きている。まぁ、植物状態のようだから、目覚めるのにどれくらいかかるかわからないがな」

　センテンはあたりの騒がしい様子に面倒臭そうな表情を浮かべたが、すぐに切り替えて真剣な表情になり、大声を張り上げた。

「まずは落ち着け。お前達！！」

　その声は魔王城全体に鳴り響いた。センテンは魔王城全体に聞こえるように音声魔法を使っていた。その声による覇気は、慌てていた魔人達を落ち着かせるのに十分な力があった。先ほどまでの喧騒とは裏腹に、城内はしんと静まり返った。

　完全に静かになったのを感じると、センテンは満足そうに頷き、先ほどよりも少しだけ声の音量を下げて話し始めた。

「魔王様、我が父上がやられてしまったことで皆不安であろう。しかし父上はやられはしたが死んではいない。父上が目覚めるまで我が魔王代理としてお前達を導いてやる。異論があるやつは我自ら直々に相手をしてやる。1日間は闘技場にいてやる。我に勝てれば、もちろん魔王代理はそのものが引き受けて良い。では、明後日までに挑んで来るものがいなければ我を認めたことにする」

　そう言い終えるとセンテンは魔法による念話を切った。

「さすがでございます。センテン様。あれほど不安に満ち、騒がしかった魔王城が一瞬で冷静さを取り戻しました」

「面倒ごとは嫌いだが、やらなきゃならない時は誰にでもあるからな。それが俺にとっては今だってことだ。とりあえず、フレッドを医務室に連れて行ってくれないか？俺はさっきの放送の通り闘技場に行かなければいけない。はぁ、いやだいやだ。忙しいのは本当に面倒くさい」

　センテンは不平不満を漏らしながらも、歩を止めなかった。足音が石の床に響き、彼の緊張した呼吸がその背中越しに伝わってきた。今、歩を止めてしまったら、この先の魔族が滅んでしまうことを肌で感じ取っているからだ。

　そのため、嫌なことでもセンテンは率先して行う。なぜなら、彼は魔王の息子だからだ。

「立派でございますよ。センテン様」

　センテンの覚悟の大きさを彼の背中で感じ取った魔人は、関心したように言葉を漏らしていた。その背中を見送った後、フレッドを医務室に連れて行った。

　魔王城での慌ただしい一日、それは始まりに過ぎなかった。

第1章　冒険とはわくわくするものである

　ギルドの依頼を終えて王都アストリアに帰ってきたヨルは、いつもとは違う賑やかさに気づいた。石畳の道には笑い声や歓声が響き、陽光が反射する白い城壁を一層輝かせていた。空気には甘い花の香りが漂い、人々の楽しげな声が風に乗って耳に届く。

「魔王が討ち取られたらしい」

　周りの会話に耳を傾けると賑やかさの理由がわかった。人々はその知らせに心から喜び合い、至る所で祝福の声が上がっていた。

「めでたいことではあるが、俺にとってはしゃぐことではないな」とヨルは思った。お祝いムードのため、王都アストリアの通りは人で溢れ、歩きづらさに苛立ちを感じた。

　人混みをかき分けながら進む中で、肩がぶつかり合い、歓声が耳障りに響く。ヨルは眉を顰めつつ、ギルドへと足を運んだ。ようやく目的地にたどり着き、木製の扉を押し開けると、そこもまたお祝いムードで賑わっていた。陽気な笑い声がギルドの空間に満ち、酒の香りと共に活気が感じられた。

　ヨルは楽しそうにしている人々に迷惑をかけないよう、ギルドの受付嬢カナの前へと歩み寄った。

「お疲れ様です、ヨルさん」とカナが笑顔で声をかける。

「魔王が倒されたらしいね。王都はなかなか良い雰囲気だ。まぁ、人混みはちょっと苦手だから、俺にとってこのお祭り騒ぎはきついが」とヨルは軽い口調で答えた。

「それは申し訳ないです。ところでヨルさんは魔王が誰に討ち取られたのかご存じですか？」

　カナが笑顔で尋ねた。ヨルはその質問が妙に感じた。

「えっと、魔王を倒したのって勇者じゃないの？」

　カナは少し困った表情を浮かべて答えた。

「ヨルさんも知りませんでしたか。まだ確定ではないですが、どうやら勇者様が魔王を倒したわけじゃないみたいなんですよね」

　その言葉にヨルは眉を顰めた。

「勇者以外で魔王を倒したとなると誰になるんだ？それに、人類で勇者以外に魔王に勝てるやつなんているのか？」

　カナは顎に手を添えて少し考えるそぶりを見せた後、口を開いた。

「世界は広いですからね。どのような場所に強い人物がいるか分かりません」

　カナは笑顔を浮かべ、ヨルの方を見つめる。その瞳には、ヨルの強さに対する期待が含まれていた。

「ところで、今日ギルドにきたのは別に魔王が倒されたお祝いをしに来たわけじゃないんだ」

　ヨルは話題を変えるように、手にしているバッグからギルドの依頼書の紙と、バッグからドラゴンの爪を6個、目玉を4個、鱗を10個机に並べた。

「前から思っていましたがヨルさんのバッグは、長期の旅には向かないと思うんですが」

「そうか？俺は結構気に入っているんだがな」

　ヨルは自分のバッグを見る。鉄製の黒色のバッグでかなり頑丈だ。

「いえ、満足しているのなら大丈夫です。差し出がましいことを言ってしまい申し訳ございません」

「別に気にしていない。今回の依頼のアイテムの確認をお願いする」

　ヨルは机の上に並べたドラゴンとの戦利品を指し示した。

「はい、ありがとうございます。今回の依頼ですね。アイテムを確認いたしますので、少しお待ちください」

　カナはアイテムをカゴに入れ、眼鏡をかける。彼女の手元で、ドラゴンの爪や鱗がカゴの中でカチリと音を立てた。

　ヨルは、カナがアイテムを確認する間、周囲のお祝いムードを感じながらのんびりと待っていた。酒の香りが漂い、賑やかな笑い声と歓声が耳に響く。彼の心にはほんの少しの安らぎが訪れた。

「確認終了しました。特に問題ございません」

　カナはメガネを外し、笑顔を浮かべた。

「ではこちら今回の依頼の報酬になります」

　カナはカウンターの引き出しから金貨3枚取り出し、ヨルに手渡した。金貨が手のひらに乗ると、その冷たい感触が心地よく伝わってくる。

「金貨3枚。うん、確かに受け取った。ありがとう。……ところで、また今回のようなドラゴンに関する依頼はないのか？」

　ヨルが金貨を鉄のバッグにしまいながら尋ねると、カナは1枚の依頼書を取り出しヨルに渡す。

「ドラゴンの依頼ならちゃんと取ってありますよ。ヨルさんが戻ってきた時に渡そうと思っていたものです」

　用意がいいな、とヨルは微笑み、依頼書の内容を確認する。紙の質感が指先に伝わり、インクの匂いがほのかに漂ってくる。

「ファラクス山か。結構遠いな。往復の道の時間なども考えると1ヶ月くらいはかかるな」

「どうしますか？」

　カナはヨルの答えを知っているかのような自信に満ちた笑顔で尋ねた。その笑顔に、ヨルも自然と口角を上げる。

「もちろん受ける。ドラゴンの依頼を用意してくれていてありがとう」

　ヨルは立ち上がった。すぐにでも依頼に行くつもりのようで、その意気込みが伝わってくる。カナは慌てて口を開いた。

「ヨルさんは王都のお祭りには参加しないんですか？」

　人々の笑い声や音楽が聞こえ、祭りの賑わいを感じさせる中、ヨルは迷うことなく振り返って答えた。

「人混みは苦手だからな。じゃ、依頼に行ってくるよ」

　カナは、そのヨルの返答に笑みをこぼしながらも、「仕方ありませんね」と言った様子でため息を漏らした。

　そして彼女は立ち上がり、頭を下げた。

「お気をつけて行ってください。帰りをお待ちしております」

　ヨルはカナに軽く手を振り、ギルドの木製の扉を開けて外に出た。外の光が彼の顔に当たり、一瞬眩しさに目を細めた。空気は祭りの熱気で満ち、彼の肌に少し暖かく感じられた。

　ギルドを出たヨルは、再び人混みを掻き分けなければならないことに少しだけ憂鬱な気分になった。陽光が反射する石畳の道を歩きながら、耳には祭りの喧騒が絶えず届く。人々の笑い声や音楽が混ざり合い、頭の中をかき回すようだった。

　ヨルは旅の準備をするためにある場所に向かう。お祭りのため、人は多いが目的の場所近くになると人の数も少なくなってきた。ここはまだ王都アストリアの中であるが、少し薄暗い雰囲気を醸し出している。街灯の光が弱々しく石畳に影を落とし、通りにはひんやりとした空気が漂っていた。

　しかし、お祭りの影響でここにも活気が少し残っている。普段なら静まり返っているこの場所も、今日は少しだけ賑わいを感じる。人々の笑い声が遠くから聞こえ、街灯の光がどこか温かみを帯びているように感じられた。

「人がいるだけで、こんなにも印象が変わるものなのか」と、ヨルは少しだけ驚いていた。

　目的地に辿りついたヨルは、その家を見る。その家は、古びた石造りの外壁と苔むした屋根を持ち、周囲の薄暗い雰囲気に溶け込んでいるが、一目で異質だとわかる。窓には鉄格子がはまり、入口の木の扉は重厚で、ところどころに錆びついた金具が付いている。

　特に家の周辺には、独特の薬草や化学薬品の混ざったような強烈な匂いが漂い、近づきがたい。この匂いのせいか、王都アストリアのお祭りであってもその周辺だけは、人が近寄っていなかった。

「相変わらずの匂いだ」と眉を顰めながら、ヨルはその家の木の扉を開いた。

「ギギィ」と音を立てて扉が開き、錆びついた金具が悲鳴を上げるように鳴った。

　店の中には誰もいない。ただ、店の奥からコツコツと歩く音が聞こえる。ヨルは店内を見渡しながら、カウンターに近づいた。その時、奥の扉が開き、「お客さんとは珍しいね」とあくびを噛み殺しながらその人物、アグネが呟いた。

　アグネの格好は、ゆったりしたパンツに薄手のシャツ、その上からヨレヨレの白衣を纏っていた。髪の毛はボサボサで、目の下にははっきりとわかるほどクマが浮かんでいた。その様子を見たヨルは「あんたは相変わらずだな」と苦笑いを浮かべる。

「おや、その声は」とアグネは呟き、眠い目をこすりながらヨルの方を見た。ぼんやりとした視線が徐々に焦点を合わせ、ヨルの姿を認めると、微笑みが広がった。

「やはり、ヨルか。ふむ、もうそんなに時間が経っていたのかい？研究に熱中しすぎると、時間経過は早いね」と、アグネは背伸びをしながら言い、お店のカウンターに立った。

「さて、今日は何を持ってきてくれたんだい？」

　期待に満ちた目でアグネはヨルを見つめた。その瞳は好奇心で輝いていた。

「そう期待されても困るんだがな。言われたもの以外は、俺にはその価値はわからんからな」とヨルは鞄に手を入れ、大量の植物などを取り出した。乾燥した葉や根がカウンターに並べられ、独特の香りが広がった。

「この価値がわからないなんて勿体無いね。例えば、いつも頼んでいるこのイヌサフランは君たち冒険者がよく使う、ポーションにも混ざっているんだ」とアグネは植物の一つを手に取り、薄い指で繊細に扱いながら説明した。その手つきはまるで宝石を扱うようだった。

「おや、これは？」

　アグネは植物に混ざっていた小さな赤い石を見つけ、興味深げに持ち上げた。

「これは辰砂じゃないか？価値がわからない割にはよくこれを採取していたね？」と、その赤い石を光にかざして、まじまじと眺める。

「見慣れない石だったからな。珍しいのか？」

　ヨルは素朴な疑問を口にした。

「ちょっとだけ、珍しくはあるかな」とアグネは微笑んだ。研究材料が増えたことが嬉しそうで、その喜びが表情にも現れていた。彼女はヨルが採取したものを一つ一つ丁寧に棚にしまっていった。

「さて、今回の採取してもらったのは、これで全部だね。うん、いつもありがとう。君のおかげで研究が捗るよ」

　アグネはヨルに感謝の言葉を述べ、その目には満足げな光が宿っていた。

「気にするな。これもギブアンドテイクだ」とヨルは言いながら、バッグから5つの空き瓶と布に巻かれたナイフを取り出した。空き瓶は微かにカラカラと音をたて、布に包まれたナイフを丁寧にカウンターに置いた。

「おおー、綺麗に5つとも使っているじゃないか？効能はどうだった？」

　アグネは目を輝かせ、興味津々に聞いた。

「俺が使ったわけじゃないが、軟膏として塗るタイプの方が、飲むタイプよりも回復効果が高かったな」

　そのヨルの言葉に、明らかに興味が失せたようにアグネは呟いた。

「君が使ったわけじゃないのなら、あまり効果に関してはデータを得られそうにないね」

　アグネは空き瓶を回収し、布に巻かれたナイフを手に持った。布の感触は柔らかく、ナイフの重さが手に伝わる。

「武器は確かもう一つ、斧があっただろう？」

　ヨルは鞄を確認しながら答えた。

「あれは、使っていない。ワイバーン相手に使うには、少々武器の性能が強くてな」

　受け取ったナイフを慎重に扱いながら、アグネは残念そうな顔を浮かべた。

「そうか、それは残念だ。是非とも効き目を聞きたかったのだがね」

「心配せずとも使ったら、ちゃんと言う。ああ、それともしかしたら次の依頼で斧を使うかもしれないな」

　ナイフを棚になおすとアグネは興味深そうな瞳を浮かべていた。

「それは実に楽しみだ」

「相変わらずの研究好きだな、たまには外にでもでた方がいいんじゃないか？」

　ヨルは呆れたようにため息をついた。アグネは特に気にした様子もなく、カウンターの引き出しから瓶を5つ取り出して、次にナイフを取り出した。

「さて、今回持っていく薬とナイフは前と同じでよかったかい？」

「ああ、構わない」

　そう頷いたヨルだが、いや、と考えるように顎に右手を添えた。

「あの斧を使う予定だからな。あれのための薬が欲しい」

　アグネも思い出したように頷き、カウンターにしゃがみ込んで薬を探し始めた。引き出しを開ける音が木製のカウンターに反響し、彼女は二つの瓶を取り出してカウンターに置いた。瓶の中身は他の薬とは異なる鮮やかな赤色だった。

「あんまり、薬については知らないんだが、赤色って、薬の色じゃないよな」

　ヨルは眉を顰めながら、二つの瓶を見つめた。

「なーに、効果はすでに実証済みだよ。だから、その点に関しては心配しなくていい。ああ、それと薬はいつも通り軟膏タイプと飲み薬タイプのものだ。片方で足りなければ、両方使うこともできる。またその際の研究データも欲しいから、使ったらその感想を教えて欲しい」

　アグネは目をキラキラと輝かせながら言った。その目はまるで宝石のように輝き、興奮を抑えきれない様子だった。その様子にヨルは困惑した表情で「わ、わかった」と押し黙るしかなかった。

　受け取った薬とナイフをヨルはバッグに詰める。瓶が擦れ合う音が聞こえ、バタンと鞄を閉じた。

「さて、じゃそろそろいくよ」

「ああ、研究データを楽しみにしているから、死ぬんじゃないぞ」

　アグネはひらひらと右手を振っている。

「わかっている。命大事に、それが最も重要だからな」

　ヨルは薬屋を後にした。薬屋を出たら、先ほどと同じように人混みの中に戻った。なかなかに憂鬱な気分になったが、王都アストリアを出ると快適な旅が待っていた。

　ファラクス山へ向かう道中では、特に何事もなかった。予定通り1週間かけてファラクス山の麓の村へとヨルはやってきた。

　村の入り口には風に揺れる旗があり、その旗には、緑の葉っぱの絵柄が描かれていた。陽光に照らされて葉の絵が鮮やかに浮かび上がっている。

　門番はこちらをじっと見ているが、特に何も言ってこない。彼の腕には、旗と同じ葉っぱのマークをつけた腕輪が光っていた。その腕輪を見つめながら、ヨルは村の中に入った。

　依頼に書かれている内容は、ファラクス山にドラゴンがいるので倒す、あるいは追い出してほしいというものだ。詳しい情報を集めるためにヨルは村にある酒場の中へと入った。

「どうせギルドの連中は来ないよ！だからあたしがドラゴンを倒しに行く！」

　酒場に入るなり、そんな声が聞こえた。声の主は、赤ら顔の女性で、テーブルを拳で叩いていた。

　ヨルが入ってきた扉の音に反応したのか、酒場にいる全員が彼の方に振り向いた。ドアがきしむ音が静寂を破り、人々の視線が一斉に集まる。

　人に注目されるのが苦手なヨルは少し気まずい思いをした。熱気と汗の匂いが充満する酒場の空気が、さらに重たく感じられる。

　しかし、その中でヨルはある点が気になった。ここにいる人たちの腕には、先ほどの門番と同じように葉っぱの紋様が描かれている腕輪をつけていた。酒場の薄暗い光の中で、その腕輪がかすかに光っている。

「あんたは何？」

　先ほど喋っていた女性が、ヨルに近づいてきて問いかけてきた。彼女の声は鋭く、周囲の喧騒をかき消すようだった。

「えっと。ギルドに依頼を頼まれてきたんだけど」

　ヨルがそう答えると、女性以外の全員が少しだけ安堵した表情を浮かべていた。

「依頼ってなんの依頼？もしかしてドラゴンの討伐？」

　女性は小馬鹿にするかのように口角を上げて言った。

「ああ、そうだけど」

　ヨルが答えると、女性は真面目な表情に変わった。

「あんまり強そうには見えないんだけど」

「ほっとけ。それにあんたにどう思われようが知らないな。俺はただギルドに出された依頼をこなしに来ただけだからな」

　女性は少しムッとした表情を浮かべたが、すぐに納得したように頷いた。

「まぁ、確かに私にどう思われようがお前には関係ないな。で、この酒場になんのようなんだ？」

「依頼について詳しい情報を知るための情報集めだな。誰か、詳しい人物はいないか」

　ヨルは酒場全体を見渡しながら全員に問いかけた。酒場の空気は重く、沈黙が漂った。

　ヨルの問いかけに誰も答えようとしない。数十秒ほど待っても誰も喋らないことを察したのか、ヨルの目の前にいる女性が再び口を開いた。

「そんな呼びかけをしても無駄だよ。ここにいる奴はあまり詳しいことはわからない」

　女性の声には苛立ちが混ざっていた。

　なるほど。女性の言葉を聞いたヨルはここにいても無駄だと悟り、酒場をでた。

　外の冷たい風が顔に当たり、一瞬で熱が冷めたような気がした。しかし、あの酒場にはなぜ詳しい情報を知っているものがいなかったのだろうか？ヨルは疑問に思いながらも、村の中を歩いた。

　村の家々は古びた石造りで、所々に苔が生えている。足元の砂利道がサクサクと音を立て、風が木々を揺らして葉擦れの音を運んでくる。

　今後どうするか考えるために村の出口付近でバッグを置く。それにしてもこの村は何か違和感がある。空気が重く感じられ、静けさの中に潜む何かがヨルの神経を逆撫でする。しかし、考えてもわからない。今はその違和感よりもこの先の行動についてだ。

　数分考えてみたが特にこれといったことは思い浮かばなかった。

「冒険者が油断してんなよ！」

　突然背後からそんな声が聞こえた。後ろを振り向くと先ほど酒場にいた女性がいた。

　女性はヨルの隣に置いてあるバッグを奪い、そのまま走り去ろうとする。しかし、バッグを持った途端、驚きの表情を浮かべ、すぐにバッグを離した。

「何？このバッグ？！重いんだけど」

　バッグが予想以上に重かったのか、彼女は右手を振り回し、手首を痛そうにさすっている。

「旅をしていたら、お前みたいな奴がよくいるからな。結構便利だろ？」

　ヨルはそういい、軽々と自分のバッグを持ち上げた。

「お前はその重さ平気なのか？」

「ああ」

「ちなみにどれくらい重いんだ？」

「バッグだけの重みなら50Kgだ」

　それを聞いた女性は呆れた表情を浮かべた。

「それは重いわけだ」

　その言葉を聞いて用は済んだと思ったヨルは、とりあえずバッグを持ってこの女性から離れようとした。

「ちょっと待ってくれ」

　どうやら、彼女はまだヨルに用事があるみたいだ。ヨルは足を止め、振り向いた。

「あんたさ、ドラゴンを倒しに来てくれたんだろ？」

　彼女の目は真剣で、瞳が鋭く光っている。

「そうだな」

「だったらさ、私もあんたについて行っていいか？」

「何故？」

　ヨルは首を傾げながら尋ねた。

「ドラゴンを倒した実績を作って、村の連中に私の実力を認めてもらうんだ」

　彼女の声には強い意志が感じられた。拳を握りしめる様子からも、その覚悟が伝わってくる。

　ヨルはその女性の言葉を聞いても特に何か言おうとは思わなかった。沈黙が数秒流れた後、彼女は少し息を整えて言葉を続けた。

「さっきバッグを盗もうとしたことは謝る。あんたが強いのかどうか試したかったんだ」

　懸命に訴える彼女の表情は真剣そのものだった。

「ふーん、お前、名前はなんて言うんだ？」

　ヨルは少し興味を持って尋ねた。

「人に名前を尋ねるときは、まず自分から名乗るべき。親にそう習わなかった？」

　なんだこいつとヨルは思ったが、せっかくなので親の言葉を思い出そうとした。しかし、そんなことを言われた覚えはなかった。

「いや、そんなことは教わっていない」

　彼女は少しだけ驚いた表情を浮かべた。

「ふーん、そうなんだ？じゃあ、私から名乗るか。私の名は、アキハ。いい名前でしょ」

「アキハね。俺はヨルって名前だ。別に忘れてくれて構わない」

「釣れないこと言うね。で、さっきの提案は受け入れてくれるの？」

　アキハの瞳が再び真剣な光を帯びてヨルを見つめていた。

　ヨルはその質問に間髪入れずに答えた。

「答えは簡単。NOだ」

「……なんで？」

　アキハは不満気に言った。

「邪魔だから」

　ヨルはそういい、村を出てファラクス山の方へ歩きだす。

　村を出ても、アキハはヨルの後ろをついてきていた。

「何故ついてくる？俺は邪魔だと言ったんだがな」

「それはそっちの都合でしょ。私は私の都合で勝手に動く」

　何を言っても聞く耳は持たなそうだ。だから、ヨルは実力行使でアキハがついてくるのを止めることを考えた。

　ヨルはアキハの方に身体を向ける。

「お、私がついて行くことを認めるのか？」

　ヨルはその言葉を無視し、そして、威圧するようにアキハを睨みつけた。

　その瞬間、アキハの表情が凍りついた。

　ヨルはゆっくりとアキハに近寄る。アキハは何か言おうとしているが、口を動かせないのか一言も発せられない。額には冷や汗が滲み出ていた。

　一歩一歩、ヨルがアキハに近づくたびに、彼女の体はますます硬直していく。ついに目の前に立つと、彼女は完全に動けなくなっていた。ヨルは動けないアキハの額に、こん、と右拳を当てた。

　その瞬間、アキハは力が抜けたように地面に座り込んだ。

「やはり、ダメだな。弱すぎる。この程度の威圧で動けなくなるようじゃ、ドラゴンの前に行っても同じだぞ。それにあのバッグの重さに驚いたからってすぐ離すようじゃな。実力の程が知れている」

　ヨルは座り込むアキハを見下ろし、冷たい声で言い放った。彼女の目には失望の色が映っていた。

　多少手荒ではあったが、アキハの様子を見て、もうついて来ないだろうと判断し、ヨルは立ち上がった。

「……ふざけるな」

　掠れた声でアキハが言った。

「別にふざけてはいないが」

「これから、仲間になるかもしれないやつにそんなことをしてもいいと思っているのか？」

　アキハはヨルを睨みつける。思っていたよりも元気そうだ。

「お前と仲間にはならないよ。足手纏いはいらないからな。それにその理屈なら、お前も俺のバッグを盗もうとしたじゃないか」

「そんなことを言っているから、お前は1人でドラゴンを倒すハメになっているんだろ？それに私の場合は、人を傷つけようとしていない」

　結構噛み付いてくるな。正直少し鬱陶しい。が、アキハが言っていることもわかる部分はある。だけど、ドラゴン退治は甘くない。

　死と隣合わせの戦いになることは、これまでの経験からヨルは知っている。だからヨルはアキハに、諭すように伝えた。

「今までのドラゴン退治で何人か協力してくれた人はいたよ。だけど、その中で大量の人たちがドラゴンによって殺された。だから、力のないやつに協力してもらっても迷惑だ」

　ヨルがそういうと、アキハは少し悲しそうな顔を浮かべた。

　少しの沈黙が流れ、ヨルはアキハが何も言わないと思い、そのまま進もうとした。

「わかったよ。もうついていかない。ただ、ドラゴンは山の頂上付近にいるから、その辺りを探せばいると思うよ」

　それだけ言うと、アキハは村に戻って行った。

　ヨルはアキハの助言通り、ファラクス山の頂上を目指して歩いた。

　険しい山道を進むたびに、足元の岩がゴリゴリと音を立てる。周囲には冷たい風が吹き抜け、時折、遠くの鳥の鳴き声が耳に届いた。陽光が樹々の間から差し込み、木の葉がキラキラと輝く。

　1時間ほど歩き続け、ついにファラクス山の頂上付近にたどり着いた。

　そこで、アキハが言った通り、ドラゴンがいた。巨大な体が岩の上に鎮座し、鱗が光を反射している。ドラゴンの方はまだこちらに気づいていない。

　ヨルは足音を殺しながら、気づかれないように慎重にドラゴンを観察した。ドラゴンの目は半分閉じられ、鋭い爪が岩を掴んでいる。

　見たところ、大きさは中級クラスと言ったところだろう。倒すのに時間がかかりそうだ。

　本来中級クラスのドラゴンは、人間が1人で倒すような相手じゃない。

　しかし、ヨルにはアキハが言った通り、協力してくれる仲間はいない。

　ただ、ヨルはAランク冒険者だ。Aランク以上の冒険者なら、中級クラスのドラゴン相手でも1人で勝つことができる者も少なくない。

　しかし、労力に見合わない。Aランク冒険者といえども中級クラスのドラゴン相手だと死と隣合わせだからだ。

　そして、ドラゴンに攻撃するために近づくのも難しい。ドラゴンは多数の遠距離攻撃を備えている。

　その最たるものがブレスだ。基本的にドラゴンは炎を吐くが、場所やドラゴンの強さによって、ブレスの種類が変わってくる。

　ヨルの目の前にいるドラゴンはどうなのだろうか。

　その時、目の前にいたドラゴンが突然火を吹いた。ヨルに気づいたのではなく、空に飛んでいる大きな害鳥めがけて、炎のブレスを放っていた。

　熱風が周囲に広がり、ヨルは一瞬息が詰まるのを感じた。害鳥は焼かれ、焦げた匂いとともにそのままドラゴンのいる地面に落ちた。

　今がドラゴンを倒す好機。ヨルは急いで鉄のバッグから紫色の斧を取り出す。

　そして、自らのスキルを発動する。半龍人化。筋肉が膨れ上がり、鱗が現れ、視界が鋭くなる。

　半龍人化となったことで、ドラゴンはこちらに気づいた。この一瞬が勝負である。

　ヨルは全速力でドラゴンに向かって走り出した。大地が震えるほどの速さだ。

　ドラゴンはヨルに気づき、巨大な口を開けて炎のブレスを放ってきた。ヨルはその炎のブレスを避けることなく、真っ向から突っ込んだ。猛烈な熱が肌を焦がし、視界が揺れる。しかし、半龍人化による鱗がヨルを守っていた。

　その時、ドラゴンは一瞬臨戦態勢を解いた。それが致命的な隙となった。

　ヨルは炎の中を突き抜け、ドラゴンの前に立つ。鋭い瞳で狙いを定め、紫の斧を高く振り上げる。

「ここだ」

　ヨルは斧をドラゴンの身体めがけて思いっきり振り下ろした。斧が空を切り裂き、ドラゴンの皮膚に深く突き刺さる。ドラゴンの硬い鱗を貫く感触が手に伝わる。致命的なダメージではないが、それでも人間では大怪我とも言えるような傷口ができた。

　ドラゴンは苦痛の咆哮を上げ、巨体を揺さぶる。傷口から血が噴き出し、痛みに顔を歪めている。巨大な尾が地面を叩きつけ、岩が砕ける音が響く。

「ひとまずは、成功だな」とヨルは呟き、持っていた斧を地面に捨てた。どすっという鈍い音が響く。この斧は重いのだ。そして、この紫の斧には特殊な細工がされている。刃先に猛毒が塗られているのだ。

　一撃を喰らわせることができたので、あとは時間との勝負となる。ドラゴンはまだまだ動けるようで、ヨルに向かって襲いかかってきた。

　そして、ドラゴンとの戦闘が始まってから、1時間が経過しようとしていた。

「まだ動けるのかよ、あの毒本当に効いてんのか？」

　ヨルは息を荒げながら愚痴をこぼしていた。下級のドラゴン程度なら10分もしないうちに動けなくなる毒だ。中級ドラゴンといえども、30分で動けなくなると思っていた。考えが甘かったようだ。

　この１時間の間で、ヨルはドラゴンの猛攻を避けながら戦ってきたが、そろそろ限界が近いと感じていた。全身が重くなり、汗が滲み出る。耳元ではドラゴンの息遣いが聞こえるが、自分の消耗でそれに気づく余裕はなかった。

「ぐぅぅぅ……！」

　ドラゴンが最後の力を振り絞り、ヨルに振り下ろそうとしていた腕が、力尽きたように別の方向に振り下ろされた。ドラゴンの息は荒く、口から漏れる熱い息が周囲の空気を揺らしている。

　そして、ドラゴンはついにその場に倒れ込んだ。

「まさか、毒が身体全体に広がるのに1時間以上もかかるとはな」

　ヨルは愚痴をこぼすようにそう呟いた。しかし、想像以上に苦戦したが、概ね予定通りだと内心で思う。

　ヨルは最初にドラゴンに攻撃した紫の斧を拾いに行く。斧を手に取り、慎重にドラゴンに近づく。ドラゴンが本当に動けなくなったのか、警戒しているためだ。

　そして、ヨルはドラゴンの目の前に辿り着いた。ドラゴンは動こうとしない。

　ドラゴンの目は開いており、最後の抵抗なのか、その目でヨルを睨んでいた。

「悪いな、これで終わりだ」

　ヨルはドラゴンの首元を狙い、斧を振り下ろした。

「……我はただ、我が子を……守りたかっただけなのにな」

　斧を振り下ろした時、ドラゴンからそんな声が聞こえた。ヨルは慌てて、斧の軌道を変えた。急に斧の軌道を変えたことと、残りの体力の少なさによって、ヨルは地面に倒れ込んでしまった。

　斧はドラゴンの首元に落ちずに、地面に転がった。その際、どすっという鈍い音が鳴る。

　ヨルはドラゴンの顔の前に仰向けに倒れ込んでいた。

「今のはお前が発した声なのか？」

　仰向けの状態で倒れながら、ドラゴンにそう聞いた。

　一呼吸おいた後、ドラゴンの返事が返ってきた。

「我の言葉がわかるのか？」

「……そうみたいだな。ただ、言葉が聞こえたのはついさっき斧を振り下ろした時だ」

「そうか」

　その後互いにしばらく沈黙が続いた。風が吹き抜け、やけた草の匂いが漂う中、ヨルはその沈黙を破るように言葉を発した。

「子どもがいるのか？」

　ヨルの質問に対し、ドラゴンは少し迷いをみせたが、時間が少し経つと低い声で答えた。

「……いや、今は卵だ。まだ産まれていない。それよりも貴様は我の命をとりに来たのだろう？何故止めをささぬ」

　その言葉を聞いたヨルは思い出したように立ち上がった。

「そうだった。忘れてた」

　ヨルはドラゴンから少し離れた場所にある自分のバッグの元に歩いて行った。バッグから赤い液体が入った瓶を取り出し、再びドラゴンの近くに戻る。

「口は開けるか？開けないなら無理やり開けるぞ」

　ヨルの行動と言葉が意味不明だったのか、ドラゴンが焦ったように喋る。

「口を開くことはできるが、なんの真似だ？この後に及んで、毒で我を殺すのか？」

「そんなわけないだろ。トドメを刺すなら、さっきの斧を振り下ろしているよ」

　そのヨルの言葉にどこか納得したような表情をドラゴンは浮かべる。

「それもそうだな。では、この瓶の中身はなんなのだ？」

「斧に塗られてある毒の解毒薬だよ。アグネからもらったものだ。とりあえず、これで解毒して治さないとな」

　ヨルは解毒薬をドラゴンの口の中に注いだ。ドラゴンは驚いた表情を浮かべていたが、ヨルが入れた解毒薬を飲み込んだ。

「しばらくしたら、動けるようになると思うよ」

　ヨルは先ほどのドラゴンとの戦いでかなり疲れていたので、その場に座り込んだ。冷たい地面が心地よく感じられる。目を閉じると、まだ耳に残るドラゴンの咆哮が静寂の中に消えていくのを感じた。

「なぜ、我を助ける？動けるようになったら我はお前を殺すかもしれないぞ？」

　ドラゴンがヨルに質問する。その声は低く、力強さを失っていたが、まだ威圧感が残っている。

「殺されるのは嫌だな。けど、それは本心じゃないだろ？」

　ヨルは穏やかに返答した。

「……そうだな、これは本心ではない」

　ドラゴンの声は少し弱々しく、だが誠実さが感じられた。

　ヨルはその言葉に笑顔を浮かべ、冷静にドラゴンに尋ねた。

「子どもがいるんだろ？そんなドラゴンを殺す気にはなれない。それに俺はドラゴンを好き好んで殺しているわけじゃないからな」

「では、なんのために我のようなドラゴンと戦ったんだ？」

　ドラゴンの目には疑問と好奇心が混じっていた。

　ヨルはドラゴンにそう言われ、昔のことを思い出した。

「俺の親はさドラゴンなんだよ」

　ヨルの言葉にドラゴンは驚き、目を大きく開けて彼を見つめた。

「嘘ではないのだよな？」

「まぁな」

　ヨルは真剣な眼差しでドラゴンの目を見つめた。

「それで、あのスキルを得たというのか？」

「それに関しては、多分後天的に手に入れたものじゃなくて、先天的に手に入れたスキルだと思う」

「なるほど」

　ドラゴンは深く考え込むように頷いた。

　この世界にはスキルというものが存在している。そして、そのスキルを手に入れるためには生まれてきた時からすでに所持している先天的なものと、成長していく段階で手に入れることができる後天的なものと、2つのパターンがある。

　そして、スキルには１つの原則がある。それは、1人につき、１つしかスキルを手に入れられないことだ。

「スキルに関しては、お前は後天的に手に入れたんじゃないのか？人間の言葉を喋れるようになっているし」

　ヨルの言葉にドラゴンは考えるように呟いた。

「そうだな。先ほど、死にかけの時に我はスキルを得た」

　ドラゴンの目には理解の光が宿っていた。

　その後、戦いに疲れたのか、ドラゴンとヨルは互いに黙り込んだ。風が吹き抜け、疲れた身体に心地よく感じられる。遠くで聞こえる虫の鳴き声が静けさを際立たせ、ヨルとドラゴンは静かに瞼を閉じた。

　数時間が経過するとドラゴンは再びヨルに話しかけた。夜の冷気が肌に染み、星空の下で静寂が広がる中、ドラゴンの声が響く。

「我は動けるようになった。貴様はどうなのだ？」

「俺は元々動けるよ」

　ヨルが返答すると、ドラゴンは笑みを浮かべた。

「それもそうだったな。しかし、半分ドラゴンとは言え、たった1人の人間に我が負けるとは思わなかったぞ」

「俺以外にも人間には強い奴がいる。早めに知ることができてよかったんじゃないか？」

　その時、ヨルは不意に村にいた時の違和感の正体に気づいた。

　そういえばあの村には、強いやつと感じる奴がいなかった。こんな辺境な地で、傭兵を雇わずに生活はできるのだろうか？できるわけがないとヨルは結論づけた。

「なぁ、ファラクス山の麓にある人間の村のことは知っているか？」

　ヨルが聞くと、ドラゴンは少し考えるそぶりをみせる。

「ああ、多分知っている。あの村にいたお前のような奴らに襲われたことがあったからな」

「殺したのか？」

　ドラゴンは首を横に振った。

「殺してはいない。まぁ最初は殺してやろうと思ったがな。だが、途中から奴らに殺気がなくなっていてな。だから見逃してやった」

　ドラゴンの言うことには、基本嘘はない。だから、ドラゴンの言葉は信じていいだろう。しかし、それだと問題は解決しない。

「その傭兵たちは強かったのか？」

「ああ、結構強かったよ。1人1人はお主ほどでなかったが、連携がうまい奴らでな。それなりに印象に残る相手だった」とドラゴンがそう言いながらも、何か思い出したような表情を浮かべた。

「そういえば奴ら、傭兵たちはその村から去っていくのを見かけたことがあるな。つい最近のことのはずだ」

　やはり、あの村にいた傭兵たちは現状いないようだ。それだと、こんな辺境な地にあるあの村は、緊急事態に対処できないはずだ。

　知らない方が良かったなと少し思った。ただ幸いすぐに解決策が浮かんだので、ヨルはドラゴンに交渉してみることにした。

「なぁ、あんたはさ、安心して子どもというより、卵を孵したいと思わないか？」

　ドラゴンの目が一瞬鋭く光る。

「当然だな。しかし、そのような場所はなかなかないぞ？」

「それもそうだな。けど、もしも魔物に襲われた時に、卵を人間に守ってもらえたらかなり楽になるんじゃないか？」

　ドラゴンは少し考えるそぶりをみせた。風が吹き、焼けた草の香りが漂ってくる。

「まぁ、確かに楽にはなるな」

　ドラゴンは頷いた。ヨルはそのドラゴンの言葉を聞いて笑みを浮かべる。

「なら、交渉と行こうか。あの村の人たちにあんたが滞在してもいいように交渉するから、あんたはあの村の傭兵のようなことをしてくれないか？」

　ドラゴンは首を傾げ、否定するかのように首を振った。

「我はドラゴンだぞ。人間と住めるわけがない。それに人間は我らドラゴンに恐怖を抱いているだろう？でなければ貴様のような奴を送ってきたりはしないであろう？」

　ドラゴンの言い分は一理ある。しかし、人間とドラゴンの共存の可能性がゼロというわけではない。ヨルという成功体験もある。だから、ヨルは自信ありげに笑顔で言った。

「任せとけ。なんとかなると思うから」

　ヨルはそういい準備運動を始めた。ドラゴンはヨルの行動を見て疑問を抱く。

「何をしているのだ？」

「なに。今から、その村まで走っていって交渉してくる。俺の荷物とかはここに置いとくよ。またすぐに戻ってくるしな」

　ヨルはそういうと、全力で走り出した。地面を蹴る足音が響き、風が顔を撫でる。

「変わったやつめ」

　そんな呟きが風に乗って聞こえた気がした。

　ファラクス山を登る時は警戒しながら進んだため、かなり時間がかかった。しかし、降りる時は警戒せずに全力で走り降りたので、すぐにファラクス山麓の村に戻ってくることができた。

　村の入口に着くと、アキハが座り込んでいた。彼女は遠くを見つめており、ヨルに気づいていない。

「よう」とヨルが声をかけると、アキハは驚いたように肩を震わせ、彼を見上げた。

　そして、アキハは少し微妙な表情を浮かべる。

「えっと、もしかして、ドラゴンが怖くなって逃げ出してきた？」

「いや、ちょっと交渉があってね」

　ヨルの言葉に、アキハは一瞬笑顔を浮かべるが、すぐに怒ったような表情を浮かべた。

「あんだけ私に啖呵切ってきたくせに、私に頼るつもり？」

　アキハはヨルを煽るように言った。

「依頼の方は解決したよ。今回交渉するのはその延長上みたいなものだ」

「……解決したってことは、……ドラゴンを倒したってこと？」

「ああ、まぁ倒した」

　アキハは驚きの表情を見せた。

「本当に1人で倒したの？それってめちゃくちゃ凄いんじゃ」

　アキハが言葉を続けようとしたが、ヨルはそれを遮った。

「倒しはしたけど、今ではドラゴンはピンピンしてるよ。ただ、俺の話は聞いてくれるくらいには、分別はあるよ」

　ヨルが説明すると、アキハはさらに驚き、同時に疑いの視線をヨルに向けた。

「え、何それ？凄そうと思ったけど、流石に嘘だよね」

　アキハは半信半疑の表情を浮かべている。

「いや、本当の話だ。それで一つ交渉がある。あのドラゴンをこの村の傭兵にするのはどうだろうか？」

　ヨルが提案すると、アキハは驚きのあまり咳き込んだ。

「ちょっ、えっ、ドラゴンをこの村の傭兵にするって言った？」

「ああ、そう言った。この村には今、傭兵はいないんだろ？」

　ヨルが確認すると、アキハはムッとした表情を見せた。

「傭兵なら私がいる」

「いや、お前弱いじゃん。もし魔物に攻められたら、この村はかなり危険だよ」

　アキハは落ち込んだ様子を見せた。

「だから、ドラゴンにこの村の傭兵になってもらうんだ。実際に話してもらったら早いと思う」

　ヨルはアキハの手を引っ張った。

「ちょっと、どこに行く気」

「だからドラゴンのいる場所」

　アキハは唖然とした表情を浮かべ、そして、何か考えるかのように、ヨルの手に引っ張られて走りだした。

　1時間後、ドラゴンのいる場所に到着した。

　アキハの顔には汗が浮かび、その表情には怯えの感情が漂っていた。

「ふん、やはり人間は我のことを恐れているようだぞ」

「最初は怯えるよ。人間だからな。それが正常の反応だ。弱い奴が強い奴に恐れを抱かないなんて、死ぬのと同義だろう？」

　ヨルが説明すると、ドラゴンは少し考えるそぶりを見せた。

「それもそうだな」

　ヨルとドラゴンのやり取りを見ていたアキハは、怯えながらも驚きの表情を見せた。

「今のやり取りを見てどう思った？」

　ヨルがアキハに尋ねると、アキハは深呼吸をして心を落ち着けた。

「言いたいことはあるけど、とりあえず、私は弱くない」

　アキハは叫び、ヨルの頭を叩こうとする。

　ヨルは一歩下がってギリギリで避けた。

「こんな不意打ちでも俺に一発当てられないんじゃ、やっぱ弱いよ」

　アキハはさらに怒った表情を見せた。ヨルはアキハのその様子にため息をつく。

「言っとくが、弱いことを認めるのは悪いことじゃないぞ」

「はぁ？！そんなわけないでしょ！どう考えても私のことを侮辱している」

　アキハは怒りを露わにした。言いすぎてしまったことで、フォローの言葉もあまり届いていないようだ。

　その時、ドラゴンが口を開いた。

「身の丈を知ることは悪いことではない」

　ドラゴンの低い重い声が響いた。

　ヨルとアキハはドラゴンの方に顔を向ける。

「本当にそう、思うんですか？」

　アキハが神妙な顔でドラゴンに尋ねると、ドラゴンは静かに頷いた。

「ああ。自らの実力を知って生き残ろうとするのは一番重要だ。それは我らドラゴンも同じ」

　ドラゴンの言葉には重みがあった。

　ヨルはアキハの方を向いて、意地悪な笑みを浮かべる。

「ドラゴンもこう言っているんだ。弱いと認めることは悪いことじゃない」

　アキハは何事か考えるかのように沈黙し、その言葉を受け入れようとしていた。

「さて、とりあえず今はそんな話はどうでもいい。このドラゴンをアキハ達の村の傭兵にしようと思っているんだが、その際にドラゴンの方からも一つ意見があってな」

　ヨルはドラゴンの方を見る。

「我が直接言えばいいのだな。我には子どもがおる。まぁ卵だがな。だから、安全に我が子を育てられる環境が欲しい。そうしてくれれば、其方の村の傭兵になっても構わない」

　ドラゴンの声は低く、重く響いた。

　アキハは真剣な表情でドラゴンの言葉を考えているようだ。やがて答えが出たのか、ぎこちない笑顔を浮かべた。

「その提案はすごく、私たちにとっていいものだね。ドラゴンさんの提案ももちろん受け入れるよ」

　アキハの表情がどんどん自然な状態になっていく。だいぶドラゴンに慣れてきたようだ。

「それにしてもドラゴンさんって人間の言葉を喋れるんだね」

　アキハにそう言われたドラゴンは、少し驚いた表情を浮かべた。

「確かにそうだな。てっきり我は、其奴しかわからないものだと思っておった」

「そんなわけないだろ？俺は人間だ。人間の言葉を喋れるようになったのはお前がスキルを会得したからだ」

　ヨルとドラゴンの会話に、アキハは少し不思議そうな顔を浮かべる。

「あ、そうそう、村の人たちも大丈夫だと思うよ。ドラゴンさん、普通にいいドラゴンさんだしね」

　アキハはヨルに接するような自然な表情を浮かべた。どうやら、このドラゴンに対する怯えは完全に消えたようだ。

　ドラゴンも笑みを浮かべている。

「礼を言う。人間の女よ」

　そのドラゴンの言葉に、アキハは笑顔を浮かべた。

「私は、アキハ。アキハっていうの。そう呼んでくれると嬉しいな」

「ふむ、アキハか。ではそう呼ばせてもらおう。これからよろしく頼む。アキハよ」

　少し照れたような表情をアキハは浮かべた。

「ドラゴンさんの名前はなんていうの？」

「我か？我に名前はない。好きなように呼ぶと良い」

　ヨルはふと昔のことを思い出した。

ー俺の親のドラゴンには名前があったが、いないものも多いと言っていたな―

「じゃ好きにつけさせてもらうね。えっと、この山の名前はファラクス山っていうから、そこからとってファラクスってのはどう？」

　思ったより悪くなさそうだ。ドラゴンも少し笑っている。

「ふふ、我の名はファラクスか悪くない」

　ファラクスは翼を広げる。

「さて、お主達、我の背中に乗るといい」

　ヨルとアキハはファラクスの背中に乗る。

「村に行く前に少しだけ寄り道をする。振り落とされるでないぞ」

　ファラクスの背中に乗っての飛行はとても速かった。風が顔を切り、空気が冷たく感じられた。ヨルは親の顔が浮かんだ。

「何笑ってるの？」

「いや、ちょっとな」

　すぐに目的の場所に辿り着いたのか、ファラクスは地上に降りた。山の頂上の隠れたところにドラゴンの卵があった。

「なるほど。これがドラゴンの卵か」

「でっかいね」

　アキハは卵の大きさに驚いている。ヨルも初めて見たので、驚いた。まさか、アキハと同じくらい卵が大きいとは思わなかった。

　ドラゴンは大事そうに、その卵を両手で包み込んだ。

「さて、それではアキハ、お主の村に行こうか」

　ヨルたちがドラゴンの背中に再び乗ると、卵に気を使うようにゆっくりと翼を羽ばたかせる。ゆっくりとだが、遅くはなく、無事に村に辿り着くことができた。

　当然村はパニックである。しかし、ドラゴンの背中に乗っていたのがアキハだと知ると、村の人たちのパニックはほんの少し収まった。アキハは村の人たちに事情を説明する。

　村の人たちは最初こそ驚いていたが、アキハの説明とドラゴンの「これからよろしく頼む」という言葉を聞き、最終的にファラクスに傭兵としてお願いしますと言っていた。

　少し変わった人たちかもしれないとヨルは思った。

　これでこの村でのやることは終わった。そう思っていると、村の人から、今夜は泊まっていかないかと言われたので、遠慮なく泊めてもらうことにした。その夜は宴で、村に活発さが戻ったような感じがした。

　翌日、ヨルは村の人たちから、お礼を言われた。

「この村のことを考えてくれてありがとうよ」

「気にしなくていいよ」

　そういい、ヨルは村をでる。

　村を出るとそこにはファラクスとアキハがいた。

「そういえばお主の名前をまだ聞いていなかったな」

　ファラクスは笑顔を浮かべそう言った。

「ヨル。それが俺の名前だ」

「そうかヨルか。覚えておこう」

　ファラクスは満足そうに頷いている。

「絶対、あんたの強さを超えてやるから」

　恨めしそうに、アキハは言った。

「ああ、楽しみにしているよ。ファラクスに鍛えられるんだからな。アキハは強くなると思うよ」

　アキハの表情は一変、照れたように顔を背けた。

「ん、ありがと」

　ファラクスとアキハは手を伸ばしてきた。ヨルも拳を突き出し、それぞれがタッチをした。

「それじゃ、また会おう」

「お主とまた会える日を楽しみにしているぞ」

「ああ、俺も楽しみにしている」

　そうしてヨルはこの村を去った。

「ねぇ、ファラクス、彼が他の人たちになんて言われているか知ってる？」

「いや、知らないな」

　アキハは遠くの空を見つめた。

「ドラゴンスレイヤーだってさ」

　それを聞いたファラクスは楽しそうに笑っていた。

　後にファラクスはファラクス山の守護龍として有名となるが、それはまだ先の話である。

第2章　冒険には新しい仲間がつきものだ

　ギルドの依頼を終えたヨルは王都アストリアに帰ってきていた。

　王都アストリアには以前帰ってきた時のような賑わいはなく、いつも通りの日常に戻っていた。

　街の石畳の道を歩くたびに、露天から漂う香ばしいパンの匂いや、行き交う人々のざわめきが耳に心地よい。

　1ヶ月くらい経過するとお祝いムードは続かないよなと内心思いながらギルドまで辿り着いた。

　ギルドの木製の扉を開けると、独特の喧騒が耳に飛び込んできた。

　扉近くにいた男性、カイがこちらに気づき、顔をしかめながら近寄ってくる。

「これは今どういう状況なんだ？」

　ヨルは小声でカイに尋ねた。

「ああ、フードを被っている人物がいるだろう？」

　カイは指差した。

「あれか、多分初めてのやつだよな」

　ヨルは視線を向ける。

「実はそいつが、高難易度の黒の魔術団の依頼を受けたいと言っているんだ」

　黒の魔術団とは、魔法で悪事を働く連中のことである。数々の悪事の中で最も有名なのが、一つの国を滅ぼしたことだ。ヨルは眉を顰める。

「てかギルドは、黒の魔術団の居場所を特定しているのか？まぁ、依頼があると言うことはそう言うことなんだろうが」

　ヨルはカイに問いかけた。

「居場所って言っても本拠地ではないと思う。それに、その場所も正確な居場所はわかっていないみたいだ。1ヶ月前ごろにあの依頼書が貼られていてな。あの依頼を受けた冒険者は全員帰ってきていないんだ」

　カイの言葉にヨルの表情が険しくなる。

「けど、依頼書が貼られてから1ヶ月しか経っていないんだろ？調べていて遅くなっているだけじゃないのか？」

　ヨルがそう問いかけるとカイは苦笑いを浮かべていた。

「今回の依頼は1週間でギルドに報告しに戻らないといけないんだ。黒の魔術団はあまりにも危険だからな。あの依頼が張り出されてから、3つのパーティが受注したみたいだが、どのパーティもギルドに戻ってきて報告することはなかったみたいだよ」

　条件付きの依頼、今回の場合は1週間以内にギルドに戻って報告というものだ。依頼を受注した冒険者はその条件を守らなければならない。もし条件を守らなかった場合、例え依頼通りの内容を遂行しようとも報酬をもらうことができない。そのため、1週間以内に戻ってこなかったパーティというのは、戻ってくることができない状況に陥っているということだ。

　ヨルはその話を聞きながら、ギルド内の喧騒と共に漂う緊張感を感じ取った。

「なるほど。かなり危険な依頼のようだな。それで、あのフードを被った人物がその依頼を受けたいと言っているのか？ちなみにあの人物のランクはいくつなんだ？」

　ギルドにはランク付けがあり、一番上がSランク、その次にAランク、Bランク、Cランク、Eランク、Fランクと6つのランクがある。そして、高難易度の依頼を受けるためにはAランク以上でなければいけない。

　カイは肩をすくめる。

「どうやら、ギルドに来たのは今回が初めてらしい」

「ということは、新規冒険者か？しかし、その割には珍しいローブを被っているんだな」

　ヨルはフードを被った人物をちらりと見る。

「やっぱヨルも気づくか。あの装備は新人冒険者が装備できるような代物じゃないな。まぁ親に貰ったのかもしれないがな。しかし、それにしたってあの認識を阻害するローブをもらったところで防御力は対して上がらない。だから、わざわざプレゼントとして渡すにはおかしいよな」

　ヨルとカイが小声で話し合っている間に、事態は進展していた。そのフードを被った人物は冒険者になるための試験を受けることになったようだ。

「しかし、魔王が倒されて1ヶ月経ったというのに、騒ぎというものは無くならないものだな」

　ヨルはため息混じりに小声で呟いた。

　その瞬間、どこからか殺気を感じた。殺気を感じた場所を確認すると、フードを被った人物のようだ。それなりに距離があると思うが、今の小声が聞こえていたのだろうか。しかし、聞こえていたとして殺気を向けられるような内容の呟きではなかったと思う。そう考えているとフードを被った人物がヨルに近づいてきた。

「私の冒険者のランクを測る試験はこの者にお願いしたいのだが、良いだろうか？」

　フードを被った人物がギルドの受付嬢に問いかけた。

　受付嬢のカナが申し訳なさそうにしている。

「私どもは試験監督がヨルさんでも問題ございませんが、そのヨルさんはよろしかったでしょうか？」

　少しだけ考えたが、フードを被っている人物に多少興味が湧いているので、ヨルは試験監督を承諾することにした。

「ええ、いいですよ。ただし、条件があります。ギルドの奥の部屋の修練場をお借りします。そして、誰も見物人がいないこと、これらの条件が満たされるならば試験監督を引き受けます」

　ヨルは条件を提示した。

　周りの冒険者たちは不満があるかのように騒いでいる。どうやらフードを被った人物がどのような人物、あるいは実力なのか、試験で確認したかったようだ。ヨルは多少申し訳ない気持ちを感じつつも、自分にも事情があるのだから仕方ないと思った。

　カナは迷うそぶりもなく笑顔で答えた。

「問題ございません。ヨルさんの条件を受け入れましょう。ただし、不正防止のため、試験後に幾つかの質問をさせていただきたいと思いますがそれでもよろしかったでしょうか？」

　―この人は俺のことを少し信用しすぎな部分はあると思うが、今はありがたいから黙っておこう―

「ああ、こちらもそれで問題ない」とヨルは答え、フードを被った人物にもそれで問題ないか尋ねた。

「私にとってその条件は何のデメリットもない。もちろんそれで構わない」

　ということで、フードを被った人物の試験監督をヨルが引き受けることになった。カナの案内のもと、修練場にやってきた。

　修練場の冷たい石の床に足音が響き、壁には古びた武器がかかっている。空気はひんやりとしており、静寂が広がっていた。

「それではヨルさんの条件通り、私は立ち去ります。気張らずに試験に挑んでください」

　カナは優しい笑顔を見せてその場を去った。カナの足音が遠ざかる中、修練場の冷たい石の床に反響するその音が、場の静寂を一層際立たせた。

「さてと、試験内容はどうしようか？」

　試験監督を受け入れたのはいいが、初めてのことなので何をすればいいのかわからない。

「試験内容については私はわからないが、ひとまず礼と謝意の言葉を述べよう」

　フードを被った人物はフードを外した。

　銀髪の髪が煌めく。その蒼色の瞳は透き通っており、全てを見透かすような目をしている。その姿はまるで月光の下で輝く氷のように美しく、息を呑むほどだ。そして、その尖った耳は魔力の高さを示しており、人間ではその耳の形になることはない。

「ほう？人間ではなかったのか。まぁどっちでもいいが」

　ヨルがそういうと女性は少し驚いた表情を見せた。

「私が人間ではないことについてギルドに報告しないのか？」

　ヨルは迷うことなく答える。

「そんなことはしないさ。例えお前が魔族だとしてもな。ギルドは基本的に来るもの拒まずだからな」

「しかし、来るもの拒まずとは言っても例外というものはあるだろう？それに魔族は基本的に人類の敵であると思うが」

「その考えも否定はしない。ただ俺はその考えじゃないってだけ」とヨルが答えると、女性は少しだけ口角を上げて笑った。

「そうか、ありがとう」

　女性はそういうと気持ちを落ち着けるために深呼吸をして、続けて話し始めた。

「私の名前はフレッドという」

　フレッドが名乗ったので、ヨルも名を名乗る。

「俺はヨルだ。よろしく」

「ヨルか。そういえばまだ謝意を述べていなかった。先ほどは殺気を飛ばしてしまい、申し訳ない」

　ギルドでの自分の呟きに対し、殺気を感じたことをヨルは思い出した。あの呟きの内容に腹を立てたということはつまり彼女が魔族ということなのだろう。相手が魔族ならやはり一番単純な試験方法が望ましい。小難しい試験は面倒だしな。

「フレッド、1対1の対戦をしようか。その戦いの中で俺がOKと認めたら、多分Aランクになれると思う」

　ヨルの提案にフレッドは少しだけ悩むそぶりを見せた。

「そんな簡単なことでAランクの称号を貰ってもいいのか？」

「そういうことは俺にOKと認めさせてからいうんだな」

　そして、ヨルは大きな声を出して言った。

「試験開始だ」

　その言葉を聞いたフレッドはいつの間にか右手に杖を持っていた。右手には何も持っていなかったはずなのに、気づいたら魔法の杖を取り出していた。服からも取り出すそぶりはなかったのでどうやら魔法を使って杖を取り出したようだ。どんな便利な魔法だよと内心突っ込みながら、フレッドの動きを観察する。フレッドは流麗な動きで杖をヨルの方に向けた。

「銀幕の世界（モンデ・デュ・グランド・エクラン）」とフレッドが呟くと同時に、周囲は氷一面の銀色の世界となった。氷の冷たさが肌に刺さるように感じられ、瞬く間に凍りついた世界に包まれる。ヨルもその銀色の世界の一部となり、冷たさが全身に染み渡る感覚に襲われた。

「少しやりすぎたか？」

　フレッドは少し申し訳なさそうに呟いた。ヨルという人物はギルドに信頼されているため、それなりの実力だと判断していた。

　しかし、魔法の効果があまりにも強すぎたようだ。

　初めて人間と戦ったため、その強さを過大評価してしまったのだ。フレッドは魔王城を出てまだ1ヶ月しか経っておらず、人間の強さの常識がまだ理解できていない。しかし、フレッドの感覚ではヨルの実力はもっと強いと感じていたために呆気なく終わったことには意外に感じた。

　試験監督をいつまでも氷漬けにしておくのはまずいと思い、フレッドは自分が凍らせた銀世界を見渡した。彼とは仲良くなれそうだと思ったが、自分の魔法が強すぎたためにその未来は訪れないかもしれないという一抹の寂しさが胸をよぎる。

　そう思い魔法を解除しようとしたが、その時異変があった。

　フレッドの額から汗がこぼれ落ち、手で顔を拭こうとしたが、手が震えているのに気づいた。全身が震えており、いつから自分が震えているのかすらわからなかった。この異様な現象に恐怖を感じ、その原因が凍らせた場所から放たれる強烈な殺気であることに気づいた。これは人間が出せるような殺気ではなかった。

　フレッドの身体は恐怖で怯えているように見えたが、頭の中は冷静だった。1ヶ月前の混乱した状況を思い出しながらも、今回は冷静に恐怖を押さえ込んで状況を分析した。

　そして、驚くべきことが目の前で起きた。氷の中から信じられないような雄叫びが響き渡り、その瞬間、氷が砕け散ったのだ。氷の中から現れたヨルは寒さに震えながらも、その強烈な存在感を放っていた。

「寒すぎだろ！なんだこの技？！てか、よく見たら修練場全体が凍り漬けじゃないか。くしゅん」

　身体が震え、寒さに耐えきれずにくしゃみが出た。

　対するフレッドは、驚いた表情を浮かべている。ヨルの威圧は効いていないようだ。そのことに少しのショックと嬉しさを覚えた。しかし、寒さが尋常じゃない。早く試験を終わらせるべきだと思い、フレッドを見た。

　フレッドは既に冷静な表情を取り戻し、次の攻撃を仕掛けようとしていた。

　冗談ではない。あんな魔法を何度も受けたくない。ということで戦略的撤退をすることに決めた。逃げたわけではない。

「ちょっと待った。OK、合格。そういうことで、攻撃するのはなしな！」

　ヨルの声にフレッドは動きをとめ、右手に持っていた杖もいつの間にか消えていた。

「OKをもらったということは私は合格ということでよかったのか？」

　フレッドは涼しい顔で尋ねる。

　この寒さの中で涼しい顔とはどういうことだよと内心で突っ込んだ。

「ああ、その認識で問題ない。おめでとう」

「そうか、ならよかった」

　フレッドは頷きながら安堵した表情を浮かべていた。

　緊張していたのだろう、フレッドが放った魔法は明らかにやりすぎだったのだから。

「それにしてもすごい魔法だな。修練場が氷の世界になっているよ。おかげで超寒い」

　ヨルは身体を震わせながら言った。格好つけるつもりが、寒さに負けてしまっている。

「そうだな。このままにしておくのはいささか問題があるようだ。元に戻すとしようか」

　フレッドが呟いた言葉に聞き間違えかと思ったが、彼女はすぐに行動に移した。フレッドは手を前にかざし、指先に魔力を込めると、そのまま優雅な動きで空中に氷の紋様を描き始めた。

「氷よ戻れ（リターナー）」

　フレッドが紋様に手を添え、呪文を唱えたその瞬間、修練場全体の氷がみるみる消えていく。10秒も経たずに氷の世界は元の修練場に戻った。唖然とするしかなかった。

「さて、これで問題はないだろう」

　修練場から氷を取り除いたフレッドは何事もなかったかのように言った。

「いやいや、なんだよ元に戻すって。すごすぎるだろ」

　信じられない光景にヨルは言葉を漏らした。

「氷は私の得意な魔法だからな」

　そっか、得意魔法か、なら元に戻せても不思議じゃないか。

「ってそんなわけ無いだろ！」

　つい大声で突っ込んでしまった。

「お、おお」

　フレッドは少しだけ驚いた表情を浮かべた。心の叫びが大きかったらしい。冷静になるために深呼吸をすると、冷たい空気が体内に染み渡った。

　フレッドが元に戻したのは氷の魔法だけで、その影響はまだ残っている。氷を消すだけでも十分すごいが。

　ヨルが考え込んでいると、フレッドは彼を探るように見ていた。

「試験も終わったことだし、ギルドに合格報告してくるかな」

　その視線から逃れるようにヨルは言った。追求してくると思ったが、フレッドは「わかった」と頷くだけだった。

　ヨルは今、ギルドが所持している腕輪をつけながら、受付嬢のカナからの質問を受けている。

「さてヨルさん、改めてお聞きしますが、そちらの旅人さんの実力はどうでしたか？」

　ヨルは即座に答えた。

「戦った内容でいうと問題なくAランク以上はある。正直俺はあまり戦いたくはない」

　カナは納得したように頷くと、ヨルの装備している腕輪を確認し、笑顔で言った。

「どうやら、本当のようですね」

「それで、こいつはAランクになれるのか？」

　ヨルがカナに問いかけると、隣にいたフレッドが声を出した。

「私はこいつではない。フレッドという名前がある。私に気を使ってそのように言ってくれているのはわかるが、別に名前を呼ばれるくらい問題ない」

　フレッドは立ち上がって腕を組み、フードの奥から鋭い目でヨルを見つめた。

「ああ、わかった。以後気をつけるよ、フレッド」

「わかればいい」

　フレッドは満足そうに頷き、椅子に腰掛けた。カナもフレッドに気を使うように言った。

「それでは、私もフレッドさんとお呼びしても宜しかったでしょうか？」

「ああ、問題ない」

「ありがとうございます」

　カナは笑顔で言い、話を続けた。

「さて、それでは他の質問に行こうと思っていましたが……」

　数秒間の間があり、カナの目がヨルとフレッドを交互に見る。

「私たちギルドはヨルさんのことを信頼しております。そして、フレッドさんについても先ほどのちょっとした会話から、友好的にできると判断いたしました」

「つまり？」

「Bランクに合格ということです」

　その言葉を聞いて、少しだけヨルの思考が停止した。フレッドがこっちを見ているような気がした。

「えっと、Aランクになれるわけじゃないの？」

　カナに尋ねると、彼女は微笑みながら答えた。

「あれ、お忘れでしたか？Aランクになるためには特別な試験を受けなければいけませんよ。2年ほど前にヨルさんも受けましたよね？」

　完全に思い出した。Aランクになるためには特別な試験が必要だった。そしてその試験に受けるためには、身分を証明しないといけない。フレッドには難しい試練だ。

　フレッドは冷静な声で尋ねた。

「つまり、現状だとBランクにしかなれないということか？」

「はい、そういうことになります」

「Bランクということは、高難易度の依頼を受けることはできないという認識でよかったか？」

　カナは少し申し訳なさそうに答えた。

「残念ながらそうなりますね」

「そうか、それは少し困ったな」とフレッドは淡々と呟いた。

　その言葉に、カナはある提案をした。

「フレッドさん1人では、高難易度の依頼を受けることはできませんが、パーティにAランク冒険者の方がいれば、受けることができますよ」

　カナは一瞬だけヨルの方を見た。まぁそうなるよなと内心でヨルは思った。

「なるほどな」

　フレッドは頷き、ヨルの方に姿勢を向ける。

「ヨル、私のパーティになって、高難易度依頼を受けてくれないか？」

　フレッドは正面からそう言った。フードを被っているので表情や声のトーンはわからないが、必死にそう言っているように感じた。それに、最初にAランクになれると思うと言った手前、断るには少々申し訳なさすぎる。

「ああ、わかった。フレッドのパーティに加わろう」

　フレッドは立ち上がり、握手を求める。

「一つ条件がある」

「なんだ？」

「俺たちが危険な状態に陥った時、まずフレッドは自分の命を優先して欲しい」

「けど、リーダーは私だぞ。パーティメンバーのことを考えるのはリーダーの仕事だろうが」

　フレッドはプンスカと怒った表情を浮かべている。

「わかっている。ただ、もしも俺たち2人が敵の手によって分断された時の話だ」

　フレッドは少し考えた。

「なるほどな。言いたいことはわかった。もしもその時が来たら、私は自分の命を大事にしながらも、お前を助けることを考える」

　その答えに少し煮え切らない思いを抱きながらも、フレッドの表情を見て、これ以上の説得は無理だと感じた。

「わかった、それでいい」

　ヨルは立ち上がり握手を返す。

「では、これからよろしく」

　フレッドのその言葉が嬉しそうに響いた。

「さて、フレッドさんとヨルさんがパーティを組んだことで、改めてギルドの依頼について説明いたしますね」

　カナが笑顔を浮かべながら話し続ける。

「ギルドの依頼はランクにより受注できる依頼の幅が変わってきます。高難易度の依頼はAランク以上の者しか受けることができません。しかし、パーティに1人でもAランクの冒険者様がいらっしゃいますと、Bランクまでのパーティメンバーなら受けることができます」

「ということは、その時にCランクだとすると高難易度の依頼を受けることはできないということか？」

　フレッドの質問に、カナが答える。

「はい、その認識で間違っておりません。ですので、フレッドさんがBランクで合格できたことはとても意味のあることだったんですよ」

「はー、そうなのか。知らなかったな。Aランク冒険者さえいれば、あとはなんでもいいと思ってた」

「なんだ？ヨルは知らなかったのか？」

　フレッドが首を傾げる。このフレッドの疑問に、カナが笑顔で答えた。

「ヨルさんが知らないのも無理はありませんよ。ずっと1人で依頼をこなしてきましたからね。しかし、ギルドの会員になった時に必ずこの説明はされますがね」

　カナは少し苦笑いを浮かべた。

「なるほど」

　フレッドはヨルをじっと見た。

「ま、まぁ、仕方ないだろ。俺は基本ソロなんだから」

　慌てるヨルを見て、カナは笑い、フレッドも少しだけ笑っていた。

　その後、ヨルとフレッドはカナから、依頼の内容について詳しい情報を聞いた。

　黒の魔術団のいる場所は、荒れた森という場所で、ここから歩いて2日はかかる距離だ。

「説明は以上となります。最後に黒の魔術団は本当に危険です。無理をせず、きっと生きて帰ってくださいね」

　カナの声は不安に揺れていた。その表情はまるで、自分の大切なものを送り出すかのように切なかった。

「心配するな。他のパーティがどの程度の実力かは知らんが、私は強い。そうそう死なんさ」

　フレッドは自身に満ちた声で笑みを浮かべる。その笑顔は氷のように冷たくも、美しい。

「まぁ、無茶はしないさ」

「ドラゴンを相手にしている人が何言ってるんですか？」

　カナの鋭い眼差しがヨルを射抜く。その目は言葉以上に強い説得力を持っていた。

　確かに無茶をしている場面が多かった気がする。前に戦ったドラゴンもギリギリの勝利だったしな。でも今の場面は大丈夫と言ってもいい場面だろと内心で突っ込む。

　だが、カナの心配を無視するのも良くないと思い、少しだけ反省することにした。

「それでは気をつけて行ってください。お二人の帰還をお待ちしております」

「ああ、行ってくる」

「気をつける」

　ヨルとフレッドはギルドを出た。

「何か準備をしていくものはあるか？」

　ギルドを出てすぐにフレッドがヨルの方を見た。

「ああ、実は先ほど依頼から帰ってきたばかりだからな。少し荷物を整理する時間をくれ」

「わかった。その辺にいるから、準備が終わったら言ってくれ」

　フレッドの了解のもと、ヨルとフレッドはひとまず解散となった。

　フレッドと別れた後、ヨルはアグネのいる薬屋に向かった。

　薬屋の前に到着し、店の中に入ると、独特な匂いが鼻をついた。店の中は薬草や調合中の薬品の匂いで満たされており、その匂いが外まで漂っている。

「いらっしゃい」と、いつも眠そうにしているアグネが紙を見つめながら言った。彼女の声は低く、どこかぼんやりとしている。

「久しぶりだな。アグネ」

　アグネは顔をあげ、ヨルを見た。彼女の瞳は半分閉じているが、ヨルを認識すると微かに微笑んだ。

「なんだ、ヨルか。1ヶ月ぶりくらいか？なんにしても生きていてよかったよ」

「そう簡単に死なないさ」

　ヨルはアグネのいる机の前まで行く。

「ところで、ライはいるか？斧のメンテナンスを頼みたいんだ」

　アグネは頷き、少し眠そうな声で呼びかけた。

「ライ、ヨルが来ているよ」

　奥から現れたのは、鍛冶屋のライだ。彼は筋肉質で力強い体格をしており、いつも油で光る手を持っている。

「相変わらず、重そうなバッグだな。まぁ、俺がおすすめしたんだが」

　ライはバッグを軽々と開けた。

「結構使えるよそのバッグ」

「まぁこんなバッグを盗むような奴はなかなかいないだろうな」

　ライは紫の斧を取り出し、じっくりと見つめた。斧には猛毒が塗られており、特殊な紙が巻かれている。

「この斧を使ったということは、それだけ相手は強かったのか？」

「ああ、かなり強かった。と言っても、その斧は最初の一振りしか使っていないがな」

「その使い方で問題ない。そう何度もこの斧を振られたらメンテナンスが面倒だ」

　ライは斧を持って奥の鍛冶場に向かった。ヨルもそれに続く。

　鍛冶場に入ると、熱気が立ち込めており、金属の焼ける音と匂いが充満している。ライは斧に液体をかけ始め、呪文を唱えながらハンマーで叩き始める。リズミカルな音が響き渡り、ヨルはその様子をぼーっと見つめる。数十分が経過し、ライはハンマーを止めた。

「よし、これで斧のメンテナンスはOKだ」

　斧を横に置く。毒があるので、直接は置かずに特殊な紙の上に乗せ、斧を丁寧に包み込む。

　ヨルとライは熱気に包まれた鍛冶場を出て、再び薬屋のひんやりとした空気に戻った。

　アグネが近づいてきて、ヨルに瓶を渡す。

「斧に塗られていた薬の調合は済んでいるよ。ところで、毒の効果はどうだったんだい？」

　アグネは、目を輝かせてヨルを見つめた。

「そうだな、思ったよりかは効き目は良くなかったかな。毒の効果が現れるまで、1時間くらいかかった。相手が中級ドラゴンというのもあるかもしれないが」

「なるほど、なるほど」

　アグネは興味津々に紙にメモをする。一通りヨルの話を聞くと「いいデータが取れたよ。これからの研究に役立ちそうだ」と満足そうにアグネは呟いた。

「次の依頼はもう決まっているのか？」

　ライが尋ねると、ヨルは頷いた。

「すでに決まっている。これから立つ予定だ」

「そんなにドラゴンの依頼というのは多いのかい？意外だね」

　アグネが言うと、ヨルは首を振った。

「いや、今回はドラゴンの依頼じゃない」

「ほー、お前がドラゴン以外の依頼を受けるとはな。少し意外だ」

　ライが言った。

「ああ、俺もそう思う。そして、その依頼をこなすために1人だけどパーティを組むことになった」

　ライがたっと椅子から立ち上がった。

「それは、さらに意外だな」

　ライは嬉しそうにしている。

「ということは、そのメンバーは強いということだね」

　アグネが言った。

「そうだな、手合わせしたがかなり強い」

「辛口の君にそこまで言わせたのなら相当だね。いい薬屋があるとぜひ紹介しておいてほしい」

　アグネは笑みを浮かべる。

「いい鍛冶屋があるというのもよろしくな」

　ライも笑みを浮かべた。

「ああ、次の依頼で無事生き残ったら、紹介しとく」

　ヨルはアグネとライに別れを告げ、薬屋を出た。

　待ち合わせのギルドの目の前まで戻ってきた。

「おーい、ヨル、こっちだ」

　声がした方に振り向くと、小洒落たカフェでフレッドがくつろいでいるのが見えた。店の大きな窓から柔らかい陽光が差し込み、彼女の銀髪が輝いている。

「ふーん、随分と良いところで待っていたな」

「ああ、ここのケーキは絶品だ」

　満足そうにフレッドが言った。彼女の前には、もう空になった皿が置いてある。

「うん、ここのケーキが美味いのは知っているよ。何回か来たことがあるし。ただ、フレッドって金あんの？」

「私が無銭飲食するとでも？」

「いや、そう言うわけじゃないが俺に払えってことなのかと思ったから」

「心配するな。金はある」

　フレッドはコーヒーを飲み終え、店員の元に向かった。ヨルはそれを座りながら見守る。

　フレッドは、持っている袋から、銀貨2枚を店員に渡していた。本当に金はあったんだとヨルは内心そう思った。店内にはコーヒーの香ばしい香りが漂い、カフェの穏やかな雰囲気が心地よい。

　ヨルとフレッドは店を出て、そして、王都アストリアの街をでた。

「さて、それでは黒の魔術団がいるという、荒れた森に向かうとするか」

「その前に一つ、人間の通貨ってどうやって入手したんだ？」

　フレッドはにやっと笑った。

「なに、私に恐喝してきた盗賊がいたものでな。逆にそいつらから金品を全て巻き上げてやった」

「ああ、なるほど。そういう入手手段もあったか、忘れていた」

　ヨルも数回くらい、盗賊から金を巻き上げたことがあった。

「質問はそれで終わりか？」

「ああ」

「では、出発するとしようか」

　そして、ヨルとフレッドは黒の魔術団がいると言う荒れた森に向かった。

　2日間かけてヨルとフレッドは荒れた森の入り口付近にやってきた。

「ほー、ここが荒れた森の入り口か。木々がたくさんあるな。隠れるにはうってつけの場所だ」

　フレッドはヨルの方を見て、自身に満ちた笑みで続けた。

「さて、悪い連中を懲らしめに行くとするか」

「ああ」

　二人は、薄暗い森に足を踏み入れた。森の中は湿気が強く、木々の密集により薄暗い光しか差し込まない。朽ちた葉の香りと、時折聞こえる鳥の鳴き声が周囲の静寂を際立たせている。

　荒れた森には、魔物が数多く生息していた。ヨル1人では進むのが困難な場所だが、今回はフレッドの魔法が全ての敵を一掃していた。彼女の放つ氷の魔法は、一撃で魔物たちを凍らせ、砕いてしまう。

「便利な魔法だな。ちょっと寒くなるのが玉に瑕だが」

「大した寒さではないだろ？それに私は寒いのは苦手ではない」

　氷魔法を扱えるのだろうから、そりゃ寒さには抵抗あるだろうなと内心で突っ込んでおく。

　2時間ほど歩いたが、黒の魔術団の気配はまだ感じられない。

「それにしても魔物が多いな。少し休憩するか？」

　フレッドが言った。

「そうだな。休憩するとしようか」

　ヨルは戦闘していないため、休憩は必要なかったが、フレッドはずっと魔力を使っているため、ここで一息つくのも悪くないと思った。しかし、フレッドの鋭い視線が彼を捉えた。

「おい、ヨル、もしかして私が疲れていると思って休憩をしようなんてそんな気を使ったことを考えていないだろうな」

　勘の鋭い奴だ。どう答えるのが正解だろうか。

「えっと」

「私は別に……」

　その瞬間、フレッドは言葉を一瞬止めた。

「いや、やはり少し疲れているな。魔力を使いすぎたようだ。休憩しようか」

　そう言うや否やフレッドは、地面に座り込んだ。

「ええ、なんで？」

　ヨルがそう聞いても、特にフレッドは反応しなかった。

　考えるのも面倒なヨルは、自分も鉄のバッグを置いてその場に座り込むことにした。

「そのバッグ結構重そうだな」

「まぁ、重い方かな。それより、飲み物はいるか？」

　ヨルはバッグから、水入れ用の袋を取り出した。

「いただく。ありがとう」

　冷たい水が喉を潤し、二人は一息入れた。

「よし、休憩は終わりだ。そろそろ進むとするか」

「了解」

　再びヨルとフレッドは荒れた森を進んだ。

　数分歩いていると、ある違和感が襲ってきた。休憩前までは、魔物がうようよいたはずだが、突然現れなくなったのだ。

「なぁ、フレッド」

「わかっている。魔物が少なくなっているんだろ？」

「ああ」

　なぜ魔物が少なくなっているのか。答えは簡単だ。人間の住処が近くにある。そして、その住処というのは十中八九黒の魔術団のものだろう。

　先ほどよりも周りを警戒しなければいけない。

　ヨルがそう思っていると、フレッドはすでに魔法の杖を持ち臨戦態勢に入っていた。

「来るぞ」

　前方から猛スピードでローブを被った人物がやってきた。その人物はフレッド目掛けて猛スピードを活かした攻撃を仕掛けてきた。しかし、フレッドはその動きをあっさりと避ける。

　その人物のターゲットはフレッドだったため、ヨルは少し離れただけで油断した。

「ばか、もっと離れろ」

　フレッドがそう言ったが、すでに手遅れだった。

　ヨルの身体が何かに縛られた。そして、ヨルは猛スピードで引っ張られるように連れて行かれた。一瞬の出来事であった。

　フレッドは連れ去られたヨルを見て、急いで追いかけようとした。

　だが、その直後、木々が倒れ落ちる音が響いてきた。振り返ると、大きな鉄球が勢いよく襲いかかってきた。

　鉄球はフレッドには届かなかったが、その衝撃で木々が次々と倒れてきた。フレッドは素早く身を翻し、倒れる木々を避け、鉄球が飛んできた方向に目を凝らした。

　そこには、大柄のフードを被った人物がゆっくりと歩いてきた。その男はフードを外し、獰猛な笑みを浮かべていた。

「お前は、俺の獲物だ。ここで死ぬ」

　彼の冷たい声が森の中に響いた。

　フレッドはその挑発に冷静に応じた。

「こっちは急いでいるんだけど」

「おいおい、仲間の心配よりも自分の心配をした方がいいんじゃないか？」

　男は挑発的に言い放つ。

　フレッドは即座に行動に移り、男に向かって強力な氷の魔法を放った。しかし、男の周囲には不気味な光を放つ球体が突如出現した。その球体は、まるで漆黒の夜空に浮かぶ星々のように輝き、フレッドの魔法がその中に吸い込まれるように消えていった。フレッド自身も、その球体の範囲内に巻き込まれた。

　球体の内部は異様な雰囲気で満たされていた。空気は重く、息をするたびに冷たい圧力が体を包み込む。まるで時間と空間が歪んでいるかのように、周囲の景色がぼやけて見え、音も吸い込まれるかのように静かだった。

「これは、なんだ？」

　フレッドは不審そうに周囲を見回した。球体の表面は薄い膜のように輝き、触れると冷たい感触が指先に伝わる。

「さぁ、なんだろうな。試しにお得意の氷魔法を打ってみたらどうだ？」

　男は勝ち誇ったかのように言った。

　フレッドは罠の可能性を感じつつも、試しに軽く氷魔法を放とうとした。しかし、魔法は発動しなかった。球体の内部は完全に魔法を封じる空間となっており、フレッドはその力を使えなくなっていた。

「なるほど。魔法を発動できなくなるエリアってわけか」

「余裕を浮かべるのはやめたらどうだ。貴様が魔法のスペシャリストだというのは、この荒れた森に入った時から知っている」

「ふーん、だからあんたが私の相手をしようってわけ？」

「そう言うことだ。魔法頼りの魔法使い相手に俺は負けない」

　男は巨大な鉄球を回し始めた。

「随分面白いスキルを持っているようだな」

「その余裕な態度がどこまで続くのか見ものだぜ」

　魔法を使えなくなったフレッドと鉄球使いの闘いが始まった。

　ヨルは抵抗できずに引っ張られる。かなりのスピードで引っ張られているので、木々にぶつかるたびに痛みが走る。枝が顔を掠め、茨が腕に絡みつく。

　ようやく止まったかと思うと、次の瞬間、ヨルは宙を舞い、壁に激突した。

「いったいなー」

　ヨルは呻き声を上げながら、自分を縛っている紐のような魔法を力で無理やり引き裂いた。

　そして、持っている鉄のバッグを地面に下ろし、屈伸などの軽い準備運動をする。特に体に異常はないようだ。

「ドラゴンを相手に戦うAランクというのも大したことないな」

　ローブを被った男が冷笑を浮かべて言った。

「ドラゴン相手だとこんなしょうもない小細工はしてこないからな」

「しょうもないだと？現に貴様は、仲間と離されここにいる。ただの負け惜しみだな」

　男の声には侮蔑が込められていた。

　ヨルはそれを嘲るように笑う。

「ああ、しょうもないよ。俺なら一撃で片がつくように毒の剣かナイフで刺して勝つ。せっかくのスピードも宝の持ち腐れだな」

「……なんだと？」

　相手は明らかに機嫌が悪くなったようだ。

「どうでもいいからさっさと続きを始めよう。格の差を教えてやるから」

「上等だ」

　ローブの男はヨルの周りを目にも見えないスピードで走り出した。

　木々と木々を素早く移動し、その動きはまるで風のように速い。

「俺を怒らせたことを後悔しながら死ね」

　相手の声が不気味に響く。ヨルは全神経を張り巡らせる。

　後ろから近づいてくるのがわかった瞬間、ヨルは素早くジャンプをする。

　ローブの男は、ヨルが立っていた場所をそのまま素通りしようとするが、ヨルはそのローブを掴んだ。

　男の動きは速いが、この程度の力ではドラゴンを相手にするヨルにはどうということはない。ヨルは引っ張られながらも、完全に相手の動きを殺した。

「何？！」

　ローブの男は驚愕する。

　そんなことで驚いている場合ではないだろう、とヨルは内心で嘲笑した。

　ヨルはローブの男を顔の前まで引き寄せる。

「言っただろ、格が違うってな」

　ヨルは相手の腹に拳を叩き込んだ。その勢いのまま、男を前方に吹き飛ばす。

　ローブの男は吐血しながら木々を貫通し、遠くの岩壁に激突した。

「木々にぶつけられるのも結構痛いもんだろ？」

　ヨルは吹き飛んだ男の方向に走り寄る。岩に激突したローブの男は倒れており、気絶しているようだ。

「まさか、この程度で戦闘不能になるなんてな。ドラゴン相手じゃありえないぞ」

　ヨルは自分のバッグを置いた場所に戻り、フレッドの元に戻る準備を始めた。

「よし、戻るか」

　バッグを持ちあげようとした瞬間、後ろからパチパチと手を叩く音が聞こえてきた。

　ヨルはその音がする方に振り向いた。

「さすがはAランクですね。新入りじゃ相手になりませんでしたか」

「……いつからそこにいた？」

「あなたが彼を吹き飛ばしたあたりですね」

「今の戦いを見て、随分余裕があるんだな」

　男はフードを外し、冷ややかな笑みを浮かべた。

「そうですね。あなたは強いですよ。ですが私の味方も強いですからね」

　男の後ろから2人の男性が現れた。1人の腕には見覚えのある木の紋様が描かれた腕輪が装備されている。

「おい、その腕輪をつけた兵士」

「おや、こちらの方に見覚えがあるのですか？実はつい最近捕まえましてね。この方のお仲間も捕獲しようと思ったのですが、いかんせんこの方が強かったですから、他のお仲間は捕まえられませんでした。これだけ強い方に寂しい思いをさせるのは、少し申し訳ないですね」

　ヨルは、2人の男性をよく観察する。明らかに生気を感じない。顔も真っ青だ。

「そいつら、生きてんのか？」

　男は高らかに笑った。

「ふふふふふ、ははははは。生きているわけないじゃないですか。私はアンデッドマスターです。当然死人ですよ」

「そうか、アンデッドを使うのか」

「この人物は知り合いか何かですか？」

「いや、会ったことはない」

「ふむ、だったら気にしなくていいんじゃないですか？」

「かもな。……けど」

「けど？」

　男の話を聞いていると、ヨルの中で怒りが沸騰する。ハラワタが煮え繰り返るような感覚だ。だから決めた。

「お前はぶちのめす」

　アンデッド使いはニヤリと笑った。

「それは楽しみですね」

　鉄球使いとフレッドの闘いは、一方的に鉄球使いが攻めていた。巨体を揺らしながら、鉄球を振り回すたびに、空気が引き裂かれ、木々が粉々に砕け散る。鉄球が木にぶつかるたびに、轟音が響き、木の破片が四散する。

「余裕な態度だった割に、一切反撃してこないんだな」

　鉄球使いは汗を拭いながら言った。

　フレッドは、足元に積もる木の破片を見下ろしながら、冷静に避け続けていた。

　鉄球が彼女に届くことは一度もない。

「あまり、自然は無闇に壊さない方がいいぞ」

　それでもフレッドは余裕の表情で軽口を叩いた。彼女の声は冷たく、しかしどこか楽しげだった。

「少しイラつくな。その余裕」

　鉄球使いは苛立ちを隠せなかった。一方的に攻めているはずなのに、フレッドの態度は変わらない。逆に彼の精神が揺さぶられている。

　再び鉄球が放たれ、フレッドはそれを優雅に避ける。だが、次第に周囲の木々が倒れ、障害物がなくなっていく。フレッドは状況が不利になっていることに気づいた。

「さて、そろそろ終わりにしようか」

　鉄球つかいは冷静を取り戻し、勝利を確信していた。

「決着がつく前に一つだけいいか」

　フレッドは穏やかな声で尋ねた。

「遺言か？まぁ構わないぜ」

　鉄球使いは笑った。

「お前ら黒の魔術団は何をしようとしている？」

　風が吹き、遠くの木々がざわついた。

「そんなものは決まっている。我らが主人を顕現させるためだ」

　無造作に鉄球を岩にぶつけた。岩が砕け、地面に落ちる。

「その主人というのは、恐怖の悪魔か？」

　鉄球使いは感心したような表情を浮かべる。

「ほー、少しは悪魔について知っているようだな。だが、違う。我らが呼ぼうとしているのは黒の悪魔様だ」

「……そうか」

　突然周囲の温度が急激に下がった。空気が冷え、息が白く凍るような寒さが広がる。

「なんだこの寒さは？」

　鉄球使いは動揺を隠せない。

「貴様からはもう十分聞いた。あとは死んでいいぞ」

　フレッドの声が冷たく響いた。

「何言っていやがる。お前は魔法を使えないはずだぞ」

　寒さとは裏腹に、鉄球使いは冷や汗を流す。

　フレッドを中心にして空気がどんどん冷えていく。

「魔法か。確かに使えない。だが、魔法が使えなくてもスキルは使えるぞ」

　フレッドの言葉に鉄球使いは驚愕した。

「お前、魔法とスキルのハイブリットか」

「そういうことだ。現れよ、凍りつく猛虎」

　フレッドがそう叫ぶと、彼女の背後から氷の虎が顕現した。その姿は美しい氷の造形で、見るもの全てを圧倒する威圧感を放っていた。

「ガァぁぁぁ！」

　氷の虎が叫ぶと、凍てついた空気が迸り、鉄球使いの身体を包み込んだ。彼は寒さと恐怖から震え上がった。

「お前、なぜ最初からそのスキルを使わなかった？」

　フレッドは冷たく睨みつけた。

「決まっているだろう。勝ちを確信した状況なら、簡単に情報を吐くと思ったからだよ」

「はは、そうか」

　鉄球使いは諦めたように笑い、最後の力を振り絞って鉄球を投げつけた。だが、氷の虎の冷たい息がそれを凍らせ、鉄球使い自身も瞬く間に氷づけにしてしまった。

「さて、ヨルは無事なんだろうか。……探しにいくか」

　フレッドはその場を去った。

　そして数分後、鉄球使いが氷ついた場所にローブを被った人物が5人集まっていた。周囲の冷たい静寂を破るように、低くざわめく声が響く。

「私たちの支部の隊長がやられたみたいね」

　一人の女性が冷たく言い放つ。

「どうしますか？レスト様」

　一人が問う。

「そんなもの決まっているわ。予定とは違うけれど、私たちの魂を犠牲にして、黒の悪魔様を顕現させる」

「黒の悪魔様のお手伝いをしたかったのですが、状況が状況ですからね」

　もう一人がため息まじりに言った。

「ええ、これ以上私たちの誰かが、やられてしまったら最後の手段も使えないからね。私たちの分は、アンデットマスターである、トリトに任せましょ」

　レストは悪魔顕現の儀式を始める。彼女の声が低く響き渡ると、地面に魔法陣が浮かび上がる。5人がそれぞれの配置につき、その中央には鉄球使いの凍りついた姿があった。

「我らの魂を黒の悪魔様に捧げます。ですので、顕現して世界を混沌の闇へと導いてください」

　レストがそう呟くと、6人の魂が魔法陣に向かって吸い込まれる。

「あなたもそれで本望よね。アーレイ」

　魂が飛ぶ前、凍りついたアーレイにレストが寂しそうに呟いた。

　そして、悪魔が舞い降りた。だが、自らの命を絶った彼らは知らない。魔法陣から出現したのは黒の悪魔ではなかった。

「あーあ、黒の悪魔め。まぁ、借りがあったから仕方ないんだけど。……いいや、せっかく顕現したんだし、現世を楽しまないとね。あ、そうだ君たちの魂、美味しかったよ」

　不気味な笑みを浮かべる悪魔の声が、冷たい風とともに森中に響き渡った。

　悪魔が現れた瞬間、最も近くにいたフレッドがその異変に気づいた。

　ヨルのところに向かっていた足を止め、来た道を急いで引き返す。

　隠そうともしない圧倒的な存在感、それがひしひしと伝わってくるのをフレッドは感じた。

　やがて、その存在感のもとにたどり着いた。見た目は可憐な少女のような姿だが、どこか浮世離れした雰囲気を漂わせている。

　白い髪は肩までかかり、冷たい光沢を放っている。少女はフレッドの方を振り向くと、にっこりと笑った。

「やぁ、君が僕の相手をしてくれるの？」

　フレッドは一瞬、何かを考えるように目を細めた。

「貴様は何者だ？さっきまで貴様のような奴はいなかったと思うが」

「ああ、そこに死んじゃった人たちがいるでしょ」

　フレッドは少女が指差した方を見る。先ほどまでいなかった5人が倒れていることに驚くが、状況はすぐに理解した。

　彼らの魂が捧げられ、この悪魔が顕現したのだ。緊張が走る。

「お前は、まさか、黒の悪魔か？」

　少女は顎に手をやり、考えるそぶりを見せる。

「うーん、悪魔ではあるんだけどね。彼らにはちょっと申し訳ないけど、黒の悪魔ではないかな」

　奇妙な言い回しに、フレッドは少し混乱する。

「じゃあ、お前は一体なんなんだ？」

「僕は恐怖の悪魔、フィアだよ」

　その一言でフレッドは氷ついたように固まった。しかし固まったのは一瞬だった。

「銀幕の世界（モンデ・デュ・グランド・エクラン）」

　すぐさまフレッドは魔法を放った。その魔法は、試験でヨルに使った技であり、威力はその時よりもずっと大きなものだった。冷気が一気に広がり、周囲の空気が凍てつく。フィアも凍りついていた。しかし、数秒経過すると、フィアのいる氷が割れた。

「ひどいなー。いきなり何するのさ」

　フィアはいきなり凍らされたにも関わらず平然としていた。

「お前が私の父を倒したのか」

　フレッドは憎悪の目を向けている。

「父？なんの話？君は僕のことを知っているの？」

「私の父は魔王だ」

　フィアの瞳が一瞬驚きに見開かれ、その後すぐに興味深そうな輝きを帯びた。

「なるほどね。へー、君があの魔王の子どもね。それはちょっと楽しくなってきたかも」

「そうか、私もこんなに早く貴様に会えて嬉しいよ」

　冷たい風が吹き抜け、森の木々がざわつく中、恐怖の悪魔と魔王の娘の戦いの火蓋が切って落とされた。フレッドの目には決意と怒りが燃えており、フィアは興味深げにその様子を見ている。周囲の温度がさらに下がり、緊張感が一層高まった。

　話はフィアが顕現する少し前に遡る。

　ヨルはファラクス山の元兵士の槍捌きに翻弄されていた。こちらが近づこうとすると見事にカウンターを合わせられる。

　ファラクス山にいたドラゴンのファラクスも言っていた通り、かなりの使い手だ。しかし、それよりも気になることがある。

「なぜ、お前ら2人は俺に攻撃してこないんだ？」

　ヨルは槍の攻撃を避けながら、動かない2人を見た。

「私はアンデッドマスターですからね。私の役目は後方支援です」

「ふーん、まぁ、お前はわかるけど、そっちのアンデッドはなぜ俺を攻撃してこない？その方が数でも有利だろ」

　もう一人のアンデッドは特に何も言わずただ黙って立っている。そのアンデッドの代わりに答えたのが隣にいるトリトだ。

「ふふ、彼はですね。弱いものには興味がないのですよ」

　その物言いに少しカチンとした。

「あん？俺が弱いってか？」

「いえいえ、とんでもない。私からするとあなたはとてもお強いですよ。是非ともコレクションにしたいですね。ただ」

　そういいトリトは、隣にいるアンデッドを見た。

「彼には、あなたが役不足ということみたいですよ」

　その物言いにはイラッとくるが、どうやらもう一人のアンデッドはかなり強いらしい。アンデッドなので、ドラゴンや人みたいに、その熱量から強さを測ることがヨルにはできなかった。

　どれくらい強いのか様子見をしてから本気を出そうと思っていたが、試されていたのはヨルの方らしい。

　ヨルはその事実に、少しだけワクワクした感情を覚えた。元兵士の槍の間合いから距離をとる。

「おや、どうしました？そんな逃げ腰では私をぶちのめすことなんてできませんよ」

　トリトがにやつく。

「心配するな。あとでお前はちゃんとぶちのめす。それと、ファラクス山の兵士。今からお前をぶっ倒す。恨むなら、お前の主人に恨め」

　トリトは不服そうに眉を顰めた。

「何か私のことを勘違いしているようですから言っておきますが、彼は誰も恨みませんよ」

　トリトは指をパチンと鳴らした。するとファラクス山の兵士は先ほどのまでの雰囲気とは変わる。

「トリトよ、私の意識を戻して一体なんのつもりだ？」

「いえね、彼が私のことを勘違いしているようですから、あなたの口から説明してもらいたくてですね。私は別にあなたのことを無理やりアンデッドにしたわけじゃないですよね？」

　ファラクス山の兵士は、ヨルの方を見る。

「そうだな、俺はお前と契約してお前のアンデッドになった。それは事実だ」

　ほらねと言わんばかりに、トリトがヨルのことを見た。

「茶番だな」

「あなたにはこれが茶番に見えるとでも？」

「そういうことじゃない。ただ、俺にとってアンデッドにしたことに同意があろうがなかろうがどうでもいい話だってことだ。その契約の内容にも興味はない。ただ、お前らは俺の敵だってことに変わり無いだろ？」

「……それもそうですね」

「だろ。だったら、話は簡単だ。おい、ファラクス山の兵士」

「なんだ？」

「お前の村からはいずれ強い戦士が誕生すると思うぜ。だから、まぁ安心して死んでいいぞ」

「そうか」

　ファラクス山の兵士の口角が少しだけ上がる。

　ヨルは身体全体に力を込める。風が吹き、木々がざわつく。今まで動かなかったアンデッドがこちらを見た気がした。

「GYAAAAAAA！」

　ヨルはドラゴンのように叫び声をあげると、身体は硬い鱗で覆われていた。

「いくぞ」

　ヨルは全速力でファラクス山の兵士に突撃した。風を切り裂く音が耳をつんざく。ファラクス山の兵士が反応しようとするが、ヨルのスピードはその反応を何歩も上回る。瞬きする間もなく、ヨルの拳が兵士の腹に突き刺さった。その拳はあっさりと腹を貫通した。

　しかし、相手はアンデッド。痛みを感じない。だが、ヨルの攻撃の勢いは止まらない。

　兵士は持っている槍で反撃しようとするが、その槍はヨルの鱗を貫通できない。さらに、腹を貫通した状態で力を込めることもできず、攻撃は無意味だった。

「これで終わりだ」

　ヨルはファラクス山の兵士に向かって大きく口を開け、内なる炎を解き放つ準備をする。口の中から猛々しい炎が現れ、周囲の空気が一気に熱くなる。

「ファイヤーブレス」

　猛烈な炎がファラクス山の兵士を包み込み、周囲の木々までも黒こげにしていく。その圧倒的な熱量でファラクス山の兵士は黒焦げとなり、最終的には灰となって消え去った。

「……容赦がないですね」

　トリトは驚いた様子でそう言った。

「そういうふうに叩き込まれたからな。敵に容赦はしない」

「貴様、名はなんという？」

　今まで黙り込んでいたアンデッドが初めて喋った。

「人に名前を聞くときはまずは自分から名乗るのが礼儀らしいぜ。最近知ったことだがな」

「いいだろう。拙者の名はカレクだ」

「そうか、俺はヨル。今からお前を全力でぶちのめす」

「楽しみだ」

　カレクは鞘から剣を抜いた。ヨルも拳を構える。

　互いに動こうとした瞬間、異変に気づいた。とてつもない大きな存在が、この荒れた森に出現したのだ。

　この瞬間、フィアが顕現したのだ。

「かなりやばそうなやつが出現したようだな」

「どうやら、彼らが奥の手を使って悪魔を召喚したみたいですね」

　状況を理解できているのかトリトがニヤつきながら言った。

「悪魔？」

「おや、我々の目的を知らないのですか？黒の悪魔を顕現させることこそが我々の目的ですよ」

「そんなことは知っている。しかし、なぜこのタイミングで悪魔が顕現するんだ？」

「あなたのお仲間が想像以上に強かったんでしょうね」

「おい、そんな話はどうでもいい。さっさと戦闘を始めよう」

　カレクが急かすように呟いた。

　ヨルも事態が深刻であることを理解していたので、頷く。

「わかった」

　互いに駆け出す。トリトは先ほどまでと変わらず、ただ高みの見物をしているのみだ。

　スピードはヨルの方が早い。ヨルは拳を前に繰り出そうとしたが、危険を感じ、横に方向転換した。

　カレクは懐からナイフを取り出し、ヨルに投げつけた。そして、すぐさまヨルに向かって走り出す。ヨルはそのナイフを右手で弾く。

　カレクの間合いになったとき、またもヨルは危険を感じた。2度目で確信した。間違いなく、カレクの斬撃はヨルを死に至らしめることができるだろうと。死の恐怖か。そんなものは何度も味わってきた。

　カレクの剣がヨルを切りつけようとする。ヨルはその剣を右肘と右膝に挟み込む。挟み込むのに失敗していたら、真っ二つになっていたが、成功した。

「おい、わかってるよな。ここは完全に俺の間合いだ」

　ヨルは口を大きく開ける。炎のブレスを目の前にいるカレク目掛けて放った。当たればアンデッドといえど、灰になる一撃だ。カレクは咄嗟に剣を離し、かろうじてヨルの炎のブレスを避ける。しかし、完全に避けることはできず左腕が焼けこげ、使い物にならなくなっている。そして、カレクの剣はヨルが持っている。

「結果は見えたんじゃねぇのか？」

　ヨルは、カレク、そしてトリトを見た。だが二人は諦める様子を見せていない。カレクは迷わず突進してきた。ヨルは持っている剣が邪魔なのでカレクに使われないようにするため、遠くに投げ飛ばした。

「ま、そうするでしょうね」

　トリトが言った。そして、カレクは立ち止まり空に手をかかげる。すると、ヨルが投げ飛ばした剣が流星の如く、カレクのところに戻ってきた。

「これでまだ決着はついていないぞ」

「剣が戻ったところで左腕はなくなっているんだ。俺が圧倒的有利なのには変わり無いぞ」

「さて、それはどうかな」

　がさっと音が聞こえる。音がなった方を見ると、トリトが地面にしゃがみ込んでいた。地面に何か書き込んでいる。

　そして、地面から魔法陣が浮かび上がった。その魔法陣に向かってカレクが走り出した。魔法陣の中に入ると、カレクの焼けこげた左腕がみるみる回復していく。完璧に元の腕に修復した。

「彼は私のアンデッドですからね。私の魔力を使えば、回復するのは簡単です。さて、これで振り出しに戻りましたね」

　トリトがニヤつく。

「そうか？それは、どうだろうな」

　先ほどの意趣返しのようにヨルはそう呟いた。

「どういう意味だ？」

　カレクが眉を顰める。

「こういうことだ」

　ヨルは自身のスキルをさらに解放した。背中からは力強い羽が生え、よりドラゴンの鱗が煌めくようにヨルの身体を主張する。指にある爪も鋭利になり、口から牙も生えてきた。その姿はまさに人とドラゴンの融合体だった。

　ヨルは、カレクとトリトに威圧を込めた眼力で睨みつける。

　カレクは数歩だけだが、後ろにさがり、その自分の行動に驚いているようだ。

　トリトは、顔に大量の汗をかきながら、片膝をついていた。

「ま、まさか、私がただ睨まれただけで恐怖を感じてしまうなんてね」

「貴様、一体何者だ？」

「何者でもいいだろ。ただ、お前らは誇っていいと思うぞ。人間相手にこの姿を見せるつもりはなかったからな。まぁ、中には例外もいるがな」

　カレクは落ちつくように剣を前に構えた。

「戦う意志はまだあるようだな」

「当然だ。拙者は強いものを斬るために、今もこうして存在しているのだから」

「そうか、なら決着をつけようか。あまり、お前らに時間を使っている暇はなさそうだからな」

　ヨルは先ほどと同じく前に飛び出した。カレクは先ほどとは違い、その場から動かない。

　それはカウンターを狙っているからだ。ヨルはそれをわかった上で、カレクに正面から突っ込んだ。カレクのカウンターのタイミングは完璧だった。ちょうどヨルの身体が目の前に来る頃に、斬撃を振り下ろす。

　しかし、その斬撃はヨルの身体を斬ることができなかった。彼の身体を纏うドラゴンの鱗が先ほどよりも硬くなっていたからだ。

　その事実に、カレクは大きく目を開け驚いていた。だが時すでに遅し。

　ヨルは右の手の鋭利な爪でカレクの腹に向けて突き刺すように攻撃した。カレクはそのヨルの動きに反応することはできない。

　ファラクスの兵士のように、ヨルの右手はカレクの腹を貫通した。

「貴様との戦い、楽しかったよ」

　腹を突き刺されたことで、カレクが諦めたのかそう呟いた。

「そうか」

　その諦めたような態度に少しイラっとしたが、ヨルは躊躇しない。カレクの目の前で口を大きく開ける。

「ファイヤーブレス」

　炎の息吹がカレクに直撃した。カレクの身体が灰となって消え失せた。

「さて、最後はお前の番だぞ」

　ヨルは片膝をついているトリトを睨みつけた。ヨルはトリトの目の前まで移動し、首元を掴んだ。

「全く、いつかは最後の日が来ると思っていましたが、まさかこんな情けない最後になるとは思いもしませんでしたよ」

「それが、お前の最後の言葉でいいか？」

　トリトは身体を震わせながらも、笑みを浮かべる。

「ええ、なんだかんだこの生を堪能できましたからね」

　ヨルはトリトを前方に投げ捨て、そして炎の息吹を放った。

　炎の息吹はトリトに直撃し、トリトの身体は黒こげ、そして灰となった。最後は風が吹き、その灰すらも消え失せた。

「さて」

　ヨルはフレッドが戦闘しているであろう方角を見る。その場所には明らかに異質な存在がいることがわかる。

「死ぬなよ、フレッド」

　ヨルは翼で空をとび、全速力でその場所に向かった。

「やばそうなのがこっちに向かってきているね」

　フィアは笑う。

　そのすぐ近くではフレッドが地面に仰向けで倒れていた。

「君との戦いは楽しかったよ。まさか、この辺り一帯を氷つけるほどに強力な技を持っているとはね」

　フレッドにはフィアの言葉が聞こえない。だが、意識はまだかろうじて残っている。

　私は負けたのか。しかも、奴は一般的な攻撃魔法だけで私に勝ち切った。何やっているんだろうな私は。

　フレッドの心の中では後悔が溢れ出してきていた。そして、自分でも気づかないうちに、涙を流す。

「ごめんなさい、父上、兄上」

　諦めるようにフレッドが呟いた。

　風を切り裂く音が聞こえてくる。誰かが高速でこちらに向かってきている。

　フィアは上空を見上げ笑みを浮かべる。

　ヨルは異質な存在目掛け全速力で向かうが、その近くで倒れているフレッドに気づいたため、スピードを少し殺し、異質な存在に突進した。異質な存在は、ヨルの突進をジャンプで避けた。

「生きているか？フレッド」

　ヨルは異質な存在に警戒しながらも、フレッドを見た。彼女は涙を流していた。

「何、泣いてんだ？」

　フレッドはこちらに気づいたと同時に自分の目もとに手を添える。

「お前にはカッコ悪いところを見られてしまったみたいだな」

　彼女はため息をつく。

「私のことはもういい。お前は逃げろ」

　諦めたようにフレッドが呟いた。

　さっきも似たようなセリフを聞いた。ヨルの腹の中で炎が暴れる。そんな感覚に陥る。

　ヨルは倒れているフレッドを無理やり引き起こし、両手で肩を掴んだ。

「ふざけるなよ。俺との約束を忘れたのか？まずは自分の命を優先しろって言ったよな？」

　怒りに満ちたヨルの目がフレッドを睨みつける。フレッドはその目をまっすぐに見返す。その瞳には後悔の色が浮かんでいた。

　ヨルは言いすぎたかもしれないと思い、手を離そうとした。しかし、フレッドは必死にヨルの手を掴もうと手を動かしている。その姿を見て、ヨルは肩から手を離すのをやめた。

「そうだったな。私は、お前と約束をしたのだったな。こんなところでは死ねない」

　フレッドに生きようとする意思が蘇ったのをヨルは感じた。

「ああ、それでいい」

　ヨルはニヤリと笑う。

「君たちいいね。かなりいい」

　異質な存在がヨルたちに向かってそう言った。

「で、あいつはなんなんだ？」

「あいつは、私が探していた恐怖の悪魔だ」

「……恐怖の悪魔か。黒の悪魔ではないんだな」

「いやー本当は彼らは黒の悪魔を呼んだみたいだったんだけどね。こっちの都合で僕が呼び出されることになったんだよね。ま、今となっては感謝しているけど」

　フィアは楽しそうに笑う。

「状況はよく分からんがあの女は、フレッド、お前の標的という認識で合っているのか？」

　フレッドは頷く。

「なるほどな。あとはまかせろ。お前は自分が生き残ることだけ考えろ」

　ヨルはフレッドを優しく地面に下ろした。とにかく、こいつと全力で戦うためにはフレッドがいない場所に移動しないといけない。

「そんなハンデを背負った状態で僕と戦うつもり？」

　こっちの考えを見透かすようにフィアが言った。

　ヨルは黙ってフィアを睨みつける。後ろのフレッドに届かないように前方にいるフィアにだけヨルの威圧が届くように全力で睨みつけた。

「ふふふ、どうやら本気で僕に勝つみたいだね」

　威圧を受けても、特に何も感じなかったのか、フィアは笑う。

「けど、僕にもちょっとした予定というものがあってね」

　フィアはケロッとした表情で続ける。

「君とこれから戦ったら楽しいんだろうけど、そこで倒れている魔王の娘が死ぬのも嫌なんだよね」

　フィアから発せられる空気がどんどん和らいでいるのを感じる。

「だから、ここでの決着はどこかで持ち直すというのはどうだろうか」

「……どういうことだ？現状明らかにお前が有利な状況だろう？」

「言ったでしょ。僕はその魔王の娘に死なれると困るんだ。彼女には、可能性を感じているからね。そういうことだから。あ、君たちは、1ヶ月後に王都エルセリオンで開かれる大会については知っているかい？」

「……は？」

「いやー、この世界に呼ばれる前は、ちょっとその大会を見るのが楽しみでね」

　何を言っているんだ、こいつは？と内心でヨルはそう思う。

「一応知ってはいるが、お前がその大会に出場するのか？」

　フィアが顎に手を当て考える。

「うーん」

　風が吹く。あたりが凍りついているためか、その風はかなり冷たい。

「そうだな、その大会に出ても君は全力で戦えないだろう。だったら意味はないね」

「つまり？」

「つまり、僕はその大会に刺客を送るとするよ。その刺客に勝てたら、僕がいる場所を教えてあげよう。そしたら僕と戦えるよ？」

　フィアはフレッドを挑発するように笑みを浮かべた。

「わかった。その条件を飲む」

　ヨルが後ろを振り向くとフレッドはすぐそばまで来ていた。

「いいのか？そんなの待たなくても今ここで決着をつけることだってできるんだぞ？」

　フレッドは首を振る。

「いや、今ヨルとあいつが戦っても私は完全に足手纏いだ。そんなのはごめんだ」

「うんうん、それがいいと僕も思うよ」

　満足そうにフィアが言った。

「忘れるな、恐怖の悪魔、この1ヶ月で必ず貴様よりも強くなって見せる」

「楽しみだね」

　笑みを浮かべ、フィアはその場から去った。

　フレッドは地面に座り込んだ。

「大丈夫か？」

　ヨルはしゃがんでフレッドを心配そうに見る。

「すまないな。ヨルには迷惑かけた」

「こんなことは迷惑じゃない。俺にとっては死なれるのが一番の迷惑だからな」

　フレッドは顔をあげヨルの目を見る。ヨルもフレッドの目を見つめ返す。

「だから、迷惑といったら、お前が諦めた態度をした時だな。あれには、怒ったよ」

「ああ、すまない。２度と自分の命を諦める選択はしないと約束するよ」

「それならいいさ。立てるか？」

　ヨルはフレッドに手を差し伸べ、フレッドはその手を取る。

「ああ、ありがとう。この1ヶ月でどこまで強くなれるかわからないが、限界まで強くなろう」

「そうだな」

　そして、ヨルとフレッドは1ヶ月後の大会に向けて、修行を開始した。

第3章　冒険には常に恐怖がつきまとうものである

　フィア（恐怖の悪魔）は不気味な静けさの小道を蛇行し、一歩ごとに砂利に静かに囁く。片側には鬱蒼とした藪がそびえ立ち、その葉は幽霊の姿と鮮やかなコントラストを成している。

　風が吹くたびに葉がそよぎ、静かな音色で語りかけるようなささやきのシンフォニーが響き渡る。この静けさの中で、時折鳥のさえずりが空気を中断し、森の穏やかな外観を裏切る繊細なメロディーを響かせる。

　フィアは、森の不気味なリズムが織りなす雰囲気に倒錯的な喜びを感じる。

「さて、誰を刺客として送ろうか？」

　フィアは大声で物思いに耽り、その声には陽気な悪意が含まれていた。1ヶ月後に王都エルセリオンで開催される大会への期待が、フィアの言葉に興奮をもたらし、まるで来るべき混乱を考えるだけで明るい気持ちが彼女に吹き込まれているかのようだ。

　突然、グロテスクな笑い声が雰囲気を貫く。その音は静けさを突き破るように聞こえるほど不快である。それは悪意に満ちた笑い声で、空気を汚すような下品さで木々の間から響き渡る。この笑い声に驚いた鳥たちは、必死に逃げようとして羽を葉に打ち付けながら、必死に止まり木から飛ぶ。

　笑い声に興味をそそられたフィアは、こっそりとその笑い声の源に向かって進む。霧の中に人影が現れ始めると、フィアは木の陰に巧みに身を隠し、目の前に広がる光景を観察する。

　ボロボロの服を着てサーベルを振りかざした粗暴な男たちの一団が、汚れのない馬車を襲撃している。近くには若者の青年が立っており、その服装は悪党とは明らかに異なる。きちんと襟までボタンを留めており、周囲の混乱とは対照的だった。震える体にも関わらず、彼は剣を振り回し、勇敢に悪党たちに威嚇を試みている。

　フィアはその光景を見て笑う。明らかに恐怖を感じているにも関わらず青年は勇気を振り絞っている。それがフィアには面白いと感じている。

　悪党の一人は冷笑しながら青年を嘲る。

「おいおい、かっこいいね兄ちゃん。そんな老人のことは諦めて逃げればいいのによ」

　よく見ると、馬車の中には年配の人物が見える。

　さらにその近くには別の人影が倒れており、周囲の地面は血で真っ赤に染まっていた。彼らが身に着けている頑丈な鎧は、おそらく彼らが傭兵であり、保護のために青年たちが雇ったものであると推測することができる。悪党たちの中には熟練の傭兵にも勝てる実力者がいたらしい。この世界では、弱肉強食の厳しい法則が蔓延していることを、厳粛に思い出させる。

「この世は弱肉強食だ。弱いものは強いものから全てを奪われる。そして、この場においてはお前らは弱者であり、俺たちが強者だ」

　悪党たちの一人がそう言った。

　しかし、この場において弱者であるのは、悪党たちも同じだ。彼らの不運はフィアの気まぐれな興味によってもたらされる。

「ねえねえ、何がそんなに楽しいの？僕も混ぜてよ」

　フィアがふざけて口を挟んだ。

「なんだ餓鬼。てめーも死にに来たのか？」

　悪党の一人が下卑た笑みを浮かべ嘲笑した。

　フィアはただ魅力的な笑みを浮かべて応じ、そして今話した男に軽く触れようと手を伸ばす。その行動は何気なく、しかし不気味だった。

「なんだ？嬢ちゃん」

　そう言った瞬間、男の体内から血が吹き出す。あたりの地面は鮮血に塗れる。

「は？」

　フィアを除く全員が驚いて息を呑んだ。

「僕ね、自分の実力もわからずに生意気にする奴が嫌いでね」

　フィアは笑うが、その目には少しの明るさも見られなかった。

「こいつやべー、完全に常軌を逸している。お前らこいつを取り囲め」

　悪党のリーダーらしき人物がパニックに陥りながらも命令した。

　驚きにも関わらず、悪党たちはリーダーの命令に従い、フィアを取り囲む。

「もしかしてだけど、僕と殺る気？」

　フィアは口元に冷たい笑みを浮かべながら尋ねた。

「こっちにはこれだけ人数がいるんだ。お前みたいなチビに負けるかよ」

　悪党の一人がそう豪語し、残りの者たちは勢いづいたようにそれぞれフィアに侮辱の言葉を投げつける。

　その光景にフィアはため息をつく。

「群れないと強気になれないのはダサいね。けど、その虚勢は自らの破滅を早めているだけだよ」

　そして、フィアはまるで邪悪な考えを思いついたかのように、意地悪な笑みが顔に広がった。

「これから起きる出来事に、君たちがどんな反応をするかとても楽しみだ」

　魔法陣が悪党たちの周りに出現し、まるでそれが彼らを取り囲んでいるかのように見える。

「魔法陣だと？いつの間に仕掛けていたんだ？」

　リーダーは驚きの声をあげた。

「いつ？今だよ」

　フィアは笑った。すると魔法が発動し、広がる闇が悪党たちを包み込み、球体となって彼らをフィアとともに閉じ込めた。

「なんだこれ？何も見えない！」

　悪党の一人がパニックになって叫ぶ。

「心配する必要はないよ。どうせすぐに君たちは何も感じれなくなるのだから」

　フィアの言葉は悪党たちに衝撃を与え、彼らを混乱に陥れた。

「や、やめてくれ。助けてくれ！」

　彼らは懇願する。しかし、叫び声の中でも、リーダーは冷静さを保った。

「奴の言葉はハッタリだ。そんな魔法は聞いたことがない」

　リーダーは仲間たちを安心させようとした。

「着眼点は悪くないよ。でも、そのアドバイスはちょっと遅かったね」

　フィアは暗闇の中で不気味な笑みを浮かべて言った。

「何を言っているんだ？」

　リーダーは呟いたが、すぐに何かおかしいことに気づいた。部下たちの悲鳴や叫び声は止み、不気味な静寂が訪れている。

「お前、一体何をしたんだ？」

　リーダーは息を呑み、パニックで息が荒くなった。あまりにも深い静けさだったので、リーダーには自分の呼吸音が聞こえるほどで、それは彼にとって恐ろしいほど大きく感じられた。

　リーダーは状況を把握できず、理解したいという欲求と真実に対する本能的な恐怖の間で引き裂かれていた。フィアはそんなリーダーの動揺を見透かしたように笑った。

「気づいたようだね？そう、君はすでに一人ぼっちなのさ」

「嘘だ！」

　リーダーは自分の厳しい現実を否定して叫んだ。

「ま、君が見えている景色は真っ暗だからね。だから、君にも見えるようにしてあげるね」

　フィアは優しく言い、指を鳴らすと光が暗闇に溢れた。リーダーは目の前の光景に衝撃を受けて、言葉を失う。彼と一緒に閉じ込められていたはずだった部下は誰一人としてどこにも見当たらない。

「俺の部下はどこに行ったんだ？」

　彼は恐る恐る声を絞りながら尋ねた。フィアの笑顔はより邪悪なものに歪んだ。

「君のお仲間はね、僕が食べちゃった。でも、あまり美味しくなかったね」

　彼女はがっかりしたように言った。

「なんなんだ？！お前は？！」

　リーダーは顔から大量の汗をかきながら後退した。

「君も僕から恐怖を感じているみたいだね」

　フィアは不気味に笑う。そして、リーダーの背後から黒い影が現れ、彼を動けなくするように絡みついた。

「これは何だ？！」

　リーダーは暴れて黒い影を振り払おうとするが、影はどんどん彼を覆っていった。

「その影が君を完全に包み込んだ時、君は僕の餌になるんだよ。君の部下たちと同じようにね」

　フィアは笑いながら自分のお腹を撫でた。

　リーダーは絶望した。

「やめてくれぇ、助けてくれぇ！」

　しかし、フィアの笑みはさらに意地悪くなる。

「この世は弱肉強食だ。弱いものは強いものから全てを奪われる。そして、この場において君達は弱者であり、僕が強者だ、という風に君も言っていたじゃないか」

「いやだ、助けてくれ！」

　リーダーは絶望の中で泣き叫んだ。しかし、フィアはそんな彼の言葉を受け入れることはなかった。

　そして、その言葉がリーダーの最後の言葉となった。黒い影がリーダーを完全に取り込むと、フィアの方へ向かった。その影はどんどん小さくなり、フィアの口の中に消えていった。

「うん、他のやつらよりも君の魂は少し美味しかったかな。でも、もっと美味しい魂を知っているから、大したことはないけどね」

　周囲を覆っていた魔法の球体を解除する。魔法が解けると、すぐそばには先ほど悪党たちに襲われていた青年と老人が立っていた。フィアは彼らをちらりと見るが、すぐに興味がないかのようにその場を去ろうとした。

「待ってください！」

　青年がフィアを呼び止めた。フィアは足を止め、青年の方を振り返った。

「さっきの悪党たちはどうなったんですか？」

　青年はおずおずと尋ねた。

「世の中には知らないことがいいこともあるよ」

　フィアは無関心そうに答えた。

「あなたが彼らを……」

　青年が言いかけると、フィアはにっこりと笑った。

「うん、そうだよ。で、君は何のために僕を止めたの？」

「……お願いです、私を強くしてください！」

　青年は真剣な眼差しでフィアに懇願した。

　フィアは青年の目をじっと見つめ返した。青年は一切目を逸らさない。

「ふふふ、君面白いね」

　フィアは青年に興味を持ったかのように笑った。

「でも、君かなり弱そうだ」

「うっ」

　フィアの言葉に青年はがっかりした様子で項垂れた。

「強くしてあげるのは構わないけど」

「本当ですか！」

　青年は顔を輝かせる。

「ただし、僕は悪魔だよ。それでもいいの？」

　青年は一瞬驚いたが、すぐに首を振った。

「それは関係ありません。教えてくれるのが人間だろうと悪魔だろうと、私が強くなれるならそれでいいんです」

　青年は迷いなく答えた。

「ふーん、そう言っているけど、本当に大丈夫かな？」

　フィアは馬車から降りてきた老人を見やった。老人は少し考えるそぶりを見せたが、やがて優しい笑顔を浮かべた。

「この場にお主がいなければ、わしらはもうこの世にはいなかった。だから、お主には感謝しておる。そんなお主に対して、良いも悪いも言やせんよ」

　老人の言葉に、フィアの心に初めて感じるような感情が湧いた。これは一体なんだろうと一瞬思ったが、すぐにそれを振り払った。

「じゃあ、少しの間、君たちのところで面倒を見てもらうことにするかな」

「面倒なんてとんでもありません。これからはご指導、よろしくお願いします」

　青年は深く頭を下げた。

「うん、よろしくね」

　フィアは、悪意のない純粋な笑顔で答えた。これは彼女にとって珍しい表情だった。

「それでは、先生とお呼びしても宜しいですか？」

　青年は礼儀正しく尋ねた。

「呼び方は何でもいいよ。好きに呼んでいい」

「ありがとうございます、先生。私の名前はナタです。そして、こちらが私の祖父」

　ナタは老人に視線を移した。

「わしの名前はシバじゃ。よろしく頼むぞ、先生」

「うん、よろしく」

「では、先生、馬車に乗りましょう。ここから歩くと1時間ほどで私たちの家に着きます」

　ナタは馬車を指差したが、重大な問題に気づいた。先ほどの戦いで馬が足を怪我しており、馬を操る兵士もいない。ナタは困った表情で、「荷物もあるし、ここから全てを歩いて運ぶのは遠すぎますね。荷物は諦めるしかないかもしれません」と独り言のように呟いた。

　そんなナタの言葉を聞いて、フィアは怪我をしている馬のそばに近づき、傷ついた箇所に手を触れた。小さな魔法陣が現れ、水のような何かが、馬の足の傷口に落ちる。すると、馬の足の傷はみるみるうちに癒えていった。

「すごいですね。魔法ってそんなこともできるんですか？」

　ナタはフィアの魔法に感動し、驚いた様子で言った。

「まぁ、僕の魔法はちょっと特別だからね。ただ、君に同じことができるとは思わないけど」

　ナタが少し落胆した様子で顔を伏せると、「でも、心配しないで。君には君の強さがあるさ。きっと」と慰めるように付け加えた。

「さて、馬も元気になったことですし、先生が馬を操ってください」

　元気を取り戻したナタが期待を込めてフィアを見上げた。

　しかし、フィアは首を横に振り、「いや、馬を操るのは君の役目だよ。僕はただ、必要な時に手助けするだけさ」と言って、ナタの肩を軽く叩いた。

「え、私が馬を操るんですか？」

　ナタは驚きながらも、フィアの隣に座り、馬車を操り始めた。初の挑戦に少し緊張しながらも、フィアの安心させる言葉に励まされ、少しずつ自信を持ち始める。道中、何度か馬車を操ることに手こずる場面もあったが、フィアの助けを借りながら、無事にレセン村の外れにある馬小屋に辿り着いた。レセン村はちょっとした森の奥地にあり、旅人がよく休憩しに来たりする場所である。

　村の外れにある馬小屋で、ナタとシバは馬車を預ける。その際、馬小屋のおばさんがフィアに興味津々で話しかけるが、ナタがさりげなくフォローし、彼女の正体が明かされないように気を配った。

　馬小屋を出た後、フィアはおばさんからの微妙な敵意を感じ取ったことをシバに尋ねた。しかし、シバは村の複雑な事情をフィアに話すことを避け、彼女もそれ以上追求せず、のんびりと村に着くまでの景色を楽しみながら歩いた。

　もしもこの時、話をしていたら、未来は変わっていたかもしれない。

　レセン村の入り口に到着すると、村人たちの間にはナタとシバに対する緊張感が漂っていたが、フィアはそれに深入りせず、ただ静かに周囲を観察していた。

　その緊張感はほんの一瞬のことで、ナタは村人たちの反応に気づかず、元気に村中を歩き始めた。シバとフィアは、そんなナタの後をついていく。彼らの家は村の中心から少し離れたところにあった。

「先生はこれからうちに泊まってくれるんですよね。どのくらいの期間、いらっしゃるんですか？」

　家に到着するなり、ナタがフィアに尋ねた。

「うーん、1ヶ月くらいかな」

　ナタの表情が一瞬だけ寂しげになったが、すぐに元気を取り戻し、「その1ヶ月で、僕はどれだけ強くなれますか？」と期待に満ちた声で尋ねた。

　フィアは顎に手を当て、考え込むふりをしながら、「正確にはわからないけど、僕が教えるなら、普通の訓練よりずっと成長できるだろうね」と自信たっぷりに答えた。ナタの顔には笑顔が広がった。

「絶対に先生の期待に応えて、強くなります！」とナタは意気込んだ。

「それじゃ、帰ってきたばっかだけど、これから訓練を始める？」

「はい、お願いします！」

　ナタは即答した。

　そうして、ナタの厳しい訓練が始まった。

　訓練が始まって2週間が経ち、その時間は楽しいひとときとなっていた。

「ナタの成長はどうじゃ？」

　シバがフィアに尋ねると、「うん、かなり良くなってる。彼には天賦の才があるみたいだ」と彼女はナタを見つめながら答えた。ナタは瞑想中で、以前に比べて魔力のコントロールにも随分と集中できるようになっていた。その成長ぶりに、フィアは満足げな笑みを浮かべた。

「そうだ。ねぇ、シバ。ちょっと出かけてくるよ」

「ほう？どこか見てみたい場所があるのかの？」

「うん、この辺りを少し見てみたいんだ」

　その時、シバの表情はわずかな寂しさが浮かんでいたが、フィアはそれを見逃してしまった。

「そうかい、じゃあ楽しんでおいで。気をつけていってくるんじゃぞ」

「もちろん、あと、夕食のおかずには期待しといて」

　フィアが笑顔で応じて、空へと飛び立っていった。

　彼女が姿を消すと、シバは瞑想中のナタに声をかけた。

「ナタ、聞こえるか？」

　シバの呼びかけに、ナタは目を開けて振り返った。

「先生から聞いたんじゃが、今日は剣の訓練を山で早めに始めた方がいいそうだぞ」

「先生がそう言っていたの？」

　ナタは一瞬戸惑ったが、すぐに「ああ、そうだった。少し前にそんな話をしていたような気がするよ」と言って、剣のトレーニングの準備を始めた。

　ナタが準備を終えると、シバは彼の成長ぶりに目を細め、満足そうに言った。

「たった2週間でもこんなにも成長したなんて、彼女のおかげじゃな」

「はい、先生のおかげです」

　ナタが照れくさそうに答えた。

　シバはナタの頭を優しく撫でながら、「本当に大きくなったものだ」と感慨深げに言った。

「シバ、それ以上はやめてくださいよ。恥ずかしいですから」

　ナタははにかみながら抗議した。

「ほっほ、ここにはわしたちしかいないのだから、何の問題もないじゃろう」

　ひとしきり撫でた後、シバが笑いながら手を引っ込めた。ナタは少し違和感を感じながらも、それを特に気にせず家を出ていった。

「行ってきます、シバ」

「気をつけて行ってくるんじゃぞ」

　シバが寂しそうに呟いた。

「わしの役目もそろそろ終わりかな……」

　フィアが散歩に出かけたのは、実は特別な理由があった。今日はシバの誕生日で、ナタが1週間前からその話をしていたのだ。ナタはシバに何か美味しいものを食べさせてあげたいと考えており、その話をする彼の笑顔がとても印象的だった。悪魔の世界では誕生日を祝うと言う習慣がないため、このような慣習はフィアにとって新鮮な体験だった。彼女自身、自分がいつ誕生したのか具体的に覚えておらず、何千年もの長い時を生きてきたので、そういった記念日はあまり関心の対象ではなかった。

　しかし、ナタがシバの誕生日をどう過ごすかについて楽しそうに話すのを聞いて、フィアも何か特別なことをしてあげたいと思ったのだ。そんなわけで、フィアは空を飛び、少し遠くにある特定の食材を求めてこの地にやってきた。目的地は、緑豊かな草原で、空からでもその景色は一際目立っていた。フィアが探していたのは、黒豚と呼ばれる食用の魔物で、その味は格別だと言われている。

　やがて、フィアは目当ての黒豚を発見し、その前に降り立った。黒豚は突然の出現に驚き、逃げ出そうとしたが、フィアは黒豚の臆病な性格を利用し、恐怖を感じさせて黒豚の動きを封じた。黒豚の陰が黒豚を捕らえ、やがて球体の形になって小さくなり、フィアのポケットに納まった。

「さて、帰りますか」

　フィアは満足げにつぶやき、再び空へと舞い上がった。帰り道、空は急に暗雲で覆われ、雨が降りそうな気配を感じたので、フィアは雲の上を飛ぶことにした。

「雨が降っても、雲の上だから関係ないね」

　フィアは心の中でつぶやき、シバの誕生日のためのサブライズを手に、レセン村へと向かって飛んでいった。

　フィアがレセン村に戻った時、村は異様な静けさに包まれていた。人の気配がなく、雨音だけが響いている。何かがおかしい。フィアは直感的に感じ取り、シバの家へと急いだ。

　雨に濡れながらも、フィアは気にせずに走る。やがて、シバの家の近くで雨音とともに人々の怒鳴り声が聞こえてきた。声はシバの家に近づくにつれて大きくなり、家の前に着くと、そこは村人で溢れかえっていた。

　中心で、ナタが誰かを抱えている。雨に濡れているために泣いているのかはっきりしないが、彼の表情は明らかに悲しみに満ちていた。フィアは心配になり、何が起きたのかを知りたいと思った。

　フィアが周囲を見渡すと、村人たちの間に敵意が満ちているのがわかる。中には明らかにシバを恨んでいるような言葉を投げかける者もいた。

　ナタが抱えているのはシバだった。シバのお腹からは血が流れ、雨と混じり合っている。村人たちはその光景に背を向け、シバの傷を見ることすら拒んでいる。深刻な傷だ。

　フィアは人々を掻き分け、シバの元へと進んだ。

「何があったの？」

　フィアは低い声で尋ねる。村人たちの声は静まり、恐る恐るフィアを見る。ナタはフィアに気づき、懇願する。

「先生、お願い、シバを助けて！」

　フィアは迅速にシバの傷を治療する。しかし、シバは意識を取り戻さない。

　フィアがシバの心臓に手を当てると、すでに心臓は止まっていた。

「ごめん、ナタ。死んでしまった人を生き返らせることはできないんだ」

　ナタは涙を流しながらシバを抱きしめた。

「あぁぁぁぁ」

　その悲痛な叫び声が、村中に響き渡る。

　そんな中、村人の一人から「ようやく死んだか」と言った声が聞こえた。フィアはその声の主、馬小屋のおばさんに近づき、彼女の頭を掴んだ。

「シバが死んで当然とはどういうこと？」

　フィアは怒りを込めて問い詰めた。おばさんは恐怖で言葉を失い、何も答えられず気絶する。だが、フィアの脳裏に一人の兵士が映り込んだ。馬小屋のおばさんがその兵士と話をしているところが見える。話をしているのは馬小屋のおばさんだけでなく、レセン村の人も何人かいる。そして決定的瞬間、その兵士がシバを剣でお腹を刺しているのが、見えた。

　フィアはおばさんを放し、ナタの元へと戻った。ナタはシバを失った悲しみに暮れていた。フィアはその場にいる村人たちを見渡す。

「ねぇ、ナタ、村人の人間全員殺しちゃっていい？」

　ナタは泣きながらも、首を横に振った。フィアはそのことに疑問を抱く。

「なんで？シバを村人たちに殺されたも同然なんだよ。だったら、こっちが村人を殺してもいいんじゃないの？」

　ナタは泣きながらも、彼女の顔を見た。

「ダメです。そんなことは、しちゃいけないんです。何よりも、そんなことをするのはシバが望んでいないんです」

「なんでそんなことがわかるの？」

　ナタは涙を流しながらも、懸命にフィアに話をする。

「以前、シバが言っていたんです。例えどんなことが起きようとも、村の人たちを恨んではいけないって」

　ナタはしゃっくりしながらも、フィアに伝えた。

「ふーん、なるほどね。シバがそう言っていたなら仕方ないか」

　ナタとフィアの話は小声で、雨音もあるため村人たちの耳にはとどかない。しかし、村人たちは村人たちで、少女に対する不安を抱いていた。

　治癒魔法を見ても、フィアがかなりの使い手であることは村人たちにもわかっていた。

「よかったね、君たち。僕に殺されなくて済んで」

　フィアは村人たち全員に聞こえるように、大声でそう言った。村人たちはざわつく。

「なんでお前に、俺たちが殺されなきゃいけねぇんだ？」

「そうだそうだ」

　一人が文句を言うと、それ以外の人たちも勢いづいたのか、全員が罵倒するようにフィアに口々に言った。

「うるさいんだよ」

　フィアが一喝すると、全員が黙り込んだ。そして、その場にいるフィアとナタ以外の全員が気を失うように地面に倒れ込んだ。雨水が溜まっていたので、バシャっといった音が一斉に鳴る。

「先生、何をしたんですか？」

「なーに、あまりに自分勝手な物言いにムカついたんで、ちょっと眠ってもらっただけだよ。大丈夫、シバが悲しまないように殺してはいないよ」

　ナタの方を向き、フィアは優しい笑みを浮かべる。

「村人たちはね」

　そういうと、フィアは冷徹な表情を浮かべた。

「それってどういう意味ですか？」

　しかし、フィアはそれには答えない。

「シバが言っていたのは、レセン村の人を殺してはいけないってこと。そうだよね？」

「は、はい、それであっていますが」

　ナタが少し戸惑ったように答える。そんなナタとは対照的にフィアは笑みを浮かべる。

「ちょっと僕、用事があるから、シバのこと見といて。すぐ戻るからさ」

　そういい、フィアの体がふわっと浮き、ナタに笑顔を見せ、振り返ると風のようにその場を去った。

「何かわかったのですか？先生」

　そのナタの独り言が雨音と共にかき消される。

　フィアは目的地へと全力で飛んだ。向かっているのは王都エルセリオンに続く道だ。十分ほど空を飛び荒野についた。荒野の上を飛びながら下を見渡すと、目的の人物たちを発見した。約10人の兵士たちが豪華な装備を身にまとい、荒野を進んでいた。その装備から、前に出会った盗賊とは訳が違う特別な集団であることが一目で分かった。

　フィアは、その兵士たちの目の前に降り立った。

「やぁ」

　フィアは笑顔でそういうが、その目は笑っていない。

「何者だ？！」

　兵士たちは持っていた武器を構え、フィアを警戒した。そして、一番前にいる人物を庇うように前にでる。

「僕はフィア。念の為聞いとくけどさ、君たちが、シバを殺したんだよね？」

　兵士たちは驚いた表情を浮かべる。

「……なぜ、それを知っている？」

「ふーん、やっぱり君たちが殺したんだね。なんで殺したのかな？」

「貴様に教えると思っているのか？小娘」

　兵士の後ろから、一番豪華な装備をしている人物、ラカルが前に出る。

「別に教えなくてもいいよ。どうせ、わかることだし」

　そう言って、フィアはラカルに襲いかかった。フィアの右手がラカルの頭を掴もうとするが、彼はそれを左手で弾き、彼女のお腹を殴り飛ばした。

　フィアは吹っ飛び、大きな岩に直撃した。衝撃で岩が砕け、耳障りな音が響いた。

「さすがです、ラカル様」

　兵士たちは感心したように言ったが、ラカルは自分の右手を見つめ、その後吹っ飛んで岩にぶつかったフィアの方を目を細めて見つめていた。

「お前たち、できるだけここから離れろ」

「えっと、それはどう言うことですか？」

　戸惑ったように兵士たちが口を揃える。

「もたもたしていると死んでしまうぞ。あの小娘は化け物だ」

「し、しかし、ラカル様はどうされるのですか？」

「あの化け物を止めておくものが必要だろう」

　ラカルがそう言うと、慌てたように他の兵士が口を揃える。

「そんな、いけません。自ら囮になるようなことなどと。それならば私が」

「いえ、私が」

「いや、お前たちにはあれを止めることはできない。いいからさっさとこの場から消えろ」

　ラカルは冷たく言い放つ。

「わ、わかりました」

　自分たちの実力の無さに悔しそうにしながらも、最後はラカルの言うことを聞いた兵士たちだ。

「あんな、小娘さっさと倒して戻ってきてくださいね」

　そういい、兵士たちは急足でその場を離れる。

　フィアは、自分が吹き飛ばされたことに多少なりとも驚いていた。ダメージは受けてはいない。油断していたとはいえ、まさか一発もらうとは思っていなかったのだ。

「あの人間結構強そうだね」

　彼女は砂ボコリを払いながら呟いた。砂粒が手のひらにザラザラと感じられる。結構な距離を吹き飛ばされたことに驚きつつも、彼女はラカルに再び突進した。そのスピードはまるで矢のように猛烈だった。

　フィアはすぐさまラカルの前に移動した。だが、ラカルもそのフィアの動きを予測していたのか、またも攻撃を防ぐ。今度は剣でフィアの拳を受け止めた。金属と拳がぶつかる音が響く。

「君、結構やるね」

　フィアは拳と剣がぶつかりあう中で呟き、ラカルと距離を空けた。

「貴様こそ、何者だ？」

　ラカルは眉を顰め、フィアの動きを警戒する。

「僕が何者かね。それに答えて欲しかったら、シバをなぜ殺したのか教えて欲しいかな」

　フィアは冷たく笑う。その言葉にラカルはため息を吐いた。ラカルは目の前にいる少女がどの程度の化け物なのか測りかねていた。

　もしかすると自分よりも強いのではと、先ほどの攻防で考えた。少しだけでもいいので時間稼ぎがしたいと考えるラカルはフィアの質問に答えることにした。

「そうだな。私の知る範囲で答えてやろう。貴様は天使というものを知っているか？」

「天使？それはもちろん知っているけど。天使ということと、シバが死ぬことに何か関係あるの？」

「あるさ」

　フィアは不思議に思う。なぜなら天使というのは人類の味方だからだ。悪魔は気まぐれで人類の敵と思われるが、天使は人類の敵にはならない。

「天使は人間の味方じゃないの？というよりもシバは天使なの？」

「天使は確かに人類の味方だ。だが、堕天した天使は違う。これは人類に対して、敵とまでは言わないが、味方ともいえない。そして、シバという老人は堕天した天使だ」

「なるほど。それでシバを殺したんだ」

「ああ、恨んでくれて構わないよ。人を殺すというのは、誰かに恨まれても仕方のないことだから」

　ラカルはどこか諦めるようにつぶやいた。

「別に、恨んではないよ。ただ、今の僕は不機嫌なんだ」

　フィアは冷徹に笑う。

「そうか」

　ラカルは剣を構えた。

「さて始めようか」

　そう言って、フィアは両手を合わせた。ラカルとフィアを取り囲むように魔法陣が浮かび上がる。

「こんな魔法陣いつの間に仕掛けたんだ？」

　あまり、驚いた様子ではないが、ラカルがフィアに問いかけた。

「今さ」とフィアは微笑する。

　そして、魔法陣から黒い球体が出現し、二人を包み込むように広がった。闇が一瞬で視界を奪い、肌に冷たさが感じられる。

「恐怖の世界（モンデ・デュ・フィア）」

「……これが貴様の技か」

「そうだよ。真っ暗な世界へようこそ。ここでは灯りがなく、何も見えないでしょ。それはやがて恐怖となる」

「……そうか。何も見えないことが恐怖か。そんなものは恐怖とは言えないな」

　ラカルは暗闇の中で走り出した。フィアには暗闇の中でも見えているから、その動きがわかる。寸分の狂いなくラカルはフィアに向かって走り出していた。

　そして、フィアの目の前で剣を振りかざす。フィアはその剣を避けるが、ラカルは続け様に剣を振るった。鋭い音が闇の中で鳴り響く。

「もしかして、僕のこと見えているの？」

「伊達に王国の近衛騎士ではない。この程度の修羅場など何回も潜っている」

　その声はまるで暗闇を切り裂く剣のように鋭かった。ラカルの剣がフィアの頬を掠める。

「すごいね、君。少なくともこの中では、暗闇というだけではなく、恐怖という感情も簡単に呼び出されるはずなんだけどね」

　フィアは頬の切れた部分を右腕で拭う。するとすぐにその切り口は塞がった。

「恐怖なら何度もしてきた。近衛騎士になる前から、何度もな。もちろん、乗り越えただなんて大袈裟なことは言えない。だが、やはり、この程度の恐怖なら私には感じない」

　ラカルは真剣な眼差しでフィアを見つめた。暗闇の中でもその瞳には確かな決意が光っている。

「そうみたいだね」

　恐怖を感じていないラカルを見て嬉しそうに笑顔を浮かべる。その笑顔には狂気が滲んでいた。

「嬉しそうだな。貴様の技が効いていないんだぞ。なぜ嬉しそうにする？」

「そうだね。滅多に起きないことが、ここ最近で2回も連続で続いたからね。驚きよりも嬉しいんだ。人間にはまだまだ僕の遊び相手がいるってことにね」

　薄暗い紫色の灯りがともる。先ほどの黒で塗られた真っ暗な世界よりも不気味さが増しているようだった。ラカルにはその灯りが地獄の入り口のように感じられた。

「なぜ、灯りをつける？」

「君には見えているみたいだからね。これ以上暗闇で戦うアドバンテージはないと思ったんだ」

「……その言い方だと、今の状況は先ほどの暗闇よりもお前が有利になったというように聞こえるが」

　フィアは、不気味に笑う。

「ふふっ、いい勘しているね。せーかい」

　ラカルは思考を巡らせる。なぜ、少し明るくなったことで、相手に有利になるのだろうか。考えるが答えは出ない。しかし、何かが先ほどまでと変わっている気がした。違和感が肌にまとわりつく。瞬間、何かが動く気配がした。フィアを警戒しながらも周りを確かめる。だが、何者も見当たらない。

　その時、ラカルの下から黒い何かがまとわりついてきた。その冷たさが皮膚にじわりと染み渡る。

「どうやら、恐怖を感じたようだね」

　ラカルの慌てた様子に、満足したようにフィアが笑った。

「さて、その状況に陥ると抜け出すのはかなり困難を極めるよ」

　ラカルは黒いものから抜け出そうとするが、それは彼の動きを封じるようにより深く絡みついてきた。下半身全てがその黒い何かによって覆われた時、ようやくラカルは気づいた。

「これは影か？」

「そこから、正体に気づくなんてね。すごいじゃん。でも、もう身体の半分は飲み込まれているよ。その状態だと、もう時間の問題だね」

「……そうだな。そうかもしれない」

　ラカルは影から抜け出すのを諦めたのかのように、暴れるのをやめ、目を瞑った。

「おや、諦めたの？ちょっとがっかりだな。ま、いいや、シバの仇だ。そのまま死んでいいよ」

　影がまとわりつくスピードが上がる。影はすぐにラカルの身体全体を飲み込んだ。

「ちょっとは楽しめたよ。兵士さん」

　ラカルを飲み込んだ影は徐々に小さくなる。だが一定の大きさになると、その収縮は止まった。

　フィアは眉を顰めて首を傾げる。

「おかしいな。なんで小さくならないんだろ」

　影は徐々に膨らみ始め、ラカルを飲み込んだ時と同じ大きさに戻る。そして、その影の中から一筋の光が漏れ始めた。光は次第に強まり、眩い輝きと共に影を一瞬で消し去った。

　ラカルの身体が太陽のように発光していた。

「極光」

　ラカルは静かに呟き、剣を構えフィアに突進した。一瞬の出来事だった。フィアの虚をついたラカルは彼女の腹を剣で突き刺した。しかし、フィアのお腹からは、血飛沫は飛ばなかった。ラカル自身、その一撃に何の手応えも感じなかった。

「まさか、致命的な一撃を一発もらうなんてね」

　剣をお腹に突き刺されたままでフィアが言う。

　あまりの不気味さにラカルは慌てて剣を引き抜き後ろへと下がる。

　しかし、引っ張りだしても、フィアのお腹からは血が流れてこなかった。

「血が流れないことが不思議かい？」

　フィアはラカルの驚いた表情を見て満足したように頷く。

「やっぱり、不思議なようだね。教えてあげる。僕の体には人間のように血は流れていない。ああ、でも心配しなくてもいいよ。君の攻撃はちゃんと効いたから」

　フィアはそういい自分が剣で突き刺されたお腹に手を添える。魔法陣が浮かび上がり、剣で貫かれたお腹は元通りとなっていた。

「化け物だな。さっき切った頬の傷口から血が出なかったのは、浅かったんじゃなくて貴様の体質だったってわけか？」

「そうなるね」

　そして、二人は互いに飛び出した。フィアの拳とラカルの剣がぶつかりあい、激しい戦いが繰り広げられる。

　ラカルはフィアの攻撃を的確に捌き、着実にフィアに剣での斬撃を浴びせる。

　フィアも反撃を試みるが、その攻撃は全てラカルが綺麗に捌いていた。

「いいね。凄くいい剣の熟練度だよ」

　明らかに分が悪い状況にも関わらず、フィアは楽しんでいるかのようだった。

　ラカルもまた自分が優勢だと思っていないのか、フィアの嬉しそうな表情に対して警戒心を解かずじっと見据えていた。

「ふふ、こんなこと言っても油断はしないんだね。現状だと僕が不利だね」

　そう言うフィアだが、全く不利だと思っていない様子だった。

「だからね、少し、君に僕の本気を見せてあげようと思うんだ」

　フィアの存在感が変わったようにラカルは感じた。特にフィアの体はラカルのように発光するわけではないが、感じられる存在感が先ほどまでの倍以上だ。これはラカルの錯覚ではなかった。

「……何かしたのか？」

「リミッターを外しただけだよ」

　フィアは不気味に微笑む。その微笑みにラカルは目を逸らすことができない。その理由は恐怖からくるものだ。

「ああ゛ぁぁぁ」

　ラカルは自らの恐怖心を消すために叫んだ。

「僕を前にして恐怖を感じるのは自然の摂理だよ。恥じることはない」

　いつの間にか、フィアはラカルの目の前まで移動していた。

　ラカルのお腹に手を添える。

「崩壊の時だよ」

　フィアがそういうとラカルは血を吐き、そのまま前に倒れ込んだ。

　フィアは満足そうな笑みを浮かべていた。

「こんなに力を出したのは久しぶりだったよ」

　ラカルは動かない。

「さっきまでむかついていたはずなんだけどね」

　ラカルは倒れ込んでいる。

「僕を楽しくさせてもらった礼だよ。君は生かしてあげる。誇っていいよ。僕と戦って生き残ったものは少ないからね」

　フィアは嬉しそうに倒れたラカルを見ていた。そして、満足したかのようにその場から空を飛んで離れていった。

　フィアが立ち去った後、しばらくして静寂を破るように誰かがラカルの元に近づいてきた。その人影はラカルの部下、レルトだった。

「ラカル隊長！！」

　レルトは叫び、倒れているラカルに慌てて駆け寄った。彼の手は震え、胸の鼓動が耳元で響く。ラカルを抱き上げると、微かな呼吸音が聞こえ、レルトは安堵の息を吐いた。ラカルの温もりが生きている証だった。

　ラカルをおんぶして抱え上げたレルトは、その戦いの痕跡を見渡した。

　目に飛び込んできたのは、まるで巨大な球体がそこにあったかのように抉れた地面。

「どういう戦い方をしたらこんなことが起きるんだ……」

　不気味な感情が胸を締める。レルトは冷たい汗が背筋を伝うのを感じ、急いでその場を立ち去った。

　一方、フィアはラカルとの戦いに勝利し、村にいるナタの元へ戻ってきた。フィアの表情は穏やかで、冷たい風が彼女の髪を優しく揺らす。

　ナタはフィアに恐る恐る尋ねる。

「先生、誰かを殺したのですか？」

「いや、殺してないよ。まぁ、本当は殺すつもりで行ったんだけどね」

　フィアはナタが抱えているシバに手を伸ばし、頭を撫でる。

「ごめんね。敵は討たなかったよ。僕は満足しちゃったからね」

「……そんなことは気にしませんよ。それに言ったでしょ。敵を討つことはシバは望んでいません。そして私もまたそれを望んではいません」

「そう。ならよかったよ」

　フィアはそういい立ち上がる。

「君はこれからどうするの？」

　ナタは少し考え答える。

「先生についていきたいのですが、ダメでしょうか？」

　ナタはフィアの顔色を窺う。

　フィアはそんなナタの様子を面白く思う。

「うん、いいよ。君がついてきたいと言うのなら僕は別に止めはしないよ」

　ナタは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます！」

　そして、ナタはシバを抱き抱えて立ち上がる。

「シバも連れて行くの？」

「シバはこの町とは違う場所で埋葬しようと思います。殺された町で埋葬されるのは、多分、あまり嬉しいことではないと思いますから」

「そう、わかった。君の好きにするといいよ」

　フィアはナタの前を歩き出す。しかし、何かを思いついたようにすぐに立ち止まった。

「そうだ。君に一つ頼みたいことがあるんだ」

「私に頼みたいことですか？」

　フィアは口角をあげ、悪そうな笑みを浮かべる。その表情を見たナタは少し苦笑いを浮かべた。

「何、簡単なことだよ。君に刺客になってもらいたいんだ」

第4章　冒険の醍醐味といえばトーナメント大会だ

　フィアと対峙してから一ヶ月が経過しようとしていた。

　ヨルとフレッドは、王都エルセリオンの近くまでやってきていた。

　先ほどから、道端ですれ違うのは戦士や魔法使いのような人物たちだ。彼らの甲冑の金属音や魔法杖の鈍い光が、ヨルの感覚を鋭く刺激する。その理由は、王都エルセリオンで大きな大会が開かれるからだ。大会を控え、街道は活気に溢れている。

　ヨルたちもその大会を目当てに王都エルセリオンにやってきた。

　道すがら、腕試しをしている戦士達の剣のぶつかる音や、魔法の爆発音が響き渡る。その様子を見てヨルは少しだけ不安になる。

　ドラゴン相手には慣れているが、人間相手にちゃんと手加減できるのかという疑念が頭をよぎる。ヨルは自分が負けるとはあまり考えていないようだ。

　王都エルセリオンの大会に出てくるような自信家なら、多少手加減できなくても問題ないだろうと心の中でつぶやく。前に戦った黒の魔術団もかなり強かった。それを踏まえた上で、半龍化しないのならば何も問題ないだろうと自分に言い聞かせた。

　ヨルは隣にいるフレッドを見る。フレッドは特に表情を変えずに、淡々と歩いている。周囲の喧騒や騎士達の鋭い視線にも動じないその姿に、ヨルは感心した。

「どうしたんだ？」

　フレッドはヨルの視線に気づいて問いかける。

「ポーカーフェイスが得意だなと思って」

「王都に来る人に萎縮したのか？」

「そう言うわけではないが、大会のこととか気にしたりしないのか？」

「ふむ、ないとは思うが、ビビったのか？」

「別にビビってはない。ただ、黒の魔術団くらい強い奴らがいたら少し面白そうだなとは思う」

　ヨルは遠くの城壁を見つめる。

「あれの悪名は私も聞いたことはあったからな。しかし、それほどに強いやつはなかなかいないんじゃないか？」

「いや、どうだろうな。少なくとも前回優勝者は黒の魔術団よりは強いと思うしな」

「１週間くらい前に言っていた剣聖というやつか。確かそいつはお前の能力について知ってるんだったな」

「ああ、やつとは全力で戦ったからな。けど、まぁ大丈夫だろう。やつは前回優勝者だ。今回も出るなんてことはないだろう」

「そういうものなのか？」

　フレッドは首を傾げる。

「ああ、一度優勝した大会で次に同じ大会に出ても、優勝するのは目に見えているだろう？そんなのつまらないだろ」

　ヨルは自信ありげだ。その様子に説得力があったのか、フレッドも少しだけ納得したように頷いた。

　二人はそのまま王都エルセリオンへと足を進めた。遠くから聞こえる歓声や、屋台の香ばしい匂いが風に乗って彼らの元に届く。

　そして、フレッドとヨルは王都エルセリオンの受付会場までスムーズにやってきた。行列に並んでいた二人は、ふと後ろから声をかけられた。

「おうヨルじゃないか！」

　聞き覚えのある声に振り向くと、剣聖のライトが近づいてきた。フレッドがジト目で睨んでいるのを感じつつ、ヨルはライトに応じた。

「ああ、ライトか」

　ヨルが名前を呼ぶと、周囲の人々がざわつきだし、注目を浴びる。目立つことが苦手なヨルは視線を避けるように少し下を向いた。

「相変わらず目立つのが嫌みたいだな」

　ライトは笑う。

「わかってるなら話かけてくるなよな」

　ヨルは小さく呟いたが、隣にいるフレッドには聞こえていたのか、控えめに笑っていた。

「しかし、お前がいるのなら今回の大会は楽しめそうだ」

　ライトの後ろには二人の人物が付き従っていた。ヨルはその二人に目を向けた。

「ああ、後ろの二人が気になるのか？」

　ライトは後ろを振り返る。

　一人は耳が逆立っており、緑色の髪をしたエルフの女性。エメラルドのような瞳がヨルを睨んでいた。

「師匠、この人は誰？」

　エルフの女性がライトに尋ねる。

「そんなに、敵意剥き出しで相手を睨みつけるのは良くないだろう」

　もう一人の若い男性がフードを外しながら言った。こちらは普通の青年のようだ。

「すいません。うちのエルフが失礼なことをしてしまって」

　頭を下げる青年に、エルフはさらに怒った様子を見せる。

「なんで、謝ってんのよ。これから戦うかもしれない相手に敵意を向けるのは別に悪いことじゃないんじゃない？」

　エルフが反論すると、青年はため息をついた。

「まだ戦いは始まってないからダメなんだよ」

「よくわかんない！」

「はーい、そこまでだ」

　二人のいい争いが激しくなろうとしたところで、ライトが二人の首元を掴んで止めた。

「紹介しておくよ。このエルフが、サミ。で、こっちの男がカサゴだ。どっちも俺の弟子だ」

　ライトは快活に笑った。

「前会った時は、弟子はいなかったよな。確か3年くらい前だっけ？」

「そうだな、いなかったぜ。2年前くらいから、カサゴを弟子にとって、1年くらい前にサミを弟子にとったんだ」

　ヨルはカサゴとサミに関心を向けた視線を送った。

「正直、お前が弟子を取るとは思わなかったよ」

　乾いた笑みをライトは浮かべる。

「ま、俺も心境の変化があったんだよ。そういうお前こそ、仲間を引き連れているじゃないか？」

　ライトは実力を値踏みするかのようにフレッドを観察する。フレッドは特に表情を変えずに、ライトの視線を受け止める。その目には静かな闘志が宿っているようだった。

「なるほどな。お前が仲間を引き連れているんだ。弱いわけがないよな。このお嬢さん、かなり強そうだ」

　どこか嬉しそうにライトは微笑んだ。

「ところで、話はこの大会のことになるんだけど、前回優勝したのにライトは出場するのか？」

　フレッドに出ないだろうなと言った手前、確認するように言葉を継いだ。

「ああー、最初は出ないつもりでいたんだがな、お前たちが出るなら出場しようと思っている」

　ライトは口角を上げニヤリと笑う。

「そうか」

　そのライトの表情を見て、納得するようにヨルは頷いた。

「じゃああれだな、この大会で3年前に引き分けた決着をつけれそうかもな」

「ああ、けど、無理かもしれないがな。お前の事情についてはちゃんと覚えている」

　ライトはヨルにだけ聞こえるように小さい声で呟く。

「お前、人前では全力を出さないんだろう？」

　ヨルはそのライトの言葉に黙って頷いた。

「ま、どちらにしてもお前との戦いは楽しみにしている」

　ライトは弟子達を連れて会場の奥へと歩いて行った。彼の背中からは確固たる自信と興奮が感じられ、周りの人々の視線が自然と引き寄せられていた。

「おい、あいつらこの長い列を並ばずに通り過ぎて行ったけど、あれってありなのか？」

　フレッドが不満そうにそう呟いた。

「まぁ、前回の優勝者だからな。こんな列には並ばずに通るのは簡単なんだろう」

「……それもそうか」

　フレッドは納得し、肩をすくめた。周囲の喧騒や人々のざわめきが再び耳に入り、彼らは列に並び続けた。

　ヨルとフレッドは、時間はかかったが無事に大会にエントリーすることができた。大会が始まるのは明日で、今は宿屋でのんびりとしていた。

「ところで、あの恐怖の悪魔、確か、フィアが言っていた刺客っていうのは受付、あるいはこの王都にいたのか？」

　ヨルはベッドに横になりながら、天井を見上げて尋ねた。フレッドは椅子に座り、本を読んでいた。

「うーん、そうだな。強いやつの気配はいくつかいたが、飛び抜けて強いやつは、あの剣聖くらいだったな」

　フレッドは本を読むのをやめずに答えた。

「なるほどね。じゃあ、力を隠すのが上手いってことかな」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

　ヨルはベッドに座りなおす。

「それってどういう意味だ？」

　フレッドはようやく本を閉じ、ヨルの方を見た。

「今日見た限りだと、悪魔の気配を感じれなかった。悪魔っていうのは、いくら気配を消していようともその痕跡は何かしら違和感という形で残るんだ。特に魔族にはその違和感を敏感に察知することができる」

「つまり、フレッドが違和感を感じなかったから、悪魔は来ていない可能性が高いってことか」

「まぁ、例外がいないといえば嘘になるから、どっちともいえないんだけどね」

「例外？」

「あの恐怖の悪魔、フィアだよ。やつは違和感という痕跡を全く残していなかった」

　フレッドの声には一抹の不安が感じられた。

　その時、コンコンとドアをノックする音がした。

「ヨルさん、フレッドさんいらっしゃいますか？あなた達宛にお手紙を受け取っております」

　宿の受付をしてもらった女性の声がドアの向こうから聞こえた。

　フレッドが椅子から立ち上がり、ドアを開ける。

「あ、いらっしゃいましたね。こちらお手紙になります」

「ああ、ありがとう」

「それでは、引き続きごゆっくりしてくださいね。何かございましたら、私どもにお知らせください」

　そう言って受付の女性は扉を閉め、部屋から離れていった。

　扉が閉まるとフレッドはヨルの方を向き、ヨルも静かに頷いた。

　フレッドは手紙をゆっくりと開ける。封を切る音が部屋の静けさに溶け込むように響いた。その手紙の内容は、ヨル達を嘲笑うかのようにすごく簡潔な文章だった。

“予定通り、刺客を大会に送り込んだよ。あ、送り込んだ刺客は一人だけだから、そこまで警戒しなくていいよ“

フィア

「何が警戒しなくていいよだ」

　フレッドは眉間に皺を寄せ、手紙を握りしめた。明らかに不満を顔に浮かべている。

「まぁ気持ちはわかるが、そこまで深刻にならなくてもいいだろ」

　ヨルは気の抜けた声で言いながら、再びベッドに横たわった。

　その言葉にため息をつき、フレッドは何か反論しようとしたが、ヨルの顔を見てその気持ちは失せた。

　ヨルは不敵に笑っていた。どこかこの状況を楽しんでいるようだった。

　そして次の日の朝がやってきた。

「今日行われるのは確か予選だったな」

　フレッドが、窓から差し込む朝日の中でストレッチしながらヨルに聞いた。

「ああ、今日の予選で勝ち抜いたものが本線決勝トーナメントに参加できる」

　ヨルは目をこすりながらベッドから起き上がった。

「組み合わせはどういう感じなのだろうな」

「それは会場に行ってみないと俺にはわからないな」

「それもそうだな」

　二人は戦う準備を済ませ、会場へと向かった。

　会場には、昨日と同じように大会に出るような筋骨隆々とした腕自慢の戦士達が何人もいた。

「それでは、みなさん、予選の組み合わせが決まりました」

　関係者以外立ち入り禁止のドアから、大会運営者と思われる人物達が現れた。そして、移動用の大きな道具に予選の組み合わせが書かれた紙を貼り付けたものを動かしている。大会参加者達は、その内容が見やすいようにゾロゾロと移動する。ざわざわとした人の波が、熱気とともに押し寄せてくる。

「私たちも確認しに行こうか」

　フレッドはヨルの方を向き、落ち着いた様子でそう言った。ヨルもこくりと頷き、張り出されている予選の紙のところに向かった。

　紙に記載されているのは、7つのグループに分けられた予選表だ。戦士達の視線が紙に集中している。

「なぜ、7つにしか分けられていないんだ？確か、8人が本戦トーナメントに出場できるんじゃなかったのか？」

　フレッドは不思議そうに首を傾げる。

「おいおい、何言ってんだ？」

　後ろからバカにするような声が聞こえた。ヨルとフレッドは、その声がした方を振り向く。

「前回優勝者だぜ。あって然るべき特権だろ？」

「ふーん、そういうものなのか？」

　フレッドは興味なさそうにヨルに聞いた。

「まぁ、そういうものなんだろうな。ちょっと気に入らないのはわかるけど」

「はっ、なんだ？あんたら、剣聖に勝つ気か？身の程知らずもいいとこだな」

「なんだお前、まだいたのか？」

　鬱陶しそうにフレッドが呟いた。

「おいおいおいおい、俺にそんな態度をとっていいと思ってんの？」

「知ったことか」

　敵意剥き出しで、フレッドがそう言い放った。そんなフレッドを宥めるように、ヨルは両手を向けて落ち着かせようとする。しかし、口で苛立たしげなことを言っているだけで、目にはあまりこれと言った感情がなかったことに気づいたため、ヨルは宥めようとするのをやめた。

　そのヨルの行為が、自分への警戒のためだと思い、その喋りかけてきた男は気分が良くなる。

「ふ、無知とはかくも勇敢になるものだな。いや、蛮勇と呼ぶべきか」

「どうでもいいけど、あんた誰？」

「女性の頼みなら、答えないわけにはいかないな。私は前回、ベスト8だったモーメントだ」

「モーメント？」

「君は私のことを知っているのかね？」

　モーメントは、ヨルの方を見る。

「いや、全然知らない」

　ヨルがそう答えると、明らかに不機嫌な顔をモーメントは浮かべた。

「ただ、その名前なら、俺たちと同じ枠にいたな」

　ヨルがそういうと、モーメントの不機嫌な顔は消え、笑みを浮かべる。

「そうか、私の名前が同じ枠にいたのか。それは残念だったな」

「何が残念なんだ？」

　心底不思議がるようにフレッドが聞いた。

「決まっているだろう。君たちは、予選で敗退するのさ。震えて待っているがいい」

　モーメントはそういうと、ヨルたちから遠ざかる。モーメントのマントが風で煽られ靡いた。

「で、結局あいつはなんだったんだ？」

「さぁ」

　ヨルもよくわからなかったので、首を振った。

　モーメントという邪魔が入ったため、詳しく予選表を見れていなかったので、改めて予選表に目を通した。

　ヨル達のいる枠は、5番ブロックであり、始まるのはお昼以降だった。

「随分と時間には余裕があるみたいだな。とりあえず、フィアがいう刺客が誰なのか見定めるためにも他の奴らの予選を見にいくとするか」

　フレッドが周囲の騒がしい音に耳を澄ませながらも、今後の方針を告げた。

「了解」

　ヨルは短く頷き、前を歩くフレッドについていくように歩いた。

　予選の順番が着々と進んでいき、ついにヨル達の順番が回ってきた。

「予選を突破した奴らはそれなりの強さだったが、私たちの刺客になるとは思えないな。ヨルはどう思った？」

　フレッドは鋭い目つきで闘技場を見渡しながら尋ねた。

「そうだな。俺もフレッドの意見と同じだ」

　ふむ、と声を漏らしフレッドは腕を組む。

「つまり、刺客は私たちの後か、それとも私たちと同じブロックにいるのか。そんなところか」

「あるいは、手を抜いていることをバレずに、予選を勝ちあがったかだな」

　ヨルがそういうと、フレッドは少しだけ驚いたように目を見開いていた。

「なるほど、その可能性もあったのか」

“5番ブロックに出場する参加者達は、闘技場にお集まりください”

　魔法で拡張された声が、建物全体に響き渡る。その声に、場内のざわめきが一層高まる。

　それを聞いたヨルとフレッドは、闘技場に向けて歩き出した。

　闘技場に入ると、観客の熱気と歓声が一気に押し寄せ、耳元で炸裂するようだった。周囲の戦士たちの鋭い視線が、皮膚を刺すように感じられる。

　闘技場には、それぞれチームごとに一定の間隔で離れた位置に立つようになっている。ヨルとフレッドが位置についたところで、話しかけてくる人物がいた。

「やぁ、君たちも運がないね」

　意気揚々とモーメントが話しかけてきた。闘技場の風が吹き、彼のマントがゆらゆらと靡く。自らの登場の演出を考えたかのような行いに、ヨルは内心で舌打ちをする。

「貴様もしつこいな」

　フレッドはモーメントの声を聞くなり、嫌そうな顔を浮かべる。

「一応忠告しておこうと思ってね。こと試合になったら、私は手加減ができない。だから、君たちは試合を棄権した方がいいよ」

　モーメントは爽やかな笑顔でそう言った。

　ヨル達の周りにいる参加者にも聞こえていたのか、全員がモーメントを睨んでいた。睨まれていることに気づいているのか気づいていないのか、モーメントは余裕の笑みを浮かべている。

「ああ、もちろん君たちにも同じことを言っているんだ。どうせ、このブロックは私が勝ちぬく。私は無駄な戦いが嫌いなんだ」

　モーメントは、闘技場にいる全員に対し、宣戦布告する。

「ふざけんな、てめー、去年の大会ではたかが、8位だろ？！」

　誰かがそう言った。その一言に、モーメントは眉をぴくりと動かし、笑顔が引き攣る。

「今の言葉、誰が言ったんだい？」

「そうだ、そうだ、調子乗ってんじゃねーぞ」

　そんな声がちらほらと聞こえてきており、モーメントの言葉はかき消された。ヨル以外、誰も気にしていなかったが、最初に声を発したのはフレッドだ。大声を出したおかげか、フレッドは少しだけスッキリした表情を浮かべていた。

　なぜ、フレッドが大声を上げた本人だと誰にも気づかれなかったのは、高速で移動して別の場所で発したからだ。

「おい、ヨルちょっといいか？」

　元の場所に戻って来るなり、フレッドはヨルの袖を引っ張る。ヨルが振り向こうとすると、小声で「ストップ」と言った。そして、ヨルの耳元に顔を近づけた。

「この闘技場にいるやつらの実力は大体わかった。この予選とっとと終わらせるぞ」

「了解、俺はどうすればいい？」

「なーに、開始と同時に上に飛んでくれればいい」

　ヨルがフレッドの顔を見ると、不適な笑みを浮かべていた。また同じく、フレッドの狙いがわかったヨルも不適な笑顔を浮かべる。そして、そのことに周りの闘技者達は気づかない。今もモーメントに敵意を向けている。

「モーメントというやつも存外使えるな」

　褒めているのかバカにしているのかわからない顔つきでフレッドが言う。

「ははは、かもな」

　ヨルは少しだけ苦笑いを浮かべて頷いた。

“さて、それでは闘技場にいる皆さん、そして観客にいる皆様。そろそろ試合を開始します。選手達は、それぞれ所定の位置についてください”

　魔法を使っているのか大きな声で、そして会場全体にその声が響き渡る。闘技場にいる選手は全員黙り込む。モーメントも例外ではない。全員、開始の合図がなる前に、集中している。

　そして、それはフレッドも同じだ。しかし、他の闘技者達とは少しだけ違う理由だ。

“さて、闘技場にいる選手の皆さん、準備は整いました。これまでの日頃の成果を存分に発揮してください。それでは、予選第五ブロックの開始をここに宣言します！バトル開始！”

　その声と共に「おおー」と会場の観客たちが、叫び、拍手している音が響き渡る。それと同時に、ヨルは真上にジャンプした。

「銀幕の世界（モンデ・デュ・グランド・エクラン）」

　ヨルが飛んだと同時にフレッドは得意な氷魔法を闘技場全体に放った。闘技場にいる選手達は一瞬で氷つき、動けなくなっている。観客達の歓声も、驚きの表情と共に消えうせた。

「あ、え？！」

　会場全体に流れている実況の声も、あまりの出来事にうまく声を発することができていない。上空から、風を切るようにヨルが降りてくる。

「上から見た氷というのは、想像以上に綺麗なものなんだな」

　フレッドが放った氷の結晶が、太陽の光を受けてキラキラと輝いている。その美しさにヨルは思わず声を漏らした。

　無事に闘技場に着地する。ヨルの着地した音が合図となり、再び実況の声が響く。

“これは、なんということでしょう。ほんの一瞬です。ほんの一瞬で予選の勝負がついてしまいました。彼女は一体何者なんだ？！”

「おおー！」

　実況の声と同時に、観客達も歓声を上げる。闘技場全体は大盛り上がりだ。

「なんか、思ったよりも目立ってしまったな」

「まぁ、こんな氷魔法を使ったら、そりゃ目立つだろうな」

「ふむ、そういうものなのか？」

「ああ、そういうものだ」

　ヨルは目立つのは苦手だが、今回目立っているのはフレッドの方だ。だから、自分が置かれている状況に対し、そこまで気にしていなかった。

“お仲間の男も一体誰なんだ？”

「誰なんだ？」

　実況の声と同時にまたも、観客達全員が一斉に声を発した。なんでそうなる？とヨルは心の中で思った。

　その時、カーンと鐘の音がなる。決着の合図だ。

“今大会、いえ、これまでの大会含め、最速の決着です！闘技場の皆さん、歴史的瞬間を目に焼き付けましたか？”

「おおー！」

　闘技場全体は、なおも大盛り上がりだ。見られている感覚に落ち着かないヨルは、そそくさと闘技場の出口に向かった。フレッドは、そのヨルの様子にやれやれと言った表情を浮かべていた。

“さて皆さん、歴史的瞬間を作ってくれた二人に、拍手でお見送りをしましょう”

「おおー！」

　パチパチと拍手の音が、闘技場全体に響き渡る。

「おーい！決着はついたって認識でよかったよな」

　フレッドは闘技場全体に響き渡る音に負けないように、大声でそう言った。

“あ、はい。この予選第5ブロックはあなた達パーティの勝利です”

「そうか」

　フレッドは手を前にかざし、指先に魔力を込め、優雅な動きで空中に氷の紋様を描き始めた。

「氷よ戻れ（リターナー）」

　フレッドが紋様に手を添え、呪文を唱えたその瞬間、闘技場の氷がみるみる消えていく。

　氷漬けされていた選手達は、あまりの寒さに体を震わせていた。

「よし、これで問題ないな」

　魔法を解除したフレッドは満足したようにうなずいた。会場全体は、フレッドのその行動に声を発することができずに驚いていた。

　フレッドはそんな会場の様子に気づいていたが、知ったことかと言わんばかりの様子で、選手控え室に向かってゆっくりと歩き出す。

　ヨル達が選手控え室に戻ると、ざわざわとした喋り声が耳に入ってきた。

　選手達がこちらを見ていることに、ヨルは気づく。

　こっちでも似たようなものか。落ち着かないな。

　視線はフレッドに集まっていたが、ヨルの方を見る者も少なからずいた。

「お疲れさん」

　選手控え室の入り口から大きな声が響いた。聞き慣れない声だが、誰の声かすぐにわかった。前大会の優勝者である剣聖ライトだった。ライトは特に気にした様子もなく、まっすぐにヨルたちの前に進み出た。

「別に疲れてはいない」

　そのヨルの言葉に、ライトは嬉しそうに笑った。

「そうだな。やはり、お前の相方はなかなかに強いようだ」

　ヨルとライトが話し始めると、選手控え室のざわめきは一層大きくなる。まるで、蜂の巣を突いたような騒がしさだ。

「ここじゃ、少し目立ちすぎてしまうから、別の場所に移動するか」

「ああ、そうしてくれると嬉しい。フレッドもそれでいいか？」

「構わない」

「じゃ、決まりだな。俺についてきてくれ」

　ライトはそう言って歩き出した。選手控え室の入口から出る前に、一度振り向いた。

「すまんな、選手達よ。集中する時間を奪ってしまって。お前達の誰かと戦うのも楽しみにしている」

　その言葉を残して、選手控え室を出て行った。

　選手控え室からは、先ほどのざわめきよりもさらに大きな声で盛り上がっていた。

　ヨル達は闘技場の専用個室に到着した。個室とは名ばかりで、部屋は広く、高級な家具が並んでいる。ライトに用意されたこの場所は、闘技場全体を一望できる特等席だった。部屋の奥には、ライトの弟子であるサミとカサゴがすでにふかふかのソファに座っていた。

「あんた達、結構強いじゃない」

　部屋に入るなり、サミが興味津々に言った。

「いや、すごいのはあれだけの魔法を一瞬で放った、フレッドという人だと思うけど」

　カサゴが間髪入れずに返す。

「は？！あんたなに見てたわけ？！ヨルはあの一瞬であの高さまで、飛んでいたのよ」

　サミとカサゴが口論を始め、その様子をライトは笑顔で見ていた。

「おいおい、止めなくていいのかよ」

　ヨルが少し心配した様子で聞いた。

「まぁ、いつものことだからな。しかし、今はお前達と喋りたいしこのへんで止めておくか」

　ライトが手を叩くと、先ほどまで言い争っていた二人は途端に静かになった。

「ずいぶんと手の込んだしつけをしているみたいだな」

　フレッドが感心したように言った。

「まぁ、しつけってわけではないが、この二人はよく喧嘩するからな」

「……で、俺たちに話ってなんなんだ？」

　本題に入る空気を感じて、ヨルが尋ねた。

「ああ、そうだな。今行われいる予選を見ながら話そうか」

　ライトはそう言い、カサゴにお茶を淹れるよう頼んだ。カサゴは立ち上がり、高級なカップを取り出し、お茶を淹れる。

　カサゴの所作が丁寧で、フレッドは感心した様子で観察していた。慣れた動作でヨルとフレッドの前にお茶を置くと、カサゴは元の座席に腰掛けた。

　ヨルはそういったことには関心が湧かないためか、気になったことを単刀直入にライトに聞く。

「なんだ？今行われている予選にはお前の知り合いでもいるのか？」

「ふ、鋭いな。そんなところだ」

　ライトが肯定すると、ヨルは闘技場で行われている予選に集中して目を向けた。

　闘技場全体に砂埃が舞い、戦闘の激しさを物語っている。その中でひときわ目立つ一人の人物がいた。まるで風のように縦横無尽に動き回るその姿に、ヨルは確信を持ってライトに尋ねた。

「今、一番闘技場で動いているやつ、それがお前の知り合いか？」

　ライトはニヤリと笑みを浮かべる。

「ああ、その通りだ」

「で、彼がどうしたんだ？知り合いだからといって、これは試合なんだ。特に意味のないことだろう」

　フレッドが落ち着いた様子で尋ねた。

「そうだな。その考えは間違っていない。けど、この予選はおそらくあいつ、センが勝つだろうな」

　ライトの見立てにフレッドも頷いた。

「ふむ、そんな感じはするな」

「君の目から見てもそんな感じがするんだな。確か、フレッドだったか」

　フレッドは短くこくりと頷く。

「ところで、さっきのフレッドと同じ疑問なんだが、センが勝ったところで何があるというんだ？」

　ヨルもライトの話の本筋がまだ見えていない。ライトは口角を上げて控えめに笑った。

「二人はどうやら、この大会についてのルールはあまり読んでいないらしいな」

　ライトの言葉に、ヨルとフレッドはお互いの顔を見合わせた。

「どういうことだ？」

　二人同時にライトに対し質問した。

「君たちは、5番ブロックだっただろう？そして、今行われているのは6番ブロックだ。予選を勝ち上がると、1番と2番ブロックの勝者が当たることになっている。つまり、5番ブロックの勝利者と6番ブロックの勝利者が対戦することになっている」

　そう得意げに答えたのはカサゴだ。ヨルとフレッドは抽選を行うものだと思っていたため、内心少し驚いていたが、表情には出さなかった。

「まぁ、そういうことだ。だから、センがお前達の対戦相手になるだろう」

「確かにあのセンというやつが勝ち上がるとは思うが、勝負は最後までどうなるかはわからないぞ」

　フレッドは闘技場の戦いを見ながらそう答えた。フレッドの目つきは真剣だ。その様子は戦いの厳しさというものをよく知っている歴戦の猛者をも思わせる風格があった。

　ライトと弟子たちは一瞬驚いたが、納得するように頷いた。

「それもそうだな」

　数十分が経過し、剣聖ライトの予想通り、センという人物が勝ち上がった。

「あのセンという人物が、私たちの次の対戦相手ということか」

　フレッドは丁寧にお茶を机に置きながら言った。

「ヨルよ、お前は今のセンの戦いを見てどう思った？」

　ライトは興味深げな視線をヨルに送った。

　ヨルは先ほどまでの予選の戦いについて思考を巡らせた。

　あの縦横無尽な動きは予選のような集団戦だと厄介だろうな。ただ、1VS1の戦いではそこまで厄介ではない。動きが速いだけだ。しかし、あれだけ激しく動き回ったというのに、そこまで疲れている様子は見えない。余力はまだまだ残していると言えるだろう。技も全部出し切ったとは思えない。これまで見てきた予選の人物の中で、一番強いやつだな。

　ヨルはそのように自分の考えをまとめた。

「これまでの予選の人物の中で一番強いんじゃないか？」

　そのヨルの評価に嬉しそうにライトは笑みを浮かべた。

「中には実力を隠している人物もいるとは思うが、私もヨルと似たような意見だな」

　ヨルの言葉に同調するようにフレッドも頷いた。

「なるほどな。お前達の意見に俺も賛成だ。そこで、お前達にはお願いがある」

　ライトは佇まいを正し、真面目な表情を浮かべた。

「あいつに、センに試合で勝ってほしい」

　ヨルとフレッドは互いに顔を見合わせ頷き合った。

「言われるまでもないな。私たちは勝つためにここにいる」

「右に同じだ」

　ふーと息を吹き、ライトは優しい微笑みを浮かべる。

「そう言ってくれると嬉しいものだな」

「……しかし、それじゃ別にお願いとはいえないんじゃないか？」

　不思議そうにヨルが聞いた。

「ああ、勝ってもらうのは絶対条件なんだが、もう一つ条件があるんだ。それは、お前達のうちどちらか一人だけで戦って勝ってほしいというものだ」

「……なぜ、その条件が必要なんだ？」

　フレッドは首を傾げる。ライトは息を吸い、目を閉じて、自分の考えをまとめるようにしてから答えた。

「それは、センが俺以外に実力が上のやつを知らないからだ。あいつは慢心している。この世界は広い。なのにあいつはそのことを自覚していない。そのことが俺にとっては歯がゆいんだ」

　そのライトの言葉はヨルの心に届いた。ヨル自身もかつては同じような考えを持っていたからだ。

「世界の広さを知ってほしいか」

「ああ、お願いしてもいいか？」

　ライトの問いかけに対し、ヨルはフレッドの顔を見る。フレッドは肩をすくめる。

「私はこのパーティのリーダーだからな。で、私の判断としては、お前の好きにしていいぞ」

「サンキュー、リーダー。あんたなら、そういうと思ったよ。てことでライト、その頼み俺が引き受けよう」

　ヨルは、ギラついた目つきで了承した。その一言にライトはホッと息を吐いた。

「お前なら引き受けてくれると思ったぜ。……しかし、少しだけ驚いたな。てっきりこのパーティのリーダーはお前だと思っていたからな」

　フレッドは、なぜ私じゃないと思ったと言わんばかりの不服な表情を浮かべていた。そのフレッドの表情にヨルは内心で笑っていた。

「それに関しては、俺はどちらかというとリーダー向きじゃない。逆にフレッドは、リーダー気質がある。まぁ、そういった理由を諸々含めてフレッドがうちのパーティのリーダーさ」

　ヨルがそういうと、フレッドはふふんと満足そうな表情を浮かべていた。フレッドの表情がコロコロ変化するのを見て、面白いな、とライトは思った。

「前に会った時は、お前はソロだったな。リーダーが苦手だというのも、人前が恥ずかしいというところから納得だな。まぁ、とにかく今回の依頼を引き受けてくれてありがとう」

　ライトはそう言って右手を握手するように差し出した。

「なーに、気にするな。一つ貸しということにしておくよ」

　悪戯めいた表情を浮かべヨルが言い、ライトの差し出した右腕に握手する。

「そうだな。一つ貸しだ」

　それに同調するようにフレッドも悪い笑みを浮かべていた。

「ああ、わかっているよ」

　やれやれと首を振りながらもライトは笑みを浮かべる。

　その笑みを合図にがたっと高級なソファが後ろに下がる。ライトの弟子であるサミが突然立ち上がったからだ。必然、全員の視線はサミの方に向く。

「お待ちください、師匠。話がまとまったところで申し訳ありませんが、このようなやつに、本当に頼まなくてはならないのですか？」

　これまでの話の内容が不服だと言わんばかりに、サミが言った。

「同感ですね」

　カサゴもサミに同調するように頷いている。

「それに戦うとしたら、このフレッドという女性の方ではないのですか？確かに、ヨルさんのあの跳躍力は凄かったですが、それだけでは、どれくらい強いのかは推し量れません。あの跳躍なら私にだってできます」

　ヨルに対抗心を燃やすようにサミは自身の意見を述べる。

「それじゃ、サミは、どうやったら納得するんだ？」

　ライトは、サミの意見を正面から受け止めるように問いかける。そのライトの表情には真剣さが帯びており、自らの覇気で威圧するようにサミを見据えている。しかし、その真剣な表情、そして威圧するような圧力に対しても、弟子であるサミは怯まない。

「私がこれから彼と実際に戦って、その実力を試してみてもよろしいでしょうか？」

　ふむと頷くとライトはヨルの方を向く。

「と俺の弟子が言っているが、ヨルはどうしたい？俺の弟子と戦いたいか？」

　そのライトの質問にヨルは心底嫌そうな表情を浮かべていた。その表情が面白かったのか、ライトはぷっと少しだけ声にして笑った。同じく、ヨルのその表情を見たフレッドも控えめに笑っていた。

「ああ、わかっている、ヨル、聞いてみただけだ。少なくとも今のサミとは戦おうとは思わないんだろう？」

　その言葉を聞いたサミは顔を赤くし、怒りを滲ませた。

「私の実力が足りないと、あなたはそう言っているのですか？」

　きっ、と睨みつけるようなサミに対し、ヨルは肩をすくめる。

「まぁ、わかりやすく言ったらそういうことになるな」

　ヨルの尊大な態度に対して、サミは拳を握りしめた。

「私の実力をその目で見たわけじゃないのに、随分傲慢なことを言ってくれるんですね」

　カサゴもサミに同調する。

「僕も同意見ですね」

　その場は一触即発の雰囲気に包まれたが、ヨルとフレッドはどこ吹く風の様子で落ち着いていた。

「いつもならお前達の納得できるようにしてもらうところなんだが、今回はダメだ。なぜなら俺がお願いをする立場だからな」

　今にも飛びかかりそうなサミとカサゴを見て、ライトが止めに入った。

「それにヨルの実力ならすぐにわかることになるさ。なんせ、こいつは俺が認めたライバルだからな」

　ライトの言葉に、サミとカサゴの敵対的な目つきは鳴りを潜めた。不満がありそうな顔を浮かべてはいるが。

「……ライバルか」

　ヨルがボソリと呟く。

「なんだ？俺にライバル認定されたのが不服か？」

「いや、そうじゃない。剣聖にそう思われているのは光栄なことだ。それにあの時の戦いでそこまでの評価をされているとは思わなかった」

　ライトはヨルとの戦いを懐かしむかのように目を細める。

「確かに、あの時は決着をつけられずに終わったからな。だが、あの戦いだけでお前という実力の底の知れなさがわかった」

「それはこっちのセリフだ。剣聖というのはどれほどなのか、試そうと思って挑んだら、試すような実力差でないことに、すごく驚いた。正直、世界を甘く見ていたよ。俺より強いやつは勇者以外にいないってな」

　ヨルも過去を思い出すかのように遠くを見る。

「なるほどな。つまり剣聖ライトは私の想像以上に強いということだな」

　フレッドはうんうんと納得した。

「サミ、俺の実力に疑問があるならセンとの戦いをしっかり見ててくれ。きっと、あんたの納得する結果を見せられると思う」

　自身の実力の高さを疑うことなく、真摯な瞳でヨルはサミを見た。

「そんな威勢よくしてもいいの？それで負けたら、かなり恥ずかしいよ」

　サミは口を尖らせたが、ヨルは気にせず立ち上がった。

「負けるのはあまり想像つかないな」

　ヨルはライトに向き直る。

「じゃ、俺がセンというやつに勝ったら、約束通り一つ貸しだからな」

「ああ、もちろん」

　ライトの声は、ヨル達が個室を後にするドアの閉じる音と同時だった。

「なぁ、ヨル、あの部屋で次の試合も見た方が良かったんじゃないか？」

　部屋を出て、しばらくしてからフレッドが疑問を述べる。ヨルは振り返らず、肩越しに答えた。

「あいつは異常に勘が鋭かったからな。あまり、俺たちが目的あってこの大会に出ていることを知られたくない」

　ヨルの言葉には深い真剣さが漂っていた。

「その言い方だと刺客というのは次の試合に出てくるということなのか？」

「ああ、俺の勘がそう言っている」

「わかった。じゃあ、そうだな、最初と同じように観客席で見てみるとしようか」

　そして、ヨルとフレッドは、最後に行われる試合を観戦する。

　最後の試合を観終わり、ヨルとフレッドは宿に戻ってきた。

「最後の試合、ヨルはどう思った？」

「そうだな、見た限りだと強いやつがいるとは思わなかった。本当にあの中にいるのか疑わしい。が、俺の勘では最後の予選の試合にいたと言っている」

「試合を観戦する前から言っていたな」

「俺の勘はよく当たるからな。だから、俺は自分の勘を信じるようにしている」

「……つまり、ヨルはあの以下にもどこにでもいそうな戦士の格好をして勝ち上がったやつが、フィアの刺客と思っているわけだな」

　ヨルは眉を顰め、ため息をついた。

「そうなんだよな。想像以上に、あの戦士は普通だ。名前はナタだったな。フレッドは何か感じ取ったか？」

　フレッドは首を振る。

「いや、私もわからなかったな。けど、あれが刺客だったとしても剣聖には勝てないと思うぞ」

「だよな。というよりも今回の大会で、剣聖よりも強いやつは出場していないと思う。少なくとも試合を見た限りではな」

「ああ、私も同意見だ」

　部屋の中は静かになり、二人はそれぞれ今日の大会の内容を頭の中で反芻していた。

　ヨルの勘では、ナタという人物がフィアの刺客だと言っている。フレッドは誰が刺客かは予想できていない。しかし、誰が刺客かは明日いやがおうでもわかることになる。そのことに気づいた二人はお互いに顔を見合わせる。

「誰が相手でも、結局私たちは勝てばいいだけの話だな」

　自信に満ちた声で、フレッドが言った。

「そうだな。その答えがシンプルで一番わかりやすいな」

　ヨルもフレッドの意見に賛同するように笑みを浮かべた。

「さて、明日勝つために今日は寝るとしよう」

　話はこれで終わりと告げるように、フレッドは宿のベッドに寝転んだ。

「ああ、おやすみ」

　ヨルは机の上に置いてある蝋燭の火を消して、ベッドに寝転がる。静かな夜が二人の部屋に広がり、外の風がかすかに窓を叩いていた。

　翌朝、ヨルとフレッドは戦闘の準備を整えていた。

　部屋のドアをコンコンとノックをする音が響く。ヨルとフレッドは互いに顔を見合わせ、フレッドがこくりと頷き、ドアを開ける。

　そこには、高級な鎧をまとった兵士が立っていた。鎧は光を反射し、兵士の威厳を一層際立たせている。

「お前は誰だ？」

　兵士は、フレッドの問いかけには答えず、部屋中を見渡し、机の上の手紙に目を留める。彼は早歩きでその手紙に向かい、真剣な表情で尋ねる。

「この手紙は誰からもらった？」

　フレッドはその真剣な様子を見て、嘘をつくのは得策ではないと判断し、素直に答える。

「悪魔だ」

　その瞬間、兵士はフレッドをまっすぐ見つめた。

「ほう、悪魔ね。白を切ればお前達を切り伏せるところだった」

「……へー、私たちに勝てる自信があるんだ」

　フレッドは挑発的な笑みを浮かべる。

「私を知らないとはな。とんだ無知もいたものだ」

　兵士は余裕を見せつつも警戒心を露にしている。

「フレッド、こいつは王国の近衛騎士だ」

　ヨルがそっと耳元でささやく。

「ほう、お前は私のことを知っているのか？」

　近衛騎士はヨルの言葉を聞き取り、問い返す。ヨルは警戒を強める。

「まぁな。ただ、あんたのことは知らない。その鎧を知っているだけだ」

「……なるほどな」

　近衛騎士は自らの鎧を見下ろし、納得したように頷く。

「私の名前は、ラカルだ。別に覚えなくて結構だ」

　ラカルは再び手紙に目を向け、それを開く。内容は一行のみ。ラカルは眉を顰め、剣呑な雰囲気を漂わせた。

「フィアという悪魔についてお前達は知っているのか？」

　ラカルはフレッドを鋭く睨みつける。フレッドはその視線に怯まずに答える。

「私にとって因縁のある相手だ。そういうお前はあの悪魔について知っているのか？」

　ラカルは苦い思いを呼び起こすように舌打ちをする。

「因縁があるかないかで言えば、あるな。つい最近のことだが、やつと戦った」

「……最近とはいつのことだ？よくあの悪魔と戦って生き延びたものだな」

　フレッドの表情は少しばかりの驚きが混じっている。

「確か、3週間くらい前の話だったな」

「……3週間前。私たちが奴と遭遇したのは、1ヶ月前の話だ」

「ほう、そこまで長くない因縁だな」

「……」

　フレッドはおし黙る。その理由をヨルは察していた。

「できればでいいんだが、あんたとフィアの戦いについて詳しいことを教えてくれないか？」

　ヨルの言葉に、ラカルは威圧するように睨む。

「それをお前達に教えて私に一体何のメリットがあるというんだ？」

　ヨルは冷静に答える。

「ああ、近衛騎士のようなやつにメリットを与えることなんて俺たちにはできない。だから、“できれば“でいいんだ」

「ふむ、まるでやつと遭遇できるというような口振りだな」

「遭遇ならできる。その手紙がそのことを証明しているだろう？」

　フレッドが覚悟を決めた声で言った。

「なるほど。大会にやつの刺客が紛れ込んでいるとはな。いいだろう。刺客の問題が解決したのなら教えてやろう」

　ラカルは手に持っている手紙を元の机の上に置く。

「それで、こちらは何を提供すればいい？貴様は情報に対するメリットが欲しいのだろう」

「刺客問題が解決すれば、特に何かを提供しなくてもいい。強いて言えば、あの剣聖が負けるところを見れれば面白いのだがな」

　ライトが負けた時の姿を思い浮かべ、ラカルは意地悪く笑みを浮かべる。

「なるほど、わかった。次の試合で勝てば、その次の試合で私たちは剣聖と勝負することができる」

　フレッドは自分たちが負ける姿を想像していないためか、軽い口調で答えた。

「あの悪魔と戦うといい、そして剣聖にはもう勝った気でいる。少々自分たちの実力を高く見過ぎなのではないか？早死にするぞ」

　ラカルはフレッドのあまりの自信の高さにため息を吐く。

「私は私の実力に関して高くも低くも見積もっていない。ただ妥当な判断をしているまでだ。そして、私の仲間であるヨルに対してもな」

　フレッドの目には力強い意志が感じられる。

「大した自信だな」

　ラカルが呟くと、剣を抜き、フレッドに向かって振りかぶった。その動作は一瞬の出来事だったが、フレッドは動じなかった。

　ヨルはその動きを見逃さず、素早くラカルの剣を両手で挟み込んで止めた。

「ほう、なかなかのスピードだな。そして技量も悪くない」

　感心したようにラカルは呟いた。

「お仲間のヨルという人物の動きは、それなりの実力のようだが、お前はどうだ？動けていないじゃないか」

　ラカルはフレッドを見下すように呟く。そんな呟きに対し、フレッドは勝ち誇った笑みを浮かべていた。その表情を不思議がるラカルだが、すぐにそのことに気がつく。

「冷て！」

　ヨルは両手で挟み込んでいた剣を離す。

　剣の刀身を見たラカルは驚きのあまり目を見開く。ラカルの剣の刃はいつの間にか凍りついていたのだ。

「いつ、反撃したんだ？」

「なに、お前が動いたのと同時に魔法を仕掛けておいた」

　なるほど、それはとんだ化け物だなと独り言のようにラカルは呟く。

「ちなみに、お前が私を斬らずに寸前で止めることもわかっていた。だから、お前を氷づけにしなかったんだ」

　フレッドは勝ち誇ったように右目でウィンクをする。

「そうか、そっか、ふふふ、面白いな、お前達」

　ラカルは口角を上げる。

「刺客を倒してから報酬として話すつもりだったが、気が変わった。私が持っている情報をお前達に話そう。さて、あの悪魔との戦いだったな」

　ラカルの真剣な表情に、部屋の空気は冷えたものになり、ヨルとフレッドは真剣に耳を傾けた。

「というように、最終的にやつの力になすすべもなく私は倒れたのさ。奴が私を殺さなかったのは、自分が楽しめたかららしい。悪魔というのはふざけた奴だ。あれとは２度とで遭遇したくはないものだ」

　ラカルは自ら体験してきたことをまとめ、わかりやすくヨルたちに伝えた。ラカルの話を聞き終えたフレッドは考えをまとめているのか、足元を見て黙り込んでいる。その様子を見たヨルは先に気になることを質問した。

「黒い影というのはなんだったんだ？」

「わからんが、奴は球体のようなドーム上の形を作り、敵を引き連れこんでいる。その球体の能力かなんかだろう」

「黒いドームってのは、真っ暗な部屋なんだろ？」

「ああ、ただ私の能力でその中を照らしていたから、真っ暗ではない」

　ヨルはそのことに対し、首を振り否定の意を表す。

「いや、俺が言いたいのはお前が能力で照らす前の黒い影についてだ。どこから出てきたんだ？」

　ヨルの意図が読めたのか、考え込んでいたフレッドもラカルの方を見る。

　ラカルはフィアとの戦いを思い出すかのように宿の天井を見つめる。

「そうだな、あの影は確か私の足元から出ていたように思える」

　ふむ、とフレッドは頷く。

「なるほど、つまりその黒い影は人の影から出現しているということをヨルは言いたいんだな？」

「ああ、そう推測はしているが、実際に見ないとわからないな」

「いや、その可能性は十分に高い。頭に入れておいても損はないだろう」

　フィアとの戦闘のことを思い出しているのか、ラカルもヨルの意見に賛成のようだ。

「ああ、そうだな。……情報をありがとう。お前の戦いは無駄にはしない」

　フレッドは真剣な表情で立ち上がり、ラカルに頭を下げる。

「ならまず、刺客とやらと対決する前に1回戦で負けるなよ」

　ラカルは立ち上がり、ヨルたちの宿の部屋から退出していった。

「まさか、あらぬ所からフィアについての情報を知ることになるとは思わなかったな」

　フレッドは情報を得られたことに満足して笑みを浮かべる。

「あとは、刺客に勝つためにもライトとの約束を果たさないとな」

「そうだな、で、一応聞いとくが勝てる自信はあるか？」

「全力を出せれば100%勝てる」

　フレッドは納得したように頷く。

「正直でよろしい。なら、私はお前が全力で戦える舞台を用意してやる」

　ヨルはその言葉の意味がよくわからなかったのか首を傾げる。

「それはどういう意味だ？」

「確かヨルは私の魔法をちゃんと外からは見ていなかったよな」

　ヨルはこれまでのことを思いかえす。少なくとも闘技場では上からフレッドの魔法を見ていたはずだ。

「いや、そんなことはないと思うが」

　ヨルの否定に対し、フレッドは自信ありげに笑みを浮かべる。

「これを見てもそう思うか？」

「円形になれ、氷よ（ソイズ・サーキュレイアー・グラース）」

　フレッドは魔法を発動させる。その氷魔法はフレッドを包み込むように、円の形になるように氷が形成されていく。

「！」

　魔法が完成したところでヨルは気づいた。氷には何も映っていないのだ。中には、フレッドがいるのにその様子がわからない。

「なるほどな、これは確かに便利な魔法だ」

　ヨルがそう呟くと、氷魔法が解除されたのか、みるみる消えていく。当然ながら、解除された氷魔法からフレッドが姿を現した。

「この魔法を闘技場を覆う大きさにすれば、お前の全力を観客達に見られずに済むというわけだ」

「奥の手としてはこれ以上ないな。しかし、できることなら、使わずに勝ちたいところだ」

「この魔法に何か問題でもあったのか？」

　よくわからないと言った様子で、フレッドは首を傾げる。

「使うことにならなければ気にすることはないんだがな」

　ヨルは首をコキコキと鳴らしながら、説明するかどうか迷っている。

「いや、そこまで言われたら気になるだろ」

　フレッドの目は好奇心に満ちている。その目を見た瞬間、諦めるようにヨルはため息をついた。

「この魔法は殺し合いにおいてはかなり便利な魔法だ。能力を隠せれるからな」

「ああ、そうだな」

「けど、闘技場の観客がいる戦いにおいては別だ」

「どのあたりが別なんだ？」

「何、簡単な話さ。観客が戦いを見れなかったらつまらないだろう？」

「……あ」

　フレッドは口を開け、唖然とした表情を浮かべる。

「その表情を見るに納得できたみたいだな。まぁ、だから、その魔法は一回しか使えないだろうな」

「なるほど、理解した。なら使うタイミングはお前が決めてくれ」

　ヨルは顎に手を添え考える。

「そうだな、こういうことは単純な合図でいいだろ。俺が“フレッド頼む”と言ったらこの魔法を発動させてくれ」

　ふふ、とフレッドは笑い声を漏らす。

「本当に単純な合図だな。面白い。そして、わかりやすい。私はその合図気に入ったぞ」

「単純でわかりやすいことは、最適解の一つだからな。この鞄だってそうだ」

　ヨルは自身が愛用している鉄の鞄を持ち上げる。

「盗まれないための簡単な方法として、鞄を重くしている」

「そうだったな。……さて、そろそろ闘技場に向かうとするか」

　フレッドは椅子から立ち上がり、それに続くようにヨルもベッドから立ち上がる。

　センとの試合が間近に迫っていた。

“さぁ、今大会においてダークホースと言っていいでしょう。予選突破最速記録を更新したフレッド選手とヨル選手のパーティです。みなさん、拍手で迎えましょう”

「仰々しい口上だな」

「最速記録は、すごいことだからな」

　フレッドとヨルは軽口を叩きながら、入場門を通過する。その声は余裕に満ちている。

「予選の時のような魔法を見せてくれよー」

「俺はお前らが優勝することに賭けているんだから頑張れよ！」

　そんな声が、闘技場の観客席から聞こえてくる。

「ふーん、誰が勝つかに賭けが行われているんだな」

　興味深そうにフレッドが呟く。

「闘技場以外でも賭けなんてことはよく行われているみたいだがな。フレッドはそういう風習はなかったのか？」

「……いや、あるよ。だから、この光景が少しばかり懐かしく感じてしまってね」

“さぁ、お次は今大会の優勝候補であるセン選手の入場です。なんと彼は、この大会をソロでエントリーしております。その剣技の美しさに酔いしれたものも多いと思います。それではみなさん、拍手でお迎えしましょう”

　おおー、ぱちぱち、といった音が闘技場全体に鳴り響く。

　入場門の入口から煙とともに人が出てくる。背中には一本の剣を背負っている。武器はそれだけだ。

　堂々とした佇まいで、センはヨル達の前まで歩いてくる。その力強い歩みは、自身が負けることなどまるで想像していないような自信が伺える。

「君たちの予選での戦い見させてもらいましたよ。あの氷魔法はすごいですね。この対戦が楽しみです」

　氷魔法に対する攻略が見えているのか、センの態度には余裕を感じる。

「楽しみに思ってもらえているところで悪いが、私はお前とは戦わないぞ」

　センは首を傾げ、訝しげな視線を送る。

「……それはどういう意味ですか？」

「簡単な話さ。お前と戦うのは私の相棒だということだ」

　フレッドは不敵に笑う。

「ま、そういうわけだ。お前には、俺との1対1で我慢してもらうぜ」

　フレッドの笑みにつられるようにヨルも笑みを浮かべた。

「僕のことを舐めているんですか。それとも負けた時の言い訳として、そのような戦い方をするということでしょうか？」

「舐めてもいないし、負けた時の言い訳とかでもない。俺がお前に勝つって言ってんだ」

　センは心を落ち着けるかのように目を瞑る。そして深呼吸をして敵であるヨルを見据える。

「なるほど、わかりました。僕としてもメインは後の方がいいですからね」

　センが納得した様子を見て、フレッドは闘技場の端に移動する。その行動は戦う気はないという意志表示をしている。

“おおーっと会場の皆様、聞こえましたでしょうか。どうやらこの戦いでは、予選で圧倒的な氷魔法を使用していたフレッド選手は手を出さないつもりのようだ！”

「おいおい、そんなんで優勝候補であるセンに勝てんのか？」

「ふざけんな。俺はお前達が勝つのに賭けているんだぞ。真面目にやれー」

　闘技場の観客席からは、不満の声が聞こえてくる。それに同調するかのように、そして、ヨルを見下すかのようにセンは笑みを浮かべる。

「観客の皆様も僕と似たようなことを考えているんですね。やめとくなら今のうちですよ」

　ヨルはそんなセンや観客の言葉が聞こえていないかのように、準備運動を始めている。

「観客の意見なんざ俺にとってはどうでもいいことだ。俺の実力については、俺が一番よくわかっているからな」

　ヨルはセンに敵意を向ける。その敵意に警戒し、センは剣を構える。

「どうやら思っていた以上に、あなたとの戦いは楽しめるのかもしれませんね」

“さぁ、観客のみなさん、そしてこの闘技場で戦う3人の戦士達よ、準備はいいかー！”

「おお！」

“それでは、ただいまから本戦3戦目の開始を宣言いたします。バトル開始！！”

　開始宣言の合図とともに、ヨルは高速で移動し、最短距離で右の拳をセンに向かって振り上げる。センにはその攻撃が見えている。落ち着いた様子で剣を構え、その拳をガードする。

　ダン、という拳と剣がぶつかる鈍い音が鳴り響く。

「そういえば予選の戦いでは、一瞬でかなり高いところに飛んでいましたね。このスピードも納得です」

「そりゃどうも」

　ヨルはセンから距離をとる。

「おや、離れてよかったのですか？なら次はこちらから行きますね」

　センは剣を上に構え、そしてそのまま振り下ろした。無論、ヨルに当たる距離ではない。

　ヨルがそう思っているとかまいたちと思えるような、斬撃が飛んできた。その斬撃はヨルの頬を掠めた。

「へー、驚いたな。そんな攻撃があるとはな」

「あんな予選で手の内を全て晒すわけがないですよ」

「そりゃそうだ」

　再び、ヨルはセンに突っ込む。

「芸がないですね」

　呆れたように、センはつぶやく。センの言った通り、ヨルは先ほどと同じく高速で移動し、右拳を振り上げようとしていた。センは先ほどのようにガードはせず、そのヨルの拳を綺麗に受け流す。そして、流れるようなカウンターで、ヨルの胴を切り裂いた。ヨルのお腹から赤い血が吹き出す。

　センは手応えをあまり感じれなかったのか、不思議そうな顔を浮かべている。

「案外硬いんですね。今ので勝負の決着がついたのかと思いました」

　自分が斬られたという現状にヨルは驚いていた。

「どうやら、お前は俺の想像以上に強いようだな」

「ええ、僕はいずれあの剣聖をも超えて最強になるのですから。あなた程度に負けている暇はないのです」

　ふ、とヨルは乾いた笑みを浮かべる。

「何がおかしいのですか？」

「当然だろ。剣聖が最強？そんなわけがないだろう」

　その言葉に、センは不機嫌そうに口を尖らす。

「もちろん勇者が人類で最強というのは知っています。ですが、剣聖の技量は最強です。これは私の中で揺らぐことはありません」

　真剣な眼差しでセンはヨルを見据える。

「技量か。確かに、強いな。でもそれを最強と呼ぶには、あまりにも世界を知らないと見える」

「世界？そんなものは知りませんね。僕は僕の見たものしか信じる気はありませんのでね」

「百聞は一見にしかずといった感じか」

「そうですね、その通りです」

「なぁ、セン、お前は恐怖を感じたことはあるか？」

「いえ、僕は強すぎるのでそのような経験をしたことはありませんね」

「そうか、わかった。なら、見せてやるよ」

　その一言で闘技場の雰囲気が変わったことをセンは感じ取っていた。

「凄んだところで、あなたと僕の技量差は変わりません。あなたじゃ、私には勝てない」

「フレッド！頼む！」

　ヨルはフレッドの方を振り向き、大声で叫んだ。その仲間頼みの言葉を聞いてセンは嘲笑する。

「やはり、仲間頼みですか。何が見せてやるよですか。期待しただけ損でしたね」

「円形になれ、氷よ(ソイズ・サーキュレイアー・グラース)」

　フレッドの呪文と同時に闘技場のリングに魔法陣が形成され、そこから氷が現れる。その氷は、闘技場の戦いを隠すかのように円の形となる。

「おや、攻撃技じゃなかったんですか。少々寒いですが」

　そう呟きながらもセンは警戒した様子で辺りを見渡す。

「心配するな。最初に約束したとおり、フレッドは俺たちの戦いに手は出さない」

「手は出さなくても魔法は出しているじゃないですか。もしかして、僕を油断させようとしていますか？」

「そんな小細工は必要ない」

　ヨルは首を鳴らす。

「見せてやるよ。勝てない戦いもあるってことを」

「それは、楽しみですね」

　余裕を感じさせる笑みでセンが答える。

　ドクン、ドクンとヨルの心臓の鼓動が速くなる。そして、ヨルの皮膚に龍の鱗が出現し、歯には牙も生えている。その変化する姿にセンは心を奪われるように見つめていた。

「少し待たせたな。第二ラウンドと行こうぜ」

「あながち嘘というわけではなかったみたいですね」

　そのセンの言葉に対し警告する声音でヨルが発する。

「集中を解くなよ。そこは俺の間合いだ」

　センは警戒心を2段階上げ、剣を構える。先ほどよりもさらにはやくヨルが駆け出す。ヨルはセンの前まで来て右の拳を、センの腹目がけ振るう。センはその攻撃をガードできずまともに受けてしまう。拳の衝撃とともに、センは後ろに吹き飛ぶ。

「おっと、まだ敗北するには早いぜ」

　ヨルは後ろに吹き飛んだセンよりも速く移動し、センの背中に手を添え、その動きを止める。ゴハッ、とセンは殴られた衝撃で血を吐き出す。

「どうした？まだ意識はあるだろう。敵は目の前にいるんだ。攻撃しなくていいのか？」

　センはゆっくりとヨルを睨みつけ、剣を振るう。ガキィンという鈍い音がなる。センはその光景が信じられないのか目を大きく見開けた。

　ヨルはセンの一閃を片手で受け止めていた。

「呆けている暇はないぞ」

　ヨルはセンを投げ飛ばす。受け身を取れずにセンは地面とぶつかる。

「クソが」

　センはすぐに起き上がり、斬撃を飛ばす。ヨルはその斬撃を避けようとはせず、その場に突っ立っている。そして、その斬撃を片手で薙ぎ払うように弾き飛ばした。

「な、あ」

　自身の斬撃が全く通用しないことが信じられないのか、センは状況を飲み込めずにそんな声を漏らしていた。

「少しは恐怖を感じたか？」

　いつの間にかヨルはセンの目の前まで移動していた。センにはもはや戦闘の意思は残っておらず、恐怖で体が震えており動けずにいた。

「世界は広い。命をかけて戦う連中はゴロゴロいる。奴らもお前と同じように恐怖する時もある。だが、決定的に今のお前とは違う部分がある。それは恐怖に対し恐れはするが、立ち止まるという愚かなことは決してしない。それがお前の現時点での実力だ」

　虚ろな目でセンがヨルを見ている。今の言葉がセンに聞こえていたのかヨルにはわからない。だからこそ、ヨルは最後の一撃を加えるために、拳を握りしめる。

「今の実力を認め、そして這い上がってくるんだな」

　ヨルの拳がセンの腹に直撃すると、センは気を失い地面に倒れ込んだ。勝負が決着したことで、ヨルは半龍化を解除した。

「もう魔法を解いていいぞ」

　離れているフレッドに向かってヨルは叫ぶ。フレッドは返事はしなかったが、行動で聞こえていることを示した。闘技場に貼られていた氷魔法が解除されていく。

“おおーっと氷が解除されていく。中では一体どのような戦闘が繰り広げられているのか？！”

　氷の魔法が完全に解除され煙が晴れると、センが倒れている姿とそのすぐそばで勝ち誇ったかのように立っているヨルの姿が、観客そして実況者がその目で観測した。

“こ、これはすでに決着がついていたのか、セン選手が倒れているぞ？！”

「ええ？！」

「うわ、試合内容見れなかったじゃん。どうやって決着がついたんだ？」

　そんな声が観客席から口々に聞こえてくる。ヨルは後ろを振り向き歩き出す。そのヨルの背中を見た実況者は、“ということで、この戦いの決着はフレッド選手のパーティに決まりました！みなさん、拍手をお願いします！”状況が飲み込めていない、観客は拍手をせずに唖然とした表情で闘技場のリングを見つめていた。

　その状況下でパチパチ、と一際大きな拍手の音が聞こえてくる。拍手をしているのは剣聖であるライトだ。それを見た観客たちもつられるように拍手をし、闘技場全体に拍手の大喝采する音が鳴り響く。

「勝利を讃えられるというのは、やはり悪くないものだな」

　満足そうにフレッドが笑みを浮かべる。

「ああ、そうだな」

　ヨルとフレッドは控え室へと戻っていく。

　控え室に戻ったところで、ドアをノックする音が聞こえる。

「ヨル選手、フレッド選手いらっしゃいますか？」

「ああ、いるぞ」

「では、早速で悪いですが中に入らせていただきますね」

　ドアが開くと、黒い服を綺麗に着こなした大会運営者の二人が現れた。

「一体何のようだ？こっちは戦いが終わったばかりで疲れているんだがな」

　フレッドは戦い終わりの体をほぐすかのように軽くストレッチをしている。

「申し訳ございません。実はお二人にお願いがあって来たのです」

「お願いというと？」

　訝しげな表情をフレッドは浮かべる。

「あの氷の魔法ですが、今後使用を控えていただきたいのです」

「なぜ？」

「観客に対戦内容が見えないからです。それでは、闘技場での戦いの意味がございません」

「なるほど、承知した」

　もともと懸念していたことだったので、慌てずにフレッドは頷く。

「理解していただきありがとうございます。それでは私どもの要件はこれだけです。何かそちらから質問はございますか？」

「そうだな、もしもさっきの氷魔法を次の試合で使用したらどのような判定になるんだ？」

　そのフレッドの質問に大会運営者の二人は困った表情を浮かべる。

「そうですね。忠告したのにも関わらず、使用したとなると強制的に敗北になりますね。あの、くれぐれも使用しないでくださいね？」

　フレッドは悪戯めいた笑みを浮かべる。

「まぁ使用するつもりはなかったから問題はない。聞いて見ただけだ」

　その言葉を聞いて大会運営者の二人は、ほっ、とため息をつく。

「それではこれで私どもは失礼させていただきます。準決勝進出おめでとうございます」

　大会運営者の二人は控え室を去っていく。

「おーいヨル、いるか？」

　大会運営者の二人と入れ替わるように剣聖のライトが、ノックもせず無粋に控え室に入ってくる。

「おいおいノックくらいしたらどうだ？」

　ヨルは呆れた様子でため息をつく。

「ああ、すまんすまん約束を果たしてくれたのが嬉しくてな。それに珍しくお前は全力を出してくれた。だから、お礼を言いたくて飛んできた」

　フレッドの耳がぴくりと揺れ動く。

「ちょっと待て。それはどういう意味だ？」

「……うん？何がだ？」

「お前にはあの氷魔法で覆われていた中の様子が見えていたのか？」

「……ああ、そのことか。それなら、俺には、見えていた。弟子の二人は見えていないがな」

　ライトは後ろにいる二人の弟子に視線を送る。

「師匠。本当に、このヨルって人があのセンに1対1で勝ったのですか？氷で覆われる前はボコボコに負けていたじゃないですか？」

　ライトの弟子である一人、エルフのサミは、ヨルの実力を疑っているのか、ジトっとした目つきでヨルのことを睨んでいる。

「ああ、さっきも言ったが一方的な展開だった。さすがは俺が認めたライバルというだけはある」

　ヨルは笑みを浮かべる。

「ストップ、そんなことよりも気になることがある。なぜお前はあの氷の中を見ることができたんだ？」

　フレッドがライトの前に移動する。

「何、簡単な話さ。少々俺の目は特別性でね。あんな感じのつつみ覆い隠すような魔術は看破することができる」

　ライトの瞳がゆっくりとオッドアイへと変化する。左目は深紅のルビーのように燃え立つ赤色で、右目は透き通るサファイアのように鮮やかな青色だった。その対比は、見る者を魅了し、同時に不思議な威圧感を放っていた。

「綺麗な目だな」

　フレッドはその目に吸い込まれるかのように見つめた。赤と青の輝きが彼女の瞳に映り込み、まるで異世界に引き込まれるような感覚を覚える。

「そう言っていただけると光栄だな」

　どこか照れたようにライトは笑みを浮かべる。

「師匠の目の能力については疑ってないんだけどさ、やっぱり最後は自分の目で見ないと信じられないよねー」

　隣のカサゴに同意を求めるようにサミが言った。

「そうだな。僕もサミに同意見だ」

　剣聖の弟子二人が、ヨルの方を見る。ヨルはその視線を無視するようにそっぽをむく。

「こいつは注目されることに慣れていないんだ。そう見てやるな」

　弟子二人を止めるようにライトが動く。

「俺との約束を果たしてくれてありがとうな」

　ヨルはライトのお礼の言葉に照れたように顔を染める。

「気にするな。一つ貸しということにしているからな。それに、あとはあのセンという人物次第だ」

　ライトは優しく笑う。

「何、きっかけを与えてくれたことに俺は感謝しているのさ。あいつはもっと強くなるだろうよ」

「そうだといいな」

「ああ。……じゃあ、サミ、カサゴ、そろそろ俺たちが戦う番だ。俺たちの控え室に行くぞ」

　はい、とサミとカサゴは返事をしその場を去る。サミとカサゴは去る直前まで、ヨルのことを怪しむように睨みつけていた。

「ヨルの実力だいぶ疑われていたな」

　フレッドは悪戯めいた笑みを浮かべヨルに近づく。

「そうみたいだな。まぁ、隠していることだし仕方ないと割り切っているよ」

「そうか。さて、私たちも剣聖の戦いを見に行くとするか。相手は刺客かもしれないやつだしな」

　ライトの戦いを観終えたヨルたちは、食事をしてから、宿に戻って来ていた。

「予想通り剣聖が勝ったな」

　剣聖の試合結果について、フレッドがヨルに喋りかけた。

「そうだな」

「それで、ヨルは今でもあのナタという人物が刺客だと思っているのか？」

「どうだろうな。あいつが刺客っていう自信は無くなっているな」

「だが、それなりに強かったのは事実だ。げんに、剣聖の弟子二人は1VS1で戦って負けているしな」

　話を総括していると部屋のドアからコンコンとノックのする音が聞こえてくる。

「ヨルさんとフレッドさんいらっしゃいますか？またお手紙が届いております」

「わかった」

　フレッドは頷き、慌てて扉を開ける。

「お疲れ様です。こちら、お手紙でございます」

「ありがとう」

「はい！それではごゆっくりどうぞ」

　宿の従業員はそれだけいうと、部屋の扉を丁寧に閉める。

　フレッドは早速その手紙の封を切る。その手紙の内容にフレッドは顔を顰める。

「なんて書かれているんだ？」

　そのヨルの問いかけにフレッドは手紙を渡す。

　ヨルは渡された手紙を見てフレッドと同じ表情をした。

“僕の送った刺客が君たちと当たる前に負けちゃったよ。ちょっと約束とは違うけど、ま、こっちが悪いからね。約束通り君たちの相手をしてあげるよ。これを君たちが読んだらそこに行くから”

フィア

　その手紙を読んだと同時に、神の表面に黒いインクが滲み出るように広がり、不気味な音を立てて魔法陣が浮かび上がった。

間章

　フィアはナタが寝泊まりしている宿にやって来ていた。

「あーあ、まさか、あの二人と戦う前に負けちゃうとはね」

「申し訳ございません」

　頭を低く下げ、ナタが申し訳なさそうに謝る。そんなナタの様子が面白かったのか、フィアは笑顔を浮かべる。

「嘘、嘘、今の君の実力じゃ、あの剣聖には逆立ちしたって勝てないからね」

　フィアのその言葉に、ナタはさらに申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「君は、ほんの瞬きする程度の時間で、ただの村人から1流の戦士になったんだよ。そこは誇ってもいいと思うな」

　フィアがナタを励ますように優しい笑みを浮かべる。その言葉にナタはパッと笑顔になった。

　その時、キーンとフィアの頭の中で音がなった。

「どうやら、手紙は開封されて読まれたみたいだね」

「先生？」

　フィアの言葉にナタは首を傾げる。

「ああ、君には言っていなかったけど、あの二人に手紙を送っておいたんだ」

「……手紙ですか？」

「うん、そして、その手紙にはちょっとした魔法を仕込んでいてね」

　するとフィアの足元から、魔法陣が浮かび上がる。影がゆらめき、部屋の温度が急に下がる。

「どこかに向かわれるのですか？」

　不安な表情をナタは浮かべている。

「一緒にくるかい？」

　その不安を察し、フィアはナタに優しく聞いた。

「はい、お願いします！」

「じゃあ、あの二人に気づかれないようにちょっとしたおまじないをかけるよ」

「おまじないですか？わかりました！」

　ニコッとフィアは笑い、ナタに魔法をかける。ナタの姿が一瞬にして薄れ、ほとんど透明になる。

「さて、予定通りあの二人に会いに行きますかね」

　フィアがそういうと魔法陣が光り輝き、彼女の姿が消えてなくなる。

　２度目の相対が始まる。

第5章　冒険は突然に終わり、そして決戦へ

　魔法陣から現れたのは、フィアだった。フィアの登場と同時に、ヨルとフレッドは即座に臨戦態勢をとる。フィアの姿が部屋の空気を一変させ、冷徹な笑みがその場を凍りつかせる。

「こんな街中で戦ってもいいのかな？僕は一向に構わないけどね。ああ、フレッドも別に気にしないか。君、魔王の娘だもんね。人類が滅ぶことに関しては歓迎か」

　ちっ、とフレッドは不機嫌な様子で舌打ちを鳴らす。今の状況がフィアにとって有利であり、そのことが気に食わないようだ。

「で、嫌がらせを言うために、俺たちの前に現れたのか？」

　ヨルは冷静な表情を保ちながら問いただす。

「へー、君はこの状況で焦った様子を見せないんだね。案外、薄情なのかな」

　フィアの挑発に、ヨルの目がきつく睨みつけるように変わる。

「なんだ、ちゃんと怒っているじゃん。だったら、最初からその表情を浮かべてなよ」

　ケラケラと小馬鹿にするようにフィアが言うと、ヨルの拳が音を立てて鳴る。フレッドも杖をフィアに向けて構え、宿の部屋の一室は今にも爆発しそうな緊張感に包まれる。

「おっと、流石にイタズラがすぎたみたいだね。ここで戦う気はないよ。君たちは条件をクリアしたからね。そんな君たちに不利な状況で戦ったら、僕の気分が良くないからね。ああ、これから発動する魔法は攻撃系じゃないから出来れば攻撃しないでくれると嬉しいな」

　フィアの言葉を信じられないフレッドは、ヨルに顔を向ける。ヨルは黙って縦に首を振り、その頷きを見てフレッドは慎重に口を開く。

「わかった。その言葉を信じよう」

　フィアは微笑み、呪文を唱え始めた。

「扉よ（ポート）、誰もいない場所に（アン・エンドロイト・サンズ・パーソネ）、導け（ガイデモイ）」

　フィアの目の前に魔法陣が浮かび上がり、その魔法陣から扉が出現した。扉は漆黒の木でできており、見たことのない呪文が刻まれている。

「さて、僕と戦いたかったら、この扉の中に入ってくるんだね」

　挑戦的な笑みを浮かべながら、フィアは扉を開け、その中へと吸い込まれるように消えて行った。

「これが本当の招待状ということだろうな」

　フレッドは落ち着きを取り戻しながら言葉を漏らす。

「そうみたいだな。で、どうするんだ？」

　ヨルが意見を求めると、互いの心はすでに決まっていた。

「もちろん、この招待を受ける。覚悟はいいな」

「当然！」

　ヨルは不敵な笑みを浮かべ頷く。フレッドもその笑みに釣られるように力強い笑みを浮かべた。

「行くか！」

　フレッドは扉に手をかけ、開く。

　扉の中を潜った先は、何もない荒野だった。乾燥した風が吹きつけ、砂埃が舞い上がる。フレッドとヨルは鋭い目つきで周囲を確認するが、人がいる気配はまるでない。

「ふふふ、よく来たね。罠の可能性もあると考えていると思ったから、もう少し時間がかかると思ったんだけどね」

　その声は上空から降ってきた。ヨルとフレッドは反射的に空を見上げる。漆黒の翼を広げたフィアが、闇夜の中で不気味に浮かんでいる。

「罠だったとしてもきたさ。お前を倒す２度目の機会なんだからな」

　宿にいた時とは違い、フレッドは平静を取り戻していた。その様子にフィアは嬉しそうに笑みを浮かべ、満足げに頷く。

「うんうん、懸念事項がなくなったみたいでよかったね」

　その余裕の態度が不気味に思えたのか、ヨルは眉を顰めた。

「なぜ、俺たちにデメリットのない状況をわざわざ作り出したんだ？」

　フィアは頬に人差し指を当て、蠱惑的に笑う。

「うーんとね、さっきも言ったと思うんだけど、条件をクリアした君たちに対して僕が有利な状況で戦うのは、僕の気分がよくない。それだけだよ」

　その言葉には、これまでと違って嘘は混じっていないようにヨルは思えた。

「へー、結構嫌いじゃないかもな」

　ヨルは準備運動するように肩を動かす。

「そう言っていただけると光栄だね」

　フィアが言葉を言い切る前に、フレッドが魔法を発動させるための呪文を唱える。

「銀幕の世界（モンデ・デュ・グランド・エクラン）」

　そして、荒野だった場所が一瞬にして氷の世界へと変貌した。冷たい風が吹き抜け、氷の結晶が光を反射してキラキラと輝く。

「この魔法寒くなるから、俺は好きじゃないな」

　ヨルは寒さに身体を震わせている。

「ふ、これは私のお気に入りの魔法だ。お前もそのことは知っているだろう？」

　言葉に余裕は感じられるが、フレッドはフィアが飛んでいた空中を見据えている。この程度でフィアがやられるとは全く考えておらず、周囲全体を見まわしながら警戒している。

　ピキピキピキと氷にヒビが入りだし、バリーンという効果音とともに壮大な氷の山と呼ぶべきものが崩れ去った。

「ひどいじゃないか。僕が喋っている途中に魔法で攻撃してくるなんてね」

　そう言いながらもフィアは特に焦った様子もなく平然としていた。

「当然だろう。これはよーいどんで始める試合じゃなくて、殺し合いなんだから」

　フレッドは杖をフィアに構えながら、淡々と言葉を続ける。

「それとも何か、よーいどんとでも言って欲しかったのか？」

　挑発するようにフレッドは笑みを浮かべた。そのフレッドの余裕の態度にフィアは眉を顰め、狙いに気づいた。

　だが気づくのが一歩遅れた。半龍化したヨルがすでに目の前に来ており、拳を振るおうとしていたからだ。フィアはそのヨルの攻撃を避けることができずに、もろに腹を殴られ、後ろに吹き飛んだ。吹き飛んでいるフィアに対し、間髪入れずにフレッドが呪文を唱える。

「まだだ。氷の鳥よ（オイセアウ・デ・グラース）、突っ込め（パウセズ・レ・デダンズ）」

　魔法陣が浮かびあがり、氷の鳥が出現する。その氷の鳥は、目にも見えない速さで後ろに吹き飛んでいるフィアへと突進した。またもフィアは氷ついた。

　そして、凍りついているフィアはそのまま地面へと落下していく。

「地面の落下なんか待つ気はねぇよ。このまま潰してやる」

　ヨルは高速で移動し、凍りついているフィアに殴りかかる。そのヨルの拳で氷が割れる。そのまま氷を粉砕しようと思ったヨルは違和感に気づく。氷の中で自身の拳が止められていたからだ。

「いい連携だね」

　その言葉とともに、氷が砕け、中からフィアが出現する。ヨルの拳はフィアの左手だけによって止められていた。

「見た目とは違って、かなり力があるんだな」

　ヨルは全力の拳を軽く受け止められたが、表情に焦りはなく、冷静に状況を分析している。目の前のフィアの強さを静かに受け入れた。

「そういうわりに驚いてはなさそうだね」

　フィアは、ヨルとの距離をとるために後ろへと軽やかに下がる。その動きはまるでダンスのようだ。ヨルも追撃はせず、翼をたたんで地面に着地する。

「さてフレッド、次はどう攻めようか」

　ヨルが降り立ったすぐ後ろにフレッドは移動していた。

「一気呵成に攻めたところで、どこかで連携は途切れてしまう」

「これまで通り、臨機応変に対応していけってことだな」

　その瞬間、空気が変わった。常人ならば逃げ出したくなるような強烈な威圧がフィアから放たれていた。しかし、その威圧もヨルとフレッドには効果がない。

　フィアは一瞬だけにこりと笑うと、冷徹ともいうべき無表情でヨルたちを見据え呪文を唱える。

「恐怖の世界（モンデ・デュ・フィア）」

　ヨルたちの視界が一瞬で暗転する。

「どうやら、これがラカルという近衛騎士が言っていた暗闇の世界のようだな」

　ヨルの声は落ち着いている。

「そうみたいだな」

　フレッドも冷静だ。

　ヨルは大きく息を吸い込み、口から炎を吐き出した。その炎の灯りは、暗闇の中に鮮やかな光を放ち、周囲を照らす。炎のゆらめきが闇を切り裂くように見えた。

　間髪入れずにフレッドが魔法を唱える。

「性質を保ち（メンテナー・ラ・ネイチャー）、凍れ（ジラー）」

　フレッドの魔法は、ヨルの吐き出した炎を凍らせる。しかし、その炎の灯りと熱さはもとの状態を保っている。氷ついた炎がまるで氷の彫刻のように輝き、闇の中に幻想的な光景を作り出す。

　フィアはヨルたちのことをじっと見つめている。そのとき、ヨルとフレッドの後ろから黒い影が動きだした。影は抱きつくようにヨルたちに飛びかかるが、二人にはその動きが見えているかのように軽やかに上に飛んだ。

　飛んだと同時にフレッドは杖をその影に向ける。

「凍れ(ジラー）」

　その呪文とともになすすべもなく影は凍り、砕け散った。氷の破片が音を立てて地面に散らばる。

　ヨルは右の拳を握りしめ、影を殴りつけた。その拳によって影は砕け散った。

　フィアは影が破壊される光景を観察するかのように黙って見つめていた。

「この技は、君たちに見せるのは初めてのはずなんだけど、なんで知っているのかな？」

「戦う敵の情報を事前に仕入れるのは、当然のことだろう」

　フレッドは不適な笑みを浮かべている。

　その言葉を聞いて納得したようにフィアは頷いた。

「なるほどね。あの、近衛騎士から情報を聞いたってわけだ。確か、彼はあの王都にいたからね」

　それを聞いたヨルは、眉を一瞬顰め反応する。

「あの近衛騎士から俺たちがお前の情報を聞くこともお前には織り込み済みだったのか？」

「いや、たまたま偶然だよ。僕もあの近衛騎士があの王都に行くなんて知らなかったからね」

　フィアの声音からは嘘か本当かは判別できない。だからヨルは自分の勘を信じる。

「そうか、どうやら本当のことのようだな」

　フィアは口角をあげ、無邪気な笑みを浮かべる。その笑みは見る者によっては恐ろしく感じられるものだった。

　闇の中でその笑みが一層不気味に浮かび上がった。

「あの近衛騎士から情報を聞いているってことは、もちろん、彼がどうしてやられたのかも知っているよね」

　フィアの目つきが鋭く変わり、空気が一気に緊張感を帯びた。

「どうやらここからが本番のようだな」

「ああ」

　ヨルは油断なく頷く。

　先ほどまでとは別物の威圧をフィアは放ち、周囲の空気が一瞬で重く冷たく変わる。

「くっ」

　その威圧に対し、フレッドは冷や汗をかいて膝を屈してしまう。

「聞いていたが、はぁはぁ、これほど強烈な威圧を感じたのは初めてだ」

　その状態でもフレッドはフィアを警戒するように見つめていた。

「この威圧を受けて発狂しないのはなかなかにすごいことだよ。どうやら魔王にしっかり育てられたみたいだね」

　フィアは不敵に笑いながらパチパチと拍手をする。どう料理したものかと舌なめずりをしてヨルの方を見たフィアだったが、平然と動いているヨルに驚愕の表情を浮かべた。

　ヨルはゆっくりと歩き、膝を屈しているフレッドに近づく。そして、フレッドを安心させるかのように彼女の肩に右手をそっと置いた。

「ヨルお前は、動けるのか？」

　声を震わしながらフレッドは言葉を口にする。

「ああ、問題なく動ける。フレッドは動けるようになるまでもう少し時間がかかるみたいだな」

「……そうみたいだ。足を引っ張ることになってすまない」

　その謝意にヨルは目を大きく見開け、驚いた表情でフレッドを見つめていた。

「油断するな！」

　喝を入れるように、フレッドは体を震わせながらも大きな声を出す。一瞬の出来事が命取りになるというのはこれまでの経験でわかってはいたが、フレッドに謝られるのは初めてのことだったので驚いてしまった。しかし、ヨルはフィアを視界から離しておらず、油断はしていない。

「これは少々驚いたね。この威圧を受けて萎縮しなかったのは、君で3人目だ。人の種族だけとなると初めてのことだよ」

　フィアは面白い獲物を見つけたかのように、好奇心いっぱいの目でヨルのことを見つめていた。

「そうか。ならがっかりさせないように、お前を倒してやるよ」

「それは楽しみだ」

　フィアは強敵と戦えるのが嬉しいかのように笑みを浮かべる。そんなフィアとは対照的に、さて、どうしたものかと心のうちでヨルは考えている。

　さきほど力を抑えていたフィアに全力で殴りかかったが、その拳は片手で防がれてしまった。無闇に突っ込んでしまったら、あっさりとやられてしまう。

　そのことに対し恐怖は感じていないが、絶望的な実力差をヨルは肌で感じ取っていた。いや、やはり恐怖は感じているのだろう。フレッドのように動けずに済んでいるのは、戦いの最中はどんな時でも止まるなという、師匠兼父親の教えがあるからだ。そのことに感謝するようにヨルは笑みを浮かべる。その笑みは一瞬のことでフィアには見えておらず、すぐに目の色を変え、勝機を探る。

　ヨルは息を吸い込んだ。それは緊張を和らげるものではなく、ドラゴン特有の息吹を吐くためだ。

「ガァぁぁ」という雄叫びとともに、強烈な炎の息吹がヨルから発せられた。

　その炎には全てを焼き尽くすかのような荒々しさがある。

　そんな炎の息吹をフィアは避けようとはせず、受け入れるかのように両手を広げていた。強烈な炎の息吹がフィアに直撃する。直撃した手応えはあったが、なおもヨルは炎の息吹を吐くのをやめない。およそ、30秒間炎の息吹を吐き続けた。

　あたりは煙と砂埃で見えなくなっている。自然の影響かはヨルにはわからないが、少し強い風が吹いた。そのおかげも相まって煙や砂埃はどんどんなくなっていき、視界がクリアになっていく。フィアの姿が見えたと同時に、ヨルは「ちっ」と気に入らない光景だったのか舌打ちを無意識にしていた。

　フィアは両手を広げた態勢から動いていない。微かに動いているのは、口角をあげ涼しい顔をしているくらいだろう。

「……まいったな。今のを直撃してノーダメージか」

　すがすがしいほどの実力差に、ヨルは自然と笑みをこぼしていた。

「君、この状況で恐怖せずに、笑えるなんてすごいね」

「気に入らなかったらすまんな。こういう性分なんだ」

「いや、僕としては嬉しいから歓迎だよ。君は変わった逸材だ」

　フィアは自身の頬に指を当て何かを考え始めた。その目はヨルを見つめず、どこか遠くを見ている。

　それは罠かもしれないが、みすみすチャンスを逃すヨルではない。

「勝負の最中に考え事なんてしていていいのか？」

　ヨルは目にも止まらぬ速さでフィアの目の前まで移動し、全力の拳をフィアの腹に叩き込んだ。その衝撃がフィアの体に響き渡る。だが、ヨルが目線を上げると、フィアは痛みを感じる表情どころか、笑みを浮かべていた。

「相手の隙をつくのも上手なようだね。ま、今のはサービスで、わざと一発殴られようと思っただけなんだけどね」

　ヨルがその場から離れようとした瞬間、フィアの手がヨルの腕をがっちりと掴んだ。ヨルは力任せに引き剥がそうとするが、フィアの力は圧倒的だった。

「じゃ、そろそろ僕も反撃させてもらうね。あえて君の土俵で戦ってあげるよ」

　フィアの右拳がヨルの腹にめり込む。その衝撃でヨルは内臓がひっくり返るような痛みを感じたが、フィアの手が彼を逃さない。フィアは連続してヨルの腹を殴りつける。鈍い音が響き、ヨルの口から血と唾が飛び散る。10回の殴打の後、ヨルは意識を失いかけていたが、フィアの手は彼をしっかりと掴んでいた。

　フィアはヨルの体を引き寄せるように引っ張り、ヨルの首元を掴む。そして、左手でヨルの意識を取り戻させるかのように、軽く頬を叩く。

　その衝撃で意識を取り戻し始めたのか、ヨルの目元がピクリと動く。目を見開く力があまりないのか、薄目で開けているが、勝負に関して諦めた様子はその姿からは窺えない。

「どうして君は僕と一人で戦ったの？勝ちの目はないってわかってたんじゃない？」

　しかし、ヨルは返答せず、荒い息を吐くだけだった。

「こんな状況なのに、まだ君は恐怖に囚われていないね。本当に変わった逸材だ。俄然、君のことに興味が湧いてきたよ」

　フィアは微笑みながら言葉を続ける。何かを思いついたかのように目を見開き、ヨルに問いかけた。

「ねぇ君、僕の仲間にならない？そうすれば、こんな勝ち目のない戦いなんてしなくて済むよ」

　ヨルは力を振り絞るかのように目を開け、フレッドの方を見た。フレッドは恐怖で動けずにいるが、懸命に動こうとしている姿が見えた。

「ああ、魔王の娘のことなら心配しなくていいよ。君が仲間になれば、手は出さないから」

　フィアは優しい微笑みを浮かべ、ヨルを騙すかのように囁いた。

　フレッドは戦いの一部始終を見て、己の無力さに打ちのめされそうになっていた。

　目の前で仲間がやられようとしているのに、自分はただ体を震わせているだけだ。この無力感と悔しさが胸を焼き、フレッドの内なる魔力がどんどん高まっていく。

　その魔力はフレッドの制御を超え、まるで暴走寸前の火山のように爆発しそうだった。フレッドの体からは冷気が漏れ出し、そのことに気づいたフレッドは、魔王城での出来事を思い出す。

「お前、父上が倒されたからといって暴走しかけていたぞ」

　目が覚めた瞬間、兄上の冷ややかな声が耳に入った。

「……私が暴走？」

　まだ朦朧とした意識の中で私は呟いたが、現実が私の中に鮮明に蘇った。

「父上は？！」

「だから、また魔力が高まってるって」

　兄上は呆れたように私の額にデコピンをした。

「痛い」

　私は額を抑えながら、デコピンの痛みがかすかに和らぐのを感じた。

「だが、流石に俺の妹なだけはあるな。その高まった魔力は俺と同等くらいの強さがあると見える」

　兄上は笑みを浮かべ、私の頭を撫でた。その手の温かさに、私の高まりすぎた魔力は徐々に小さくなっていった。

「まずは、その自分でも扱えきれない魔力を制限できるようにならないといけないな」

　兄上はそう言い、椅子から立ち上がった。

「お待ちください、兄上」

「なんだ？」

「兄上は、自ずから父上の仇を討ちたいと思わないのですか？」

「……お前は一つ勘違いをしている。父上は別に死んではいない。仮死状態にあるだけだ」

「仮死状態ですか？ですが、父上が起きない限りは、魔王城は不安定です」

「その不安定な魔王城は俺が守っている。その代わり父上の仇はお前が討て」

　その言葉は私には全く予想していないものだった。

「兄上ではなく、私がですか？」

「ああ、今のこの状況は俺たち魔王軍にとって試練のようなものだ。それを乗り越えなければ、俺たちに未来はない」

「ならば、なおさら兄上が討って出た方が良いのではないのでしょうか？」

　私の自信のなさを思ってか、兄上は優しく肩に手を置いた。

「お前が覚醒することが俺たち魔王軍の明るい未来につながるのだ。この旅は、お前が覚醒するのにちょうどいい旅となるだろう」

「あの時は、暴走しかけた私を兄上が止めてくれた。だが、今ここに兄上はいない。なら、兄上がいった通り、今、覚醒しろ。暴走なんてするな、私自身の最高を引き出せ。そうでなければ、パーティメンバーを一人も守れない魔王の娘などに価値などない！」

　その叫びが荒野に響き渡ると同時に、フレッドの体が眩い青い光で輝き出した。恐怖で凍りついていた体が、徐々に正常な状態に戻っていく。

　フレッドは見事に、センテンが期待していた覚醒へと至る。

　だが、フレッドの覚醒はほんの少し遅かった。

　フレッドが覚醒するほんの少し前

　ヨルはぐったりした様子でフレッドの方を見つめていた。フレッドは動けずにいるが、内に秘める力はどんどん強大になっていく。それを感じたヨルは、微かに安心の笑みを浮かべた。

　その笑みにフィアが反応する。

「今の状況で笑うってことは、僕の軍門に降るってことでいいのかい？」

　声を絞り出すようにして、ヨルは自分の意思を伝えた。

「舐めるなよ。負けようがない戦いをしたかったら、俺はドラゴンスレイヤーなんてやってねぇよ」

　フィアは笑みを浮かべず、ヨルのことをじっと見据えている。

「でも、その選択をしたら、君の冒険はここまでになるよ」

　ヨルは「ハン」と嘲笑し、フィアを見下すように口を開いた。

「冒険ってのは負け、そして命を失うことも含めて冒険だ。だから、そんな脅しじゃ意味ねぇよ」

「そう、残念だ」

　フィアの表情には一瞬の残念そうな色が浮かんだが、その攻撃は一切の容赦もなかった。フィアの左手はヨルの腹を一気に突き刺した。

「フィア！！！」

　フレッドの叫び声が荒野を震わせる。その声にフィアは驚愕の表情を浮かべ、目を大きく見開いた。

　この魔王の娘、ついさっきまで、こんな強大な魔力を放っていなかった。それどころか、僕の能力にただ体を震わせて、動けなくなっていたというのに、いつ強くなったんだ？

　フィアは心の中で疑問が渦巻く。このヨルという人物のせいで周りが見えていなかったのだろうかと気を失って死にかけているヨルを見据える。

「ふ、死にそうなやつをじっと見たところで、答えてくれるわけもないか」

　そう呟きながら、フィアはヨルの腹を貫通していた腕を無造作に引き抜いた。

　その様子を見つめるフレッドの心には怒りが宿りつつも、頭の中は氷のように冷静だ。フレッドは完全にフィアの威圧を克服している。

　フレッドは前方に杖を構え、息を整える。冷気が漂う中で彼女の声が響いた。

「氷の騎士よ（チェベリア・デ・グラース）、降臨せよ（ディスセンドレ）」

　呪文を唱え終えると、冷たい風が巻き起こり、輝かしい青色の魔法陣が浮かび上がった。

　そこから現れたのは、全身が氷でできた鎧の騎士。その姿はこれまでの召喚スキルとは一線を画し、光り輝いていた。その理由は、覚醒したことにより魔法とスキルを融合させた、フレッドオリジナルの魔法スキルだからだ。

「氷の騎士よ、あの悪魔が掴んでいる私の仲間を助け出したい」

「かしこまりました、我が主人よ」

　覚醒した魔法スキルは、意識を持つようになり、より忠実にフレッドの意思に従うようになる。氷の騎士は命令を受け、瞬時に行動を開始した。

　ヨルに完全なるとどめを刺そうとしていたフィアの左腕と首元を掴んでいた右腕を一気に斬り落とした。

「……また驚かされてしまった」

　そう呟き、フィアは氷の騎士の追撃を避けるために後ろに後退する。氷の騎士の追撃を避けながら、フィアは冷静にフレッドの動きを見つめた。

　フレッドはヨルに駆け寄り、彼の左胸に手を添える。

「無茶しやがって」

　冷たく湿った感触が指先に伝わるが、ヨルの心臓は微かに動いていた。

「よかった、まだ命はあるみたいだ」

　フレッドは安堵の息を吐き、回復呪文を唱えた。

「大怪我を回復せよ（セ・リメトレ・デウーネ、ブレッサー・グレイブ）」

　優しい緑色の光がヨルの傷口から広がり、傷が徐々に癒えていく。完全な回復には至らないものの、命に関わる状態から脱した。

「軽い応急処置だ。あとは、そこでゆっくり休んでいてくれ。フィアは私が倒す！」

　フレッドはヨルに対し、決意を込めた言葉を口にし、再び戦場に戻った。

　氷の騎士は、ヨルでは全く歯が立たなかったフィア相手に善戦している。フィアの拳が迫ると盾で受け、反撃と言わんばかりに、右手に持っている剣を振り翳していた。そのシンプルな動きだけで、フィア相手に優位な戦闘を進めている。

　そして、その優位な状況でフレッドが参戦する。

「氷柱を撃つ（ティーレ・ウネ、グラソン）」

　フレッドは遠距離から呪文を唱え、氷の騎士を援護するようにフィアに氷柱を放つ。鋭い氷の槍が次々とフィアに向かい、彼女の動きを封じ込める。

　戦況は徐々にフレッドたちに有利に傾いていった。

　少しずつだが、確実にフィアはダメージを受けていく。

「魔王の娘、いや、フレッド。どうやら君が秘めていた力は僕の想像以上とはね。やはり、あの時殺さなくて正解だったよ」

　フィアは氷の騎士の攻撃を捌きながら、フレッドに視線を向ける。その瞳には、新しい獲物を見つけたかのような興味が宿っていた。

　明らかに形勢はフレッドと氷の騎士が押しているが、フィアの不気味な余裕はフレッドに警戒心を高めさせる。

「君の強さに敬意を表して、一ついいことを教えてあげるよ。恐怖ってのは何も、人だけの特有の感情ではないんだよ」

　フィアは右手を氷の騎士の方にを伸ばし、掌を開けた。その瞬間、氷の騎士から何か黒いもやのようなものが現れ始めた。

　黒いもやはゆっくりとフィアの右手の前で球体へと形になっていく。氷の騎士は自身から発せられている黒いもやを気にしていないのか、フィアに突撃をする。剣を振り上げ、フィアの頭上に振り下ろす。しかし、その剣は黒いもやに阻まれ、動きを止められた。

「僕は恐怖とは友達みたいなものでね。恐怖という感情は僕を攻撃しようとしないんだ。この右手はそんな恐怖という本能を呼び覚ますこともできるんだよ」

「なるほど、さすがは恐怖の悪魔と言われるだけあって、すごい能力だな。だが、それは複数相手に想定した能力なのか？」

　フレッドの声がフィアの背後から響く。フレッドは、いつの間にかフィアの後ろに移動していた。

「氷柱を撃つ（ティーレ・ウネ、グラソン）」

　鋭く尖った氷柱が、フィアの背中に直撃した。

「ッ」と痛みの声がもれ、氷の騎士から発せられた黒いもやが薄れる。

　その瞬間、氷の騎士の剣が再び動き出し、フィアの体を右肩から左腰にかけて深々と切り裂いた。

　刃はフィアの体に致命的な傷を負わせたに見えたが、彼女の体からは血が流れていない。

「あの近衛騎士が言っていた通り、貴様には血はないのか？」

　荒野に冷たい風が吹き、フィアは不気味な笑みを浮かべた。

「うん、血は出ないよ。ああ、でもダメージは受けてるからそこは安心していいよ」

　先ほどからフィアはずっと余裕があるように振る舞っている。なぜそのように振る舞っているのかフレッドには理解できなかった。

「さっきから、なぜそのような余裕な態度でしゃべっているんだ？現状、勝っているのは私のほうだろう？」

　フィアはより一層「ふふふ」と笑みを深める。

「なぜ余裕を浮かべているかって？簡単だよ。まさか、魔王以外でこんな楽しい戦いをすることができるなんて思いもしなかったからね。さいっこうに楽しいんだ！」

　フィアの表情には不気味さはなく、だからこそ不気味だとフレッドには感じられた。

「ただ、恐怖の悪魔としては、これ以上ボコボコにされるわけにはいかないかな」

　フィアは再び右手を氷の騎士に向けた。手のひらから黒いエネルギーが集まり、キュイーンという回転する鉄の音が荒野に響いた。

　黒いエネルギーは球体に形を変え、「恐怖弾（フィア・バル）」という呪文とともに氷の騎士に放たれた。

　風を切り裂くスピードで放たれた黒い弾丸。氷の騎士は避けることを諦め盾を構えるが、「あーあ、それは失敗だね」とフィアが嘲笑う。

　フィア・バルは氷の騎士の盾をすり抜け、その体内に侵入した。

「これはなんだ？」と氷の騎士は自らの体を見るかのように氷の兜を下に向けた。フィア・バルは氷の騎士の体内を侵食するように、どんどん氷の騎士の体を黒く染める。

「主人！私の召喚を解除してください！このままでは、私は主人の敵になってしまいます！」

　慌てた氷の騎士がフレッドに叫ぶ。

　フレッドは即座に決断し、「召喚魔法解除（アニュリー・ラ、マジー・デ・アンヴォカシオン）」と呪文を唱えた。

　氷の騎士から魔法陣が浮かび上がり、地上から姿を消した。

「いい判断だったね。そして、即決するのもすごいね」

　パチパチと敬意を表するかのようにフィアは拍手をしていた。

「よく分からないが、召喚した精霊の意思を読み取れるようになっていたからな」

「……なるほど。それで、すぐに即決できたってわけだね」

「そういうことだ」

　戦闘を再開するぞと言わんばかりに、フレッドはフィアに向けて杖を構える。

「召喚魔法をして、数の有利で戦わなくても大丈夫なの？」

　フィアもフレッドに向けて右手を構えた。しかし、フレッドの体からは黒いもやが出現しなかった。

「どうやら完全に、僕の恐怖は克服しているようだね」

　そのフィアの言葉とともに、フレッドは走り出しながら魔法を唱える。

「氷柱の連弾（ティーレ・ウネ、グラソン、デュオ）」

　走り出しているフレッドの周辺から、複数の魔法陣が浮かび上がる。その魔法陣からは鋭く尖った氷柱が次々と出現し、フィアに向かって放たれる。フレッドがフィアに近づくことで、その氷柱はさらに避けにくくなる。そのため、フィアは防御に専念せざるを得なかった。

　四方八方から襲いかかる鋒鋭な氷柱。

　フィアはその物量は想定していなかったため「チッ」と不機嫌そうに舌打ちをして呪文を唱える。

「盾よ守れ（ブークリエ、プロテジー）」

　フィアの周囲に魔法陣が現れ、透明の盾が出現する。氷柱はその盾に阻まれるが、次々と突き刺さり、盾にヒビが入る。

　フレッドはそのヒビを見逃さない。残りの氷柱をヒビに集中させ、盾を破壊しようとする。

　最後の3本の氷柱が突き刺さり、盾は砕け散った。3つの氷柱がフィアを襲う。フレッドはさらに追撃をするために魔法を唱えようとした。

　しかし、うっ、という声とともにフレッドは地面に片膝をつく。フレッドは自身の体をよく見ると、黒いモヤが出ていた。

　急いでフィアの方に視線を向けた。フィアは3つの氷柱に身体を貫通されながらもフレッドに向けて右腕を構えていた。

　咄嗟にフレッドは呪文を唱える。

「銀幕の世界（モンデ・デュ・グランド・エクラン）」

　フレッドの得意魔法は、彼女を守るようにフィアを襲った。そして、その魔法が展開したことによって、フレッドの身体から出現していた黒いもやは消えていた。

　今の黒いモヤは私の恐怖だ。しかし、一度は効果はなかったのに、なぜ、今は出現していたんだ？とフレッドは思考する。

　バリーンと氷が割れる音が響き、警戒を強めるフレッド。

　当然のように氷の中からフィアが出てくる。いつの間にか、3つの氷柱に刺されたはずの身体は何事もないかのように元通りとなっていた。

　そして再び、フィアはフレッドに向けて右腕を構える。またもフレッドの身体からは黒いモヤが出現する。くっ、という声を発し、先ほどと同じくまたもフレッドは地面に膝をついてしまう。

「不思議かい？始めは効果がなかったのに、今頃になってこの技が効くことになったことが」

　フレッドは無言で、膝をつきながらもフィアを睨みつけている。

「ふふ、その表情からは、恐怖は感じられないね。教えてあげるよ、恐怖ってのは蓄積されていくものさ。そして、恐怖を呼び起こすためのピースには、疲労があるんだよね。君は覚醒の力に頼りすぎて、自身の体力を見誤ったんだ」

　はぁはぁ、とフレッドは肩で息を切らしている。

　何をしている？！私は一人でこの悪魔を倒すと決めたんだ。それをまたも恐怖で動けなくなるというのか。

　フィアを睨みつけながらも、視線がぼんやりと先へと向かっていく。自分の弱さに嫌気がさし、黒いモヤがフレッドの体から一層強く発せられる。

　それを見たフィアは勝利を確信したかのように笑みを浮かべ、そして少しだけ寂しそうな表情を浮かべていた。

　フレッドの視界がさらにぼやける。

　なぜ、私は今戦っていたのだろうか？思考の沼にハマりそうになった時、かすかに何かが動くのをフレッドの視界がとらえていた。そこにいる何かをぼんやりと見つめる。何かが懸命に動いている。その姿には見覚えがある。

「ヨル？」とボソリと呟く。そして、フレッドの目には光が灯る。ヨルはいつの間にか意識を回復し、再び立ちあがろうと懸命に体を動かしていた。フレッドは、自身のほっぺを今出せる最大限の力で引っ叩く。右頬が赤く染まると同時に、その目には力強さが戻った。

　そうか、私は何を奢っていたんだ。覚醒したからと一人でどうにかしようとしていた。私は一人で戦っていたわけじゃない！だったら、負けることを恐れる必要はないだろう！！

　その思いが、フレッドの戦う意志を呼び戻す。黒いもやは消え、決意の炎が彼女の目に宿る。その様子を黙って見ていたフィアは興味深そうに笑う。

「諦めていた雰囲気だったのに、急に立ち直ったね。まさか、さっきの状態から再び恐怖を克服するとは思わなかったよ。何があったんだい？」

　フィアはこれ以上恐怖を呼び覚ますのは無駄だと思い、構えていた右手を下ろす。

「思い出したんだよ。私は別に一人でお前と戦っていたわけではない。だからこそ、私は今ここで、お前に対して全力を放つことができる」

　フレッドの魔力がこれまで見せたことのないほどに高まる。周囲の空気がピリピリと震え、その力強さが感じられる。

「いいね、すごくいいよ。君の最強の技、僕にぶつけるといい」

　フィアはニンマリと笑みを浮かべ、両手を前に構えた。その手からは、黒いオーラが渦巻いている。

「氷の龍(ドラゴン・デ・グラース）」

　フレッドの正面に巨大な魔法陣が浮かび上がり、その中から、青白く輝くドラゴンが現れる。

　氷の龍は無言でフィアに向かって猛スピードで牙を剥いて突進した。

　明らかな脅威が襲ってくるというのにフィアは避けるそぶりを見せない。実際のところ、氷の龍の突進自体は避けようと思えば避けれる。

　しかし、そんな勝ち方をフィアは認めない。だからこそ、両手を構えて迎え撃つ。

　氷の龍とフィアが衝突する。氷の龍の勢いは凄まじいが、フィアもやられてはいない。

　フィアは氷の龍の牙を両手で支えるように掴んでおり、噛み砕かれないように身体全体を使って全力で支えていた。

　氷の龍はフィアを咥えたまま、垂直上に空中へと飛び上がる。

　氷の龍の冷気に耐えらえれないのかフィアの身体はあちこち凍りついていく。

「くっ、こんの！」

　フィアは必死に叫びながら、氷の龍の口を開け始める。

　そして、「はぁあああ」という叫び声と共に、氷の龍を後ろへと弾き飛ばした。

　氷の龍は地面に落下し、原型を保てずに崩れ去った。

　フィアは氷ついた身体に触れながら、ゆっくり地面へと降下し、すぐに駆け出す。一瞬でフレッドの正面に立ち、右手を構えて勝利宣言をする。

「僕の勝ちってことでいいのかな」

「……どうやら、そのようだな」

　フレッドは悔しそうにしながらも、どこか晴れ晴れとした笑みを浮かべていた。

「崩壊の時だよ」

　フィアの右手がフレッドに触れると、彼女は力尽きて前のめりに倒れた。

「君たちとの勝負最高に楽しかったよ。こんな気分になったのは、魔王と戦った時以来だ」

　魔王との戦いは最近のことだったが、フィアに時間感覚などない。

「お礼代わりにきっちり君たちには敗北を教えてあげる」

　フィアは呪文を唱えようとするが、倒れているフレッドの口角が上がるのを見逃さなかった。

「何か面白いことでもあったかい？」

「……面白いことか？いや、私は貴様に負けたんだ。面白くはない。けど、……私たちはまだ負けていない」

　フィアは首を傾げる。

　その意味を数秒後に悟る。

　後ろから感じる圧倒的な威圧感が理由だ。フィアは驚く。

「まさか、何千年も活きたこの僕が震えることがあるなんてね」

　威圧が放たれる方向に目を向ける。

　そこには、青と透明色が入り混じった巨大なドラゴンがいた。その姿はまるで氷の彫刻のように美しく、青白く輝く鱗が全身を覆っている。巨大な翼は透き通るような色合いで、まるで氷の結晶が羽ばたいているかのように見える。その鋭い爪や牙は見るものに恐怖を与え、その目は冷たくも燃え上がるような輝きを放っていた。

「GYAAAAAAAA！」

　ドラゴンの雄叫びが荒野に響き渡る。

「さっきのドラゴンとは違うみたいだね。あれは、なんだい？」

「うちのパーティのヨルだよ」

「どうして、彼はドラゴンになったの？」

　意識が薄れかけているフレッドはフィアに顔を向け、薄笑いを浮かべた。

「私の最後の攻撃が貴様を倒すだけのものだったと思うか？」

「……なるほどね。つまり、あの最後の攻撃は念のための保険も仕込んでいたってことか」

　フィアは首を縦に振りながら納得したように頷いた。

「しかし、僕の見たところによると、彼、すごいパワーアップしているように思えるんだけど」

　ヨルのドラゴン形態は圧倒的な存在感と共に、空気を震わせるほどの威力を感じさせた。風が巻き起こり、砂塵が舞う。

「私の最後の一撃でパワーアップしたんだ。あれくらいのレベルにはなってもらわないとな。さて、あれに勝てば、今度こそお前の勝ちだ恐怖の悪魔。……がんばれ」

　最後の頑張れというフレッドの言葉は、ドラゴンとなったヨルの方を見つめながら呟いたものだ。そして、フレッドは全てを出し尽くしたことに満足したのか、口元に笑みを浮かべながら意識を失った。

「……勝利宣言はもう少し後にすべきだったな。まさか、こんなサプライズがあるなんて。君たち、最高だよ」

　左手で頭を掻きながらも、倒れているフレッドを見ながらフィアが嬉しそうに呟いた。

　そしてフィアは改めて、ドラゴンとなったヨルの方を見る。

　青と透明の鱗が輝く巨大なドラゴンが空中に浮かび、見境なく氷の息吹を放っている。その冷気が空を凍てつかせ、地上に冷たい霜を広げていく。フィアは目を細めた。

「あれ、理性あるのかな？」

　ドラゴンは一向にこちらに来る気配がない。

　僕のそばにフレッドがいるからだろうか、そう思ったフィアは自分からドラゴンに近づいた。

　フレッドの最後の攻撃で受けた氷の龍によって凍った身体は、まだ溶けていない。そのため、本来なら一瞬で移動できる距離のところが、ほんの少しだけ時間がかかった。

　ダメージを自覚できるレベルまで受けるなんてね、フィアにとってその事実は、口角を釣り上げるほどに嬉しいことだった。

「さて、君はどこまで僕を楽しませることができるのかな？」

　ドラゴンの目の前まできたフィアは拳を握り締める。そして、ドラゴンの腹を目掛け、その拳を思いっきり振り上げた。ドラゴンはその攻撃を何の回避も防御もできず、もろに受ける。その一撃にドラゴンは多少の息づかいが荒くなるだけで、後ろに吹き飛ばされることはなかった。人間とドラゴンの半々だった時は、今のフィアの一撃だけで決着がつくほどの威力だったが、本当の意味でドラゴンとなったヨルには、大したダメージにはならなかったようだ。

　しかし、殴られたことで多少のダメージは受けた。だからこそ、ドラゴンはフィアのことを敵認定する。正面にいるフィアに向けて、氷の息吹を放った。

　その氷の冷気が、フィアの周囲に広がり、肌に突き刺さるような寒さが襲いかかる。フィアは両手を前に構えて防御の態勢をとる。

「また、ブレスか。しかし、半端の時の炎のブレスよりも桁違いの強さだ」

　氷の息吹は、フィアが凍りついている身体の箇所を徐々に広げるように凍らせていく。

　このまま受け続けたらやばいと感じたフィアは「盾よ守れ（ブークリエ、プロテジー）」と防御の呪文を唱える。それによって、透明の膜がフィアを包み込んだ。

　その防御魔法はドラゴンの氷のブレスを防御するのに十分な強度だった。それを瞬時に悟ったドラゴンは、氷のブレスをやめ直接牙を向け、フィアに攻撃を始めた。防御膜ごとフィアを牙にとらえた。またしても、フィアは牙を両手と身体全体で支えるように、口の前で飲み込まれないような態勢となった。

「またも、こんな形で不自由になるとはね」

　防御膜に少しずつヒビが入ってくる。

　ドラゴンは、フィアを牙で咥えたままさきほどのフレッドの最後の一撃の時のように、空中を直線上に駆け上る。

「さっきと同じように後ろに飛ばしてあげるよ」

　フィアは両手に力を込め、黒いオーラが出現する。それと同時に、フィアを守っていた防御膜が音を立てて壊れた。フィアの力はドラゴンの咬む力に負けておらず、ドラゴンの口が徐々に開いていく。それはドラゴンも、いや、ヨルも気づいていた。だからこそ、機会を逃さず腹に力を込める。

「……おい、嘘だろ？」

　フィアの口から驚きの声が漏れた。これほどまでに焦った経験はフィアにはない。そして、その経験を楽しむこともできないほど、余裕がなくなっていた。ドラゴンの口の中から青白い光とともに、凍てつく寒さが全身に伝わってきたのだ。それは氷の息吹を放す前兆。牙によって身動きを取ることができないフィアにとっては必中の一撃。

「くっ、避けられない！」

　フィアは内心で叫んだが、すでに手遅れだった。ヨルは必殺の一撃、氷の息吹をフィアに向けて放った。直撃した瞬間、フィアの全身が氷づけになる。

　決着の時だ。ヨルは牙の咥えていた力を弱め、フィアを放り出した。そして、元の人間の姿に戻った。氷づけにされたフィアは、地面へと落下していく。それを追うようにヨルも落下した。氷づけにされたフィアに追いつくと、彼女を支えるように両手で持ち上げた。

　氷に触れた瞬間、ヨルは咄嗟に「冷た」と発したが、実は特に冷たいという感覚はなかった。氷のドラゴンになった影響だろうかと一瞬考えたが、そろそろ地面に落ちてしまうということもあり、フィアを持ち上げた。

　ヨルとフィアは無事に地面へと着陸した。そして、ヨルは慌てた様子で氷づけにされているフィアの顔あたりに手を添える。

「今なら多分、俺にもできるはずだ」

　ヨルは氷が壊れない程度に、両手に力を込める。みるみるうちに氷が溶けていく。いや、消えていくという表現が正しいだろう。それは、まるでフレッドが自身の氷を消した時と同じだ。一つ違う点は、ヨルのその力はまだ未熟であり、フィアの顔部分だけしか氷はなくならなかった。そのことはヨルも察していたのか、だからこそ、フィアの顔部分の氷を中心に両手で触れていたのである。

「君、理性ないふりして、実は意識あったよね」

　顔周りの氷が溶けたことで意識を取り戻したフィアが、ゆっくりと呟いた。

　ヨルは口角を上げて応えた。

「ああ、あったぞ」

「意地が悪いね」

「いや、別に隠していたわけじゃない。ただ、理性がないと思った方があんたも気持ちよく戦えるだろう？」

　ふ、とフィアは笑みを浮かべる。

「それは、嘘でしょ。だったら最初の空に向けて氷の息吹を放っていたのは何だっていうの？」

　ヨルは目を逸らし、反省するかのように呟いた。

「あの時は、正直意識は半分くらいしかなかったからな。もう半分はドラゴンになったことによる高揚感からくるものだった。実際、フレッドの力でドラゴン化をしていなかったら、多分意識はなかったんだろうなと思う」

　倒れているフレッドの方を優しい瞳で見つめた。

「ま、俺たちの結果としては、あんたに勝てて目的は達成した」

「そう」と満足したようにフィアも笑みを浮かべる。

「さて」とヨルは呟き、倒れて氷づけにされているフィアを見つめた。

　その時、ヨルの顔の横に鋭い刀がそっと添えられた。その刀はヨルの首をいつでも切り落とせると主張するかのように、ゆっくりと首に当てられた。

「……驚いたな、こんなところに人がいるとは思わなかったよ。お前は確か、王都の大会で剣聖に負けたやつ、名前はナタだったな。それで、あっているか？」

　ヨルの首に添えられている刀がぴくりと震える。

「顔も見えていないのによく分かりましたね。それに直接関わったことのない相手を覚えているのですか？」

「あの大会にはそこの倒れている悪魔から、刺客が送られると言われていたからな。少なくとも予選を通過した奴らのことは、顔と名前くらいは知っている」

「そうですか、ところであなたがおっしゃたそこの悪魔……、私の師匠をどうするつもりなのですか？」

　ヨルは目線だけ倒れているフィアに向けた。

「まさか、悪魔が人間なんかを弟子に取るとはな。すこし驚いたよ」

　ふふ、とフィアは笑いを漏らす。

「僕自身も驚いたことの一つだよ」

「師匠は黙っていてください！で、どうするおつもりなのですか？」

　その弟子の言葉に、おどけたようにフィアは肩をすくめる。

「どうするも何も俺自身もうこの悪魔に手を出すつもりはない」

「……本当ですか？」

　ヨルは自らの両手をゆっくりとあげた。そのポーズは戦う気はないという意思表示をしている。

「そっちを振り向いていいか」

　ナタを刺激しないようにゆっくりと呟いた。

「ええ、ですが剣はこのまま構えておきます。妙な行動は取らないでください」

「わかった」

　ゆっくりと振り返り、ナタの目をみる。

「さっきも言った通り、俺はこの悪魔をこれ以上どうこうするつもりはない。まぁ、うちのリーダーがこの悪魔に用事があるみたいだがな」

　そのヨルの言葉に対し、ナタは自身を落ち着かせるよう深呼吸をした。

「どうやら、本当のことを言っているみたいですね」

　そういうとナタはヨルの首元にむけていた剣を戻し、鞘に収めた。

「真剣勝負にチャチャを入れてしまい申し訳ございません」

　ナタは深く頭を下げる。

「それって俺に言ってるのか？」

　謝れる覚えがないヨルは首を傾げる。

「あなたにも、そして、師匠にも言っています」

「僕の弟子は律儀だなー。別に好きにやっていいのに」

　フィアは、倒れながらも口元に笑みを浮かべ、小さく呟いた。

「いろいろ聞きたいことはあるが、ひとまず、あそこで倒れているうちのリーダーを起こしてくる」

　ヨルはフィアとナタに背中を向けて歩き出す。

「どうして彼に剣を向けてまで僕を助けようとしたの？僕は、恐怖の悪魔だよ」

「そんなの決まっています。確かに1ヶ月程度しか師匠とは共に生活していませんでしたが、それでも私にとって、師匠は命を助けてくれた恩人です。師匠のおかげで私は、復讐心に心を奪われることもなかったんです」

「そっか、そうか」

　嬉しそうにフィアは目を瞑る。これが、戦い以外での嬉しいという感情なんだね、と心の中でフィアは呟いた。

　フィアとナタがやり取りしている間、ヨルは倒れているフレッドの元へと歩み寄った。

「フレッド、戦いは終わったぞ」

　冷たい空気が肌に刺さるように感じられる中、フレッドは目を閉じたまま口を開けた。

「そうか、手を貸してもらっていいか。起き上がる力がないんだ」

　ヨルは頷き、右手でフレッドの手に触れた。指先が触れる瞬間、フレッドの手の冷たさが伝わってくる。

「なぁ、フレッド」

「なんだ？」

「俺の力、フレッドが吹き込んでくれたんだろ？」

「……そうだな」

「だったら、もとに戻してくれ。これはフレッドの力だろう。その方が自然だ。それにそうすることで、フレッドは動けるようになるだろ」

　当然のように力を戻すことができると思っているヨルの軽い感覚に、フレッドは呆れたようにため息をついた。冷たい風が二人の間を吹き抜ける。

「確かに、それは可能だが、せっかく手に入れた力に酔いしれないのか？」

　そう発言したが、無粋な質問だったなとフレッドは思った。

「これはフレッドに与えてもらった力だ。もちろんそのことは嬉しい。けど、それで今のフレッドが全力を出せないのなら、そんな力は欲しいとは思わない。それに俺たちはパーティだろう？」

　フレッドはふっと笑みを浮かべた。

「ああ、わかった。ならば、お前に与えた力は返してもらうよ」

　フレッドが静かに呪文を唱えるとヨルの身体が青白く発光し始める。温かさと冷たさが混じり合った感覚がヨルを包む。そして、その光はフレッドの手に流れるように移動していく。

　全ての光が、フレッドに移動した時、ヨルの身体を疲労感が襲った。

「おっと」と片膝をついたところで、フレッドが起き上がりヨルを支えた。ヨルの足元が不安定になり、視界が一瞬揺れる。

「ま、力を失ったのなら当然のようにヨルが倒れそうになるよな」

「そうだな、すまん」

　フレッドはヨルをしっかりと支えたまま立ち上がる。周囲の冷たい風が二人の身体を包むが、その瞬間だけは温かさが感じられた。

「謝るな、これくらいどうってことはない。それに私こそ、……いや謝るのは違うか」

「うん？」とフレッドの肩に担がれながら、ヨルは首を傾げた。

「ありがとう、ここまで来れたのはヨルのおかげだ」

　フレッドは今まで見せたことのない満面の笑みを浮かべている。その笑顔に照れたように頬を染め、「ああ」と生返事をした。

　そのままヨルを支えるように、二人はゆっくりとフィアがいる方へ歩いていく。冷たい風が再び吹き、二人の足音が静かに響いた。

「恐怖の悪魔、私たちの勝ちだ。文句はないよな？」

　フィアたちが倒れているところに近づくと、フレッドはナタの方を一瞬見たが、迷わずフィアに向けて言葉を発した。

「うん、ないよ。君たちは最高に強かった」

「ならば、勝利した私の願いを一つ叶えてもらうぞ」

　フレッドの言葉に、フィアの目が意外そうに見開かれる。

「君は僕の命を狙っていたんじゃないの？」

「私の目的は最初からたった一つ。父上である魔王の封印を解いてもらうことだ」

　フィアはヨルの方をみる。

「君は魔王が復活することに了承なのかい？あれは人類の脅威だけど」

「そのことに関しては、フレッドと俺で話はついている。それに、封印であれば魔王は死んでおらずいずれ復活するということだ。いずれ復活するなら、魔王の脅威がはっきりわかっている今のこの時代がいいだろう」

「そう、わかった。君たち二人が納得しているというのなら僕はそれに従うよ」

　フィアの身体は、顔以外全てが凍りついている。どうにも締まらない。

　フレッドは凍りついているフィアに手を触れる。

「氷よ戻れ（リターナー）」と呪文を唱えると、フィアを包んでいた氷は、みるみるうちに消えていく。

　フィアは身体の自由を取り戻し、ゆっくりと立ち上がった。

「なんで、僕の氷を溶かしたの？少なくともフレッドは僕のことを嫌っていると思っていたんだけど」

　フレッドは鼻をふんと鳴らしながらフィアに背を向けた。

「ああ、嫌っているよ。何せ、父上を封印したんだからな。だけど、悪魔についても理解している。悪魔は約束を破らない」

　ふふ、とフィアはにっこりと笑う。

「甘いね。けど、最近になって知ったけど、そういう甘さは結構好きかもしれない」

　フィアは弟子であるナタを優しく見つめながらそういった。

「じゃあ、約束通り解除するね」

　フィアが目を瞑り、呪文を唱えると、聞き慣れない言葉が空間に響いた。

　呪文を唱え終えるとフィアは目を開け「うん、これで解除されたよ」と一仕事終えたかのように伸びをした。

　フレッドはほっとしたように微笑み、「そうか、よかった」と微かに涙を浮かべた。

　その様子を見て、ヨルも自然と笑みを浮かべていた。

　ひとしきりその喜びを堪能した後、ヨルが提案する。

「さて、目的も達成したことだし、王都エルセリオンの宿屋に帰ろうぜ」

　フレッドは少し思案した後、「どうやって王都にまで戻るんだ？」と首を傾げる。

「そんなのきた時と同じように、扉を潜ればいいだろう？」

　ヨルは疑問を口にしながら、この場所にやってきた時の扉があった場所を見つめる。その時、目が点となり、「あ」と呟いた。

　フィアは呆れたようにため息をついた。

「どうやら、忘れていたみたいだな。フィア、魔法で来た時と同じ、私たちが泊まっている宿屋に移動できるように扉を出すことはできるか？」

「ああ、そうだった。王都に戻るためには僕が転移魔法を用意しないといけないんだった」

　フィアは呪文を唱え始める。

「扉よ（ポート）、導け（ガイデモイ）」

　この荒野にきた時と同じ、扉が魔法陣から出現した。

「さぁ、この扉を潜れば王都エルセリオンに帰ることができるよ」

　意気揚々とフィアは告げた。そんなフィアにフレッドは一歩踏み込む。

「さっきの聞いたこともない呪文は一体なんなんだ？」

「……失われた魔法。古代魔法さ」

　古代魔法かと呟きながら、フレッドは思案顔になる。

「魔王からは聞いていないの？」

「聞いたことはあるが、教えてもらった覚えはないな」

「ちょっと待った！」

　慌てた様子で、ヨルがフィアとフレッドの間に入った。

「ということは、さっきの戦いではまだお前は全力じゃなかったのか？」

「そんなことはないよ。現代戦においては、あれが僕の全力だよ」

　その言い回しが気に入らないヨルは、大きくため息をついた。

「まぁ、いいや。目的も達成しているしな」

「そう、ならよかった」

　ヨルは手を天に振り翳し、そしてフィアに向けて人差し指を指した。

「いずれ俺はあんたに一人で勝って見せるよ」

　フィアは不適な笑みを浮かべる。

「その時が来るのを楽しみにしているよ」

　そして、フレッドとヨルは扉をくぐり、宿屋へと戻って行った。

終章

　魔王が復活し、魔王城に再び活気が満ち溢れた。城の石壁には魔力が脈打ち、冷たい風が場内を通り抜けるたびに、古の力が蘇ったかのように響く。

「フレッドのやつめ、やったようだな」

　センテンは満面の笑みを浮かべながら言った。

「やりましたね。センテン様」

　そばに仕えている魔人も喜びを隠せないのかホッとした笑みを浮かべている。

「ああ、父上の元に行こう」

　センテンは力強く頷き、重厚な扉を開けると、魔王の部屋へと向かった。その日、魔王城は歓喜に包まれ、祭りの賑わいは城全体に広がった。笑い声や歌声、祝福の音が夜空に響き渡る。魔族たちはこの復活を心から祝福し、光と闇が交錯する美しい景色が城を照らした。

　人類と魔族は長きにわたり敵対関係である。しかし、今現在の話に過ぎない。近い未来、ヨルとフレッドの二人の冒険者の手によって、二つの種族間に平和の橋が架かる。だが、今はまだそのことを知らない。

　彼らはただ、目的を達成した喜びと勝利に王都で酔いしれている。夜の空気は冷たく、星々が輝く夜空の下で、二人の笑い声が響き渡る。

　この理不尽な世界で生きて行くための答えはまだ見つからない。

　けど、確かにこの世界でも大事なことがあるのだと気付かされた。

　満足できる死を迎えられるかはわからない。でも、それでもこの一瞬一瞬を大切に生きていこうとそう恐怖の悪魔は思った。

fin